清朝統治期の黒龍江地区における
諸民族の形成・再編過程の研究

１６５２０４２８

平成１６～１８年度科学研究費補助金

（基盤研究（Ｃ））研究成果報告書

平成１９年５月

研究代表者　柳澤　明
早稲田大学文学学術院教授

平成 16～18 年度科学研究費補助金　基盤研究（C）
「清朝統治期の黒龍江地区における諸民族の形成・再編過程の研究」

研究組織

研究代表者：　柳澤　明（早稲田大学文学学術院教授）
研究協力者：　ボルジギン・ブレンサイン（平成 17 年度）

交付決定額

（金額単位：千円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 16 年度	1,000	0	1,000
平成 17 年度	900	0	900
平成 18 年度	400	0	400
総計	2,300	0	2,300

研究発表

（学会誌等）

柳澤 明「フルンボイルのウールド（Ögeled）人の来歴について」『早稲大学モンゴル研究所紀要』第 2 号，2005 年 3 月 31 日

研究成果

（本報告書 1-77 頁参照）

目　次

１．序説　1

　１－１．本研究の目的と方法　1

　１－２．平成 16～18 年度における現地調査と資料収集の概要　2

　１－３．本報告書の構成　6

２．清代黒龍江地区における人口移動と八旗編制の概況　7

　２－１．人口移動の 3 つのフェーズ　7

　２－２．黒龍江地区における八旗の諸類型　12

３．嫩江流域における諸民族集団の形成と再編　15

　３－１．本章の構成　15

　３－２．富裕県　17

　３－３．訥河市　28

　３－４．斉斉哈爾市　32

　３－５．莫力達瓦ダウール族自治旗　34

　３－６．阿栄旗　35

４．フルンボイルにおける諸民族集団の形成と再編　40

　４－１．本章の構成　40

　４－２．エヴェンキ族自治旗　42

　４－３．陳バルガ（ホーチン=バルガ）旗　56

５．結論　70

文献一覧　75

1．序　説

1－1．本研究の目的と方法

本研究の根底にある問題意識は，民族集団は，どのような条件もとで，どのような要因の作用によって，どのように変容していくのか，というものである。もちろん，こうした変容は，たとえば言語，衣食住といった生活文化，社会習俗，宗教・祭祀等，文化複合を構成する特定の要素に焦点を当てて追跡していくこも可能である。しかし，本研究では，どちらかといえば，個々の文化要素ではなく，民族集団の「まとまり」の総体的な再編・変容を問題としたい[1]。そうした「まとまり」は，必ずしも個々の文化要素の共通／異質性の単純な総和ではなく，個別要素の集積を超えた歴史的文脈によって決定づけられる部分が大きいであろう。従って，本研究においては，もちろん個別要素にも目を配るものの，最終的には，そうした大きな歴史的文脈に特に注意を向けるつもりである。

上のような民族集団の「まとまり」は，現在という断面を対象とするならば，直接観察によってある程度再構成することが可能であろうが，通時的変化を問題とする場合には，当然ながら文献史料に頼る部分が大きくなる。本研究が対象として清代の黒龍江地区という範囲[2]を設定したのは，一つには，17世紀以来清朝によって生み出された膨大な檔案（公文書）史料が現存していて，長いスパンでの観察が可能だからである[3]。

清代の黒龍江においては，清朝による八旗制の展開が，諸民族集団のいわば「初期設定」に決定的な役割を果たした。当該地域の現在の住民のうち，19世紀末以降に流入した漢人や「外旗モンゴル人」等を除く諸グループは，17世紀中葉から18世紀前半にかけて八旗組織に組み込まれ，各地に配置された人々に由来する。八旗制の展開は，しばしば大規模な人口移動を伴い，住民の分布・構成を根底から作り変えた。また，八旗は「民族」別編制を基本としており，その基幹単位であるニル（満洲語niru，モンゴル語ではソムsumu）は，ほとんどの場合，特定のエスニックな属性を帯びた血縁・地縁集団（と清朝が認定したも

---

1 もちろん，民族集団の「まとまり」は，必ずしも固定的な境界を持つものではない。本研究でもそのことに注意を払い，叙述の便宜上，集団の境界を一応設定はするが，それを固定的なものとは捉えず，また複数集団間の親和／疎外の度合いをも検討対象とする。とはいうものの，本研究が最終的に問題とするのは，境界の可変性それ自体ではなく，そうした可変性をも含みこんだ「まとまり」の通時的変化である。

2 清代に黒龍江将軍の管轄下にあった地域を指す。その範囲には時期による変化があるが，おおむねアムール本流の中・上流域（松花江との合流点より上流），嫩江流域，嫩江との合流点より下流の松花江流域，および大興安嶺西北麓のフルンボイル地方を含む。大部分は現在の黒龍江省の境域にあるが，一部は内モンゴル自治区（フルンボイル市）および吉林省に画分されている。

3 関連する主な檔案としては，まず「黒龍江将軍衙門檔案」（原本は黒龍江省檔案館蔵，1786〔乾隆51〕年以前の分は，マイクロフィルムの形で東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所等に所蔵）が挙げられよう。これは，黒龍江将軍衙門が発受した文書の控えを，数箇月分あるいは一年分ずつ閉じた檔冊群であり，およそ黒龍江地区において官が関与したあらゆる事柄に関する記録が含まれる。他に，軍機処満文「録副奏摺」（中国第一歴史檔案館蔵），宮中満文「硃批奏摺」（中国第一歴史檔案館，故宮博物院〔台北〕文献館等に分蔵）等の中央政府の檔案中にも，関連する政策決定の過程を伝える文書が存在する。

の）を基礎として編成され，「民族」別の呼称を冠せられた。さらに，八旗制は属地的ではなく属人的なシステムであったから，ひとたび形作られた集団は，所在地が移動することがあっても，特別の事情がないかぎり安定的に維持された。以上からすれば，この地域における民族集団の再編を跡づけようとするとき，基点に八旗組織を据えることの妥当性は明らかであろう。なお，本研究では直接には取り扱わないものの，本研究を通じて得られるであろう成果は，八旗制それ自体の構造と特質の解明とも密接な関わりを有している。

さて，民族集団の「まとまり」の再編過程を解明するという本研究の目標を達成するためには，本来であれば，先述した檔案をはじめとする各種の文献史料を丹念に読み込み，関連情報を抽出していくのが，正当な方法である。しかし，檔案は，そもそも民族誌の記述を目的として作られたものではないので，必要な情報が都合よく盛り込まれているとは限らない。また，民族集団の再編といった事象は，長期にわたって徐々に進行するのが普通で，ある事件をきっかけに劇的に展開するようなことは，そうたびたびはないであろう。要するに，17～18世紀から今日に至る変容の全過程を克明に追跡することは，容易な業ではない。そこで，本研究では，取りあえずの目標を次のように設定することにした。まず，檔案等の諸史料により，八旗制の展開に伴って各集団が再編成され，一通り定着した際の状況を再構成する。清朝の政策に直結するできごとであるため，これに関してはある程度をまとまった材料を得ることができるし，筆者も従来一定の研究を積み重ねてきているので，それらを基礎としてさらに整理を加える。一方，清代に黒龍江の所轄であった地域の中から適当な場所を選定して，現地で聞き取りを主とする調査を行い，現在および近い過去における諸民族集団のありようについて，まとまった知見を得る。つまり，いわば「入り口」と「出口」を押さえるわけである。さらに，「出口」部分に関しては，19世紀末以降，民族誌的記述がある程度まとまった形で現れてくるので，それらを参照して，調査で得た情報に補足を加える。この時期には，土地開放と移民流入に伴って各民族集団の分布や社会・文化が大きく変動したので，その様相が浮かび上がるよう，やや詳しく採録した。「入り口」と「出口」の間についても，ある程度考察を加えた部分もあるが，本格的な取り組みは今後の課題とせざるを得ない。

１－２．平成16～18年度における現地調査と資料収集の概要

1-2-1.平成16年度

8月29日から9月4日にかけて，大興安嶺西北側に広がる内モンゴル自治区フルンボイル市において，聞き取りを主とする調査を行った。概略の日程は以下の通りである。

8月29日（土）：北京⇒フルンボイル市ハイラル→エヴェンキ族自治旗バヤントホイ鎮（南屯）

8月30日（日）：バヤントホイ鎮（南屯）滞在

8月31日（月）：バヤントホイ鎮（南屯）→陳バルガ旗バヤンフレーン鎮→バヤントホイ鎮

9月1日（火）：バヤントホイ鎮（南屯）→アルシャンノール（北ホイ）=ソム→イミン=ソム→バヤンホショー→バヤントホイ鎮

※アルシャンノールのエットゥー=オボー，バヤンホショーのオボー等を観察。聞き取り調査は行わず。

9月2日（水）：バヤントホイ鎮（南屯）→バヤンチャガン=ソムのメヘルトゥ=ガチャー→ジャクトムダン=ガチャー→五泉山→ジャクトムダン→メヘルトゥ→バヤントホイ鎮

9月3日（木）：バヤントホイ鎮（南屯）→陳バルガ旗エヴェンキ民族ソム→バヤントホイ鎮

9月4日（金）：バヤントホイ鎮（南屯）→ハイラル→バヤントホイ鎮

9月5日（土）：バヤントホイ鎮（南屯）→ハイラル⇒北京

※バヤントホイ鎮（南屯）にある鄂温克博物館を参観し，関連書籍等を購入。

《平成16年度の聞き取り調査一覧》

月日	時間	場所	インフォーマント（敬称略）	主な内容
8/29	15:10 ～ 16:40	ハイラル市内	Quwasai Duγarjab, Coγtuocir-un Duγarjab	新バルガ左旗のバルガ人について
8/30	09:00 ～ 10:30	バヤントホイ鎮	Souqan Piljid	エヴェンキ族自治旗のウールド人について
8/30	15:20 ～ 16:40	バヤントホイ鎮	HAAKAR（哈赫爾）	エヴェンキ族自治旗および嫩江流域のエヴェンキ人全般について
8/31	10:00 ～ 13:00	バヤントホイ鎮	杜・道爾基	エヴェンキ族自治旗（旧ソロン八旗）全般について
8/31	16:00 ～ 16:40	バヤンフレーン鎮	Boroltai	陳バルガ旗のバルガ人について
8/31	16:50 ～ 17:20	バヤンフレーン鎮	Buyandelger	陳バルガ旗のバルガ人について
8/31	17:30 ～ 18:20	バヤンフレーン鎮	Ce.Buyandelger	陳バルガ旗のバルガ人について
9/2	11:40 ～ 12:30	メヘルト=ガチャー	ガンスレン	バヤンチャガン=ソムのダウール人について
9/2	13:20 ～ 13:50	ジャクトムダン=ガチャー	ジャクドゥンタイ	バヤンチャガン=ソムのエヴェンキ人について
9/2	16:20 ～ 17:20	ジャクトムダン=ガチャー	フレーバヤル（Küriyebayar）	バヤンチャガン=ソムのエヴェンキ人について

9/3	13:30 ～ 14:20 , 15:00 ～ 17:00	エヴェンキ民族ソム	メ=ホリグ（Me.Qoriγ-a），イ=ブティド	エヴェンキ民族ソムのエヴェンキ人について
9/3	14:30 ～ 15:00	エヴェンキ民族ソム	セレン（Sereng）	エヴェンキ民族ソムのエヴェンキ人について
9/3	17:30 ～ 17:40	エヴェンキ民族ソム	ハダー	エヴェンキ民族ソムのエヴェンキ人（特にソロン=エヴェンキ）について
9/4	14:20 ～ 15:00	ハイラル市内	Coγtuocir-un Duγarjab（再訪）	新バルガ左旗のバルガ人について

本年の調査については，ソーハン=ゲレルト氏（現内モンゴル農業大学副教授），ソーハン=バヤル氏（ゲレルト氏令弟）に，あらゆる面にわたってお世話になった。また，一部の調査地では，ソム（郷）やガチャー（村）の政府関係の方々にも協力をいただいた。調査地点やインフォーマントの選定は，現地の諸事情に左右されたため，必ずしも自由に行えたわけではないが，民族，旧所属旗がなるべく偏らないよう留意した。

また，フルンボイルでの調査の前後，8月26日～27日，9月6日～10日に，北京の中国第一歴史檔案館において関連檔案史料（軍機処「録副奏摺」等）の調査を行った。日本国内では，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所に所蔵される「黒龍江将軍衙門檔案」のマイクロフィルムを調査した。

1-2-2.平成17年度

8月23日から9月1日にかけて，大興安嶺東南側の嫩江流域，すなわち吉林省前ゴルロス蒙古族自治県，黒龍江省肇源市・ドゥルベド蒙古族自治県・富裕県・訥河市，内モンゴル自治区莫力達瓦ダウール族自治旗・阿栄旗，黒龍江省斉斉哈爾市において，聞き取りを主とする調査を行った。ただし，前ゴルロス蒙古族自治県と肇源市は，清代において黒龍江の所轄ではなく，住民の来歴も旧八旗地帯とは根本的に異なるので，本研究においては，比較のための参考データという位置づけにとどまる。従って，下の**《聞き取り調査一覧》**，および本報告書第３章の詳説の中では扱っていない。調査の概略の日程は以下の通り。

8 月 23 日（火）：北京→長春→哈拉毛都鎮→前ゴルロス蒙古族自治県（前郭鎮）

※ゴルロス前旗王府遺址を参観。

8 月 24 日（水）：前ゴルロス蒙古族自治県（前郭鎮）→查干湖→前ゴルロス蒙古族自治県

※前ゴルロス蒙古族中学校，查干湖，郭爾羅斯博物館，妙応寺を参観。

8 月 25 日（木）：前ゴルロス蒙古族自治県（前郭鎮）→明珠園→肇源市→ドゥルベド蒙古族

自治県（泰康鎮）

※「満蒙字碑」，塔虎城，衍福寺，肇源博物館を参観。肇源市民族宗教事務局の方々から聞き取り。

8 月 26 日（金）：ドゥルベド蒙古族自治県（泰康鎮）→富裕県（富裕鎮）

※ドゥルベド蒙古族中学校，龍虎泡公園内の袁寿山墓を参観。

8月27日（土）：富裕県（富裕鎮）→友誼ダウール族満族クルグズ族自治郷登科村→三家子村→五家子村→富裕県

8月28日（日）：富裕県（富裕鎮）→富海鎮大泉子村→訥河市興旺エヴェンキ民族郷（旧団結郷）

8月29日（月）：興旺エヴェンキ民族郷（旧団結郷）→索倫村→訥河市（訥河鎮）→莫力達瓦ダウール族自治旗（尼爾基鎮）

※訥河市雨亭公園内の碑林を参観。

8月30日（火）：莫力達瓦ダウール族自治旗（尼爾基鎮）→阿栄旗（那吉鎮）→査巴奇エヴェンキ民族郷→阿栄旗

※尼爾基鎮郊外の中国ダウール民族園を参観。

8月31日（水）：阿栄旗（那吉鎮）→斉斉哈爾市→同市建華区高頭村→斉斉哈爾市

9月1日（木）：斉斉哈爾市⇒北京

《平成 17 年度の聞き取り調査一覧》

月日	時間	場所	インフォーマント（敬称略）	主な内容
8/27	09:00 ～ 09:30	登科村	蘇玉生	登科村のダウール人，および周辺の諸民族について
8/27	10:30 ～ 11:40	三家子村	孟憲孝	三家子村の満洲人，および周辺の諸民族について
8/27	16:30 ～ 17:30	五家子	常淑芬ほか 2 人	五家子村のクルグズ人，および周辺の諸民族について
8/28	10:40 ～ 12:00	大泉子村	仁欽扎木薩（程勝福），錢占柱	大泉村一帯のモンゴル人と他の諸民族について
8/29	09:00 ～ 11:20	索倫村	金勇	索倫村一帯のエヴェンキ人と他の諸民族について
8/30	8:40 ～ 10:40	莫力達瓦ダウール族自治旗（尼爾基鎮）	楽志徳	莫力達瓦ダウール族自治旗一帯のダウール人，エヴェンキ人について
8/30	17:30 ～ 18:50	査巴奇エヴェンキ民族郷	杜福成	査巴奇一帯のエヴェンキ人について
8/31	16:40 ～ 18:30	高頭村	包福興，祁樹林	高頭村一帯のバルガ人について

本年度の調査に関しては，ボルジギン・ブレンサイン氏（現滋賀県立大学准教授）を研究協力者としてお願いし，氏のコーディネイトに頼った部分が絶大である。また，ドゥルベト蒙古族自治県民族宗教事務局の常宝軍氏にも特にお世話になったし，他にも各市・県・旗の民族宗教事務局のスタッフを種々煩わした。調査地・インフォーマントの選定については，前年同様，民族，旧所属旗のバランスに留意した。

本年度は，中国第一歴史檔案館における調査は，9月1日にごく短時間行ったに過ぎない。「黒龍江将軍衙門檔案」については，引き続き若干の調査・収集を行った。

1-2-3.平成18年度

本年度は，現地調査は行わず，研究の取りまとめに向けて，国内での補足的な資料の調査・収集とデータ分析に力を注いだ。調査・収集の対象としたのは，主として中華民国・満洲国期の地方志，調査報告類である。それらの中には，本研究開始前に入手済のものも少なくなかったが，あらためて，早稲田大学図書館をはじめとするいくつかの図書館・研究機関において調査を行った。特に，満洲国期の文献を多く所蔵する富山大学経済学部資料室では，平成17年度の現地調査対象地に関連する貴重な資料を何点か閲覧・撮影した。また，「黒龍江将軍衙門檔案」についても，引き続き調査・収集を行った。

1－3. 本報告書の構成

本報告書は，５つの章からなる。この「序説」に続く第２章では，檔案を含む諸史料と先行諸研究に基づいて，17世紀中葉～18世紀前半の黒龍江地区における人口移動の趨勢と，八旗制の展開に伴うあらたな住民構成の枠組みの形成過程を，簡潔に概括する。第３章と第４章は，本報告の核心に当たる部分であるが，まず第３章では，平成17年度に調査した嫩江流域の諸民族集団について，聞き取りによって得られたデータを基に，文献による情報をこれと組み合わせて，現在および近い過去（おおむね清末以降）における諸民族集団の状況を詳説し，さらに18世紀以来清末に至るまでの変容の過程とその動因についても，一定の考察を加える。第４章では，平成16年度に調査したフルンボイル地区の諸集団について，同様の作業を行う。調査年次と叙述の順序が逆になるが，それは，八旗制の展開と住民構成の再編が，大興安嶺東南側においてより早期に遡ることを考慮したからである。ただし，第３章と第４章では，それぞれの地域の自然・人文地理的環境と，それに伴う民族集団の実態の相違に応じて，叙述の構成が多少異なっているが，詳しくは各章冒頭の説明を参照されたい。第５章は全体の総括で，八旗組織確立後の清代黒龍江地区における諸民族集団の全般的な再編・変容が，どのような要因の作用によって，どのようなプロセスで進行したかに関して，仮説的な結論を提示する。

２．清代黒龍江地区における人口移動と八旗編制の概況

２－１．人口移動の3つのフェーズ

16世紀以前における黒龍江地区の住民構成を詳細に知ることはできない。それは，第一に，拠るべき同時代史料がほとんどないからであり，第二に，17世紀前半の清朝建国期以降，数次にわたる大規模な人口の移動があって，住民構成が根本的に変動したからである。従って，ここでは16世紀以前の状況については基本的に扱わず，17世紀以降の人口移動の全般的な推移を，3つのフェーズに分けて概述する。

2-1-1.後金（清）建国期

後金（清）が，建国期において，国力（特に軍事力）の充実のために，周辺諸勢力を征討した後，その住民を取りまとめて自国の中心部に移住させる「徙民政策」をとったことは，よく知られている。その対象は，ヌルハチ（太祖）時代（～1626）には，おおむね現在の遼寧省東部から吉林省南部にかけての地域を占めていたマンジュ五部と長白山部（明側史料にいう建州女直），フルン四部（海西女直），および現ロシア沿海地方南部のワルカ部，ウェジ部であったが，ホンタイジ（太宗）時代（1626～43）になると，アムール流域から沿海地方北部にまで拡大した。特に，アムールに沿って，松花江口からやや下流にかけての地域を占めていたフルハ部に対しては，何度も大規模な遠征が行われ，多くの人口が徙民された［吉田1984, 30-46；松浦1986；松浦2006, 222-232］。こうした人口移動は，さらに隣接する諸集団の連鎖反応的な移動を引き起こした可能性があるが，その具体的状況を明らかにすることは難しい。こうして徙民された人口の大部分は，清朝の入関（1644）に伴って，中国内地へ移動した。一方，アムール上流域，ゼーヤ（ジンキリ）河流域には，ソロン部もしくはサハルチャ部と呼ばれる人々がいた。これは後のソロン，ダウール，およびオロチョンに連なる人々と考えられる。崇徳年間（1636～43）になると，清朝はこの地域に対しても数度の遠征を実施し，その結果，一部の人口はフルハ部と同様に徙民されたと考えられる。しかし，大部分は現地に留められ，有力者は清朝から名目的な官職（佐領・驍騎校等）を授与されて，貂皮貢納に従事することとなった［柳澤1997］。

17世紀初頭の嫩江流域は，モンゴルのホルチン部の住地であった。彼らは本来，大興安嶺西北のフルンボイル地方を本拠としていたが，その後南遷し，さらに16世紀末には嫩江流域に移動したようで，後金の史料には「Nonのホルチン」として登場する。ホルチン部は必ずしも政治的統一体ではなく，多くの集団（後に清朝の支配下で10旗に整理される）に分かれていたが，当時各集団がどの地域を占めていたかを正確に割り出すことは難しい。ホルチン部の首長層は，ヌルハチ時代から会盟や婚姻を通じて後金と関係をもっていたが，ホンタイジ時代になると次第に従属性を強めた。それとともに，彼らの一部は，おおむね

1630年代に嫩江から南へ移動したらしい［胡日査2001］。その詳細な経緯については不明な点が多いが，ともあれ，17世紀後半になると，嫩江流域にはドゥルベド，ジャライド，ゴルロスの3集団が残るのみとなっていた。なお，嫩江・松花江の合流点周辺では，ホルチンに従属するシボ（Sibe），グワルチャ（Gūwalca）と呼ばれる集団が，主として農耕と漁労を営んでいた。彼らの由来は明確でないが，おそらく古くモンゴルの支配下に入ったジュシェン（女直）系の人々であろうと思われる。

このように，17世紀前半の東北（満洲）では，後（金）の建国と拡大，およびその過程での徙民に伴って，全般的な人口の南下という趨勢が見られた。しかし，アムール上流から大興安嶺・嫩江流域にかけての黒龍江地区に関していえば，その影響は限定的であったといえる。

2-1-2.ロシア勢力との対峙

(1)アムール流域住民の南遷

1640年代，清朝の入関とほぼ時を同じくして，ロシア人がアムール流域に出現した。先陣を切ったのは，ポヤルコフ（В. Д. Поярков），ハバロフ（Е. П. Хабаров）らの率いるカザーク（コサック）の遠征隊である。彼らは船でアムール本流と諸支流を移動し，要地に小規模な城砦を築きつつ，現地住民から毛皮税（ヤサーク）を取り立て，抵抗を受けた場合は村落を焼き払うなどの強硬手段をとった。こうしたロシア人の活動は，一帯の住民の大規模な南下を引き起こした。すなわち，アムール上流域・ゼーヤ河流域のソロン（Solon）部・サハルチャ（Sahalca）部（ロシア側史料ではトゥングース，ダウール等と呼ばれる）は大興安嶺から嫩江にかけての一帯に，アムール中流域の人々（ロシア側史料ではジュチェリ，ゴグリと呼ばれる）は松花江流域からニングタにかけての一帯へ，それぞれ移動したのである。ただし，前者に関していうと，一部の人々は，ロシア人の出現以前，1630年代にすでに移動を始めていたらしく，その詳細な経緯について，なお検討の余地が残されている［吉田1984, 72；楠木1994；柳澤1997］。清朝は，彼らをニルに編成し，その上部に，それぞれ数個ないし10個程度のニルを束ねる4アバ（aba）・3ジャラン（jalan）を設けた。各アバ・ジャランには副総管（ilhi da）が置かれ，さらに全体を1名の総管（uheri da）が統括した。この組織を全体としてブトハ（butha，満洲語で狩猟の意）と呼ぶが，これは，各ニルの壮丁が貂貢に従事したことにちなむ呼称である。ブトハのニルの中には，嫩江一帯への移住以前から存在したニルがそのまま横滑りしたものもあると見られるが，史料が乏しく，詳細な対応関係を明らかにすることは難しい。なお，この時期から，清朝は旧ソロン部・サハルチャ部を，ソロンとダグール（Dagūr，Dahūr）という二つの民族として把握するようになった。前者はおおむね現在のエヴェンキ族，後者はダウール族に連なるものであるが，4アバは主としてソロン人，3ジャランはダグール人から構成されていた。さらに，康熙20年代以降になると，大小興安嶺の山中に住むオロンチョン（Oroncon，Orocon）人も，逐次ニルに編成されてブトハ組織に編入される。1694（康熙33）年にはアバが増設

されて5つとなり，1731（雍正9）年には，5アバ・3ジャランに八旗の旗色が割り当てられた。このため，ブトハ組織を「ブトハ八旗」と呼ぶこともある。ブトハの壮丁は，ロシアとの戦闘や，後には対ジュンガル戦役にしばしば動員されたが，彼らに対する清朝の扱いは，２－２で後述するように，正規の駐防八旗とは異なっていた［承志2001；柳澤1995；1997］。

一方，アムール中下流域から松花江流域・ニングタ等の地域に移動した人々については，次項を参照されたい。

(2)駐防八旗の拡充

清朝はすでに1650年代から，ニングタ駐防兵をしばしばアムール方面に繰り出して，ロシア勢力に対抗させていたが，本格的な兵力拡充・再配置に乗り出したのは，1667（康熙8）年の康熙帝親政以降である。清朝はまず1668（康熙9）年，クヤラ（Kūyala）と総称されるアムール中流域の旧住民を14個ニルに編成してニングタに集結させ，翌年にはさらに吉林（船廠）に移した。次いで1672（康熙13）年には，ウスリ流域の住民を40個ニルに編成し，1674～75（康熙15～16）年にかけてニングタに移動させた。彼らは新満洲（Ice Manju）と総称されるが，その大部分は間もなく吉林に移駐した（一部はさらに盛京・吉林等に移動する）。この方面の清軍の最高指揮官であったニングタ将軍バハイ（Bahai）も，康熙15（1676）年に吉林に移駐し，以後同地が対ロシア作戦の最大の根拠地となる［松浦 2006, 281-308］。しかし，折から勃発した三藩の乱のため，対ロシア作戦は一時停滞し，逆にニングタ等からは兵力が南方へ抽出されたようである。三藩の乱がほぼ終息した1683（康熙22）年，康熙帝はニングタ副都統サブス（Sabsu）をあらたに黒龍江将軍に任命して，アムール沿岸の黒龍江城（愛琿）への前進を命ずる。以後，同地を前進基地として，清側はロシア側の拠点であったアルバジン（清側呼称は雅克薩）の攻略をすすめ，1685～86（康熙24～25）年の2度にわたる攻囲戦と，1689（康熙28）年のネルチンスク条約を経て，ようやくロシア勢力をアムール流域から一掃することに成功する［吉田 1984］。この間，ニングタと吉林からは，新満洲・クヤラを主とする相当数のニルが黒龍江城に進駐した*。ただし，その約半数は，将軍が1690（康熙29）年に新建のメルゲン城（現嫩江市）へ，さらに1699（康熙38）年にはチチハルへ移駐したことに伴って，最終的にはチチハルに移動することになる［松浦 2006, 300-301］。また，この間，嫩江から大興安嶺にかけて居住し，ブトハ組織に編成されていたソロン，ダグールの一部は，黒龍江，メルゲン両城の駐防八旗に逐次組み込まれていった。一方，対ロシア作戦の展開は，黒龍江地区への漢人系住民の移入の契機ともなった。もともとニングタ・吉林には，漢人の刑事犯・政治犯とその一族が多く流放されていたが，対ロシア情勢の緊迫に伴って，彼らは官荘の荘丁，兵船の水手，駅站の站丁として動員され，一部は戦役終結後も引き続き勤務した。また，特に站丁には，旧三藩の降兵も充当されたようである。黒龍江・メルゲン（Mergen）・チチハル（Cicihar, Cicigar）の三城周辺に設けられた官荘の荘丁，将軍の移駐とともに最終的にチチハル所属となった

兵船の水手，吉林からチチハルを経て黒龍江城に至る駅站の站丁も，多くはこうした流人・降兵を母体としていたと思われる。また，流人とは別に，黒龍江管下の三城には，それぞれ2～4個の漢軍ニルが駐防していた。その来歴については史料が乏しく，詳細は不明であるが，祖籍は山東方面であるらしい。

2-1-3.対ジュンガル戦争

黒龍江地区における大きな人口流動の第3の波は，清朝とジュンガルの抗争に伴うものである。それは，モンゴル方面からの難民や捕虜の移入，黒龍江域内における八旗の再配置，一部兵力の新疆への移駐等の諸要素からなる。

(1)バルガ人の流入

1688（康熙27）年春にジュンガルのガルダン=ボショクト=ハンがハルハ（外モンゴル）に進攻すると，ハルハの諸集団は大混乱に陥り，1690（康熙29）年になると，チェチェン=ハン部の諸侯に所属するバルガ（Baryu，満洲語では Barhū）と呼ばれる人々が，数千人規模で大興安嶺を越え，嫩江一帯に流入してきた。黒龍江将軍サブスは，備蓄穀物を放出するなどして彼らの生計維持に努めるとともに，その最終的な処置について種々計画を練ったが，結局，中央からの指示に基づいて，彼らは吉林および盛京管下八城の駐防八旗に編入されることになり，1691年（康熙30）に嫩江を去った。次いで1694（康熙33）年，サブスは兵を率いて大興安嶺を越え，フルンボイル～ウジュムチン一帯に分散していたバルガ人のいくつかのグループを収容して，チチハル付近に連れ帰った。彼らは8個ニルに編成され，4個ニルはブルデ（現在の訥河市）に駐防し（後にメルゲン→チチハルへ移動），4個ニルはフユル河一帯で遊牧を行うことになった。1701（康熙40）年，遊牧4ニルは，生活状態が悪化したために解体されて，一部はチチハル駐防八旗に編入され，他はブトハの管下に移されてあらたに2個ニル（後に3個に増加）を構成した［柳澤1999］。

(2)チチハル駐防の成立

モンゴル方面の戦乱は，黒龍江地区における清朝の兵力配置，旧来の住民の生活にも影響を与えずにはおかなかった。1691（康熙30）年，嫩江西岸のチチハル村一帯に住むダグール人たちは，前年のバルガ人流入によって被害を蒙ったことに鑑みて，城砦を築いて集居することを請願し，批准を得た。その結果，嫩江東岸のブケイ駅の地に城が築かれ，近在のダグールの壮丁1,000名が，披甲（兵士）として16個ニルに編成され，駐屯することになった。この城は，ダグールの旧村の名をとって，チチハルと呼ばれるようになる［楠木1994；1995］。前述のように，黒龍江将軍は1690（康熙29）年にすでに黒龍江（愛琿）からメルゲンに移っていたが，さらに1699年（康熙38）年，満洲ニル12・漢軍ニル4・ダウール（ソロン）ニル4を率いてチチハルに移駐した。以後チチハルは，黒龍江地区最大の軍事拠点・都市として発展する。一方，将軍移駐後のメルゲンには，ソロン・ダグール

の計 15 ニルと，漢軍 2 ニルが残留した。チチハルがモンゴル高原から大興安嶺を越えて嫩江に下る交通路上にあったことを考えると，将軍の移駐は，清朝の兵力配置が対ロシア用から対ジュンガル用へとシフトしたことの表れと見てよいであろう。

(3)西モンゴル方面からの諸集団の移入

康熙 50 年代以降，ジュンガルとの抗争が再燃し，断続的に衝突が起こる中で，清朝は，ジュンガル側から降伏してきたり，捕虜として収容したりした諸集団を，各地に分散移住させる措置をとったが，その際，移住先として，しばしば嫩江～フルンボイル一帯が選ばれた。ジュンガルが滅亡する 1750 年代までの間に，こうした形で移住してきた集団として，檔案史料にはウールド(Ūlet, モンゴル語 Ögeled)，ウリヤンハイ(Uriyanghai)，タブン(Tabun)，キルギス（Kirgis）等の名が見出せる。これらの人々の中には，次章で言及する五家子村のクルグズ族のように，現在でも弁別可能な集団をなしている例もある。しかし，もともと人口が少なかったこと，八旗の各ニルに分散編入されるケースが多かったこと等の理由によって，現在では民族集団として確認できない例も多い。また，独自の集団としてではなく，ある集団の下位区分――たとえばオボク／ハラ（氏族）――という形で残っていると見られる場合もある。

(4)フルンボイル八旗の成立

1732～35（雍正 10～13）年にかけて，大興安嶺西北のフルンボイル一帯に，あらたな八旗組織が形成された。これは，1731（雍正 9）年にアルタイ方面で清軍が敗北し，ジュンガル軍が東進してハルハ（外モンゴル）一帯が混乱に陥ったことに伴い，清朝政府が急遽後方の配備を整えたことによる。具体的には，1732（雍正 10）年，まずブトハ八旗から壮丁 3,000 名が抽出され，フルンボイルに移動して八旗 50 個ニルに組織された。この通称「ソロン八旗」が，現在の鄂温克族自治旗および陳巴爾虎旗の大部分の住民の起源である。当時の档案によれば，3,000 名の内訳は，ソロン 1,636，ダグール 730，オロチョン 359，バルガ 275 であったが，ソロン・バルガ等の人々は，家（モンゴル式テントーゲルを指すのであろう）を携え，家族を伴って移住したのに対し，ダグール人は暫時壮丁だけが移動し，後から家族を呼び寄せる手はずになっていたという。ところが，フルンボイルは気候が寒冷で農業に適さず，特に農耕に依存する度合いの大きいダグール人の生活に困難が生じたため，1732（乾隆 2）年にはソロン八旗を大興安嶺東南側のアルム河（Arum，現在の阿倫河）上流のオムボチ（Omboci，現在の文布奇）に後退させ，毎年 1,000 名を交代でフルンボイルに派出することが取り決められた。さらに 1742（乾隆 7）年，ダグール 720 壮丁，ソロン 675 壮丁はブトハ八旗に復帰し，残余の壮丁 1,440 名があらためて 24 個ニルに再編されて，フルンボイルに展開することとなった [柳澤 1993b ; 1994b]。この 24 個ニル体制は，その後清末まで基本的に継承される。

一方，1730（雍正 8）年には，ハルハのチェチェン=ハン部に所属するバルガの 8 個ニル

の人々が，ロシア領に逃亡するという事件が起こった。ロシア側は，締結されたばかりのキャフタ条約に基づいて，彼らを清側に送還したが，この事件を契機に，清朝は，チェチェン=ハン部の各旗に分属するバルガ人を引き抜いて，フルンボイルに移す方針を打ち出した。この計画は，現地の抵抗もあってなかなか進捗しなかったが，結局 1734（雍正 12）年から翌年にかけて約 3,700 戸がフルンボイルに移住し，八旗 40 個ニル（披甲 2,400 名）に編成された。これが「新バルガ八旗」と呼ばれるもので，現在の新巴爾虎左旗・右旗の起源である［柳澤 1993a］。なお，1732（雍正 10）年には，それまでチャハル八旗に属していた西モンゴル（ウールド）系の 2 個ニルがフルンボイルに移動し，その子孫は，現在の鄂温克族自治旗の住民の一部を構成している［柳澤 2005］。

(5)新疆への移駐

清朝によるジュンガル平定後，1758（乾隆23）年になって，清朝はイリ・タルバガタイ方面の防衛のために，ブトハ等の各地から兵丁を家族ぐるみ移動させ，永久に駐防させる方針を打ち出した。このため，ブトハからはソロン500名，ダグール500名の計1,000の兵が抽出され，モンゴルを経由して1759～60（乾隆24～25）年に現地に到着し，盛京，内モンゴル等から移動したシボ，チャハル兵とともに，駐防営を構成した［『達斡爾社会歴史調査』26-27］。ただし，現在のところ，ブトハの各旗・ニルからどのような形で人間が抽出されたかについては，十分な史料を検索し得ていない。

２－２．黒龍江地区における八旗の諸類型

2-2-1. 駐防八旗

『盛京通志』（乾隆元〔1736〕年）は，黒龍江管下3城駐防の「民族」別ニル数について，下表のように伝えている[1]。

民族別 / 城名	ソロン	ダグール	バルガ	満洲	漢軍
チチハル	0	16	4	16	4
メルゲン	10	5	0	0	2
黒龍江	1	7	0	16	2

各ニルの披甲数は必ずしも一律ではないが，だいたい 50 ないし 60 である。駐防八旗の官・兵は，基本的には中国内地（直省）駐防と同様，常時軍事訓練を行い，動員に備える義務を負っていた。実際，1710 年代以降，彼らは対ジュンガル戦争の前線にしばしば駆り

[1] ただし，チチハルのダグール16個ニルのうち4個は，実際にはダグールとソロンの混合であったらしく，史料によっては（たとえば西清『黒龍江外紀』）ソロンのニルと記されている場合もある。

出されている。こうした兵役義務の代償として，彼らには俸餉（俸禄・銭糧）が銀で支給された。その額は，たとえば一般の兵卒（馬甲）の場合月 2 両である。しかし，彼らは給与のみに頼っていたわけではなく，城の周囲の田地を耕作して生活していたようである。そのことは，たとえば 1699（康熙 38）年に将軍サブスがメルゲンからチチハルへの移駐を奏請するにあたって，メルゲンでは「霜が早いので，毎年穀物を充分に収穫できない。兵の生活は次第に悪化し，疲弊するに至っている」と述べていることからも明らかである［「黒龍江将軍衙門檔案」1-1699:72，康熙 38 年 3 月 16 日付兵部発黒龍江将軍宛文書］。周藤吉之氏が，『八旗通志初集』に基づき，雍正年間における「駐防八旗の開墾せる旗地」として，チチハル 3 万 5,000 晌，黒龍江全体で 11 万 3,902 晌という数字を挙げているのは，こうした田地のことに他ならない［周藤 1944, 379-383］。ただし，周藤氏も指摘しているように，実際の耕作には奴僕が当たることも多かったと思われる。1710 年代の状況を伝える方式済『龍沙紀略』は，「一夫力作，数口仰食而有余。……故居人置奴婢，価嘗十倍於中土。奴婢多者為富，以其能致富也」と伝えている。もちろん，農耕の他に，牧畜や狩猟等の副業も営まれていたであろう。しかし，彼らの生活圏の広がりを具体的に伝える記事は，檔案史料中にはいまのところ見出せない。

2-2-2.ブトハ八旗

ブトハ八旗の組織の概略については，2-1-2 の(1)で述べた。ブトハのニル数は，あらたな集団の編入や人口増に伴う分蜂によって逐次増加し，1732（雍正 10）年には 108 個に達していたが，既述のように，同年に壮丁 3,000 名がフルンボイルに抽出されると，残余の 58 ニルは次のように再編成されたという［承志 2001］。

	正黄旗	鑲黄旗	正白旗	鑲白旗	正紅旗	鑲紅旗	正藍旗	鑲藍旗
ダグール	10	6	7	0	0	0	0	0
ソロン	0	2	3	4	10	4	3	4
オロンチョン	0	2	2	1	1	0	1	0

各ニルの丁数は，だいたい 50 ないし 80 名である。また，これに先立つ 1728（雍正 6）年には，ブトハの人々の教導のために，従来の各旗 1 名の副総管に加えて，8 名の満洲総管が任命されている。ブトハの壮丁は，駐防八旗とは異なって俸餉を支給されず，基本的に平時は散居して農耕・牧畜・狩猟等の生業に従事し，各丁が毎年 1 枚の貂皮をチチハルに赴いて納付する義務を負うのみであった。そのことは，旗色の割り当て後も同様である。しかし一方，1710 年代以降，ブトハ壮丁は駐防八旗とともにしばしば前線に動員された。ひとたび出征すると，帰還までに数年を要することもあり，度重なる動員は，自給的な生活を送るブトハの人々にとって，特に影響が大きかったと思われる。1733（雍正 11）年のある檔案によると，当時，フルンボイルへの移駐と軍役等への動員によって，実際に貂貢

に従事するブトハ壮丁の数は極端に減少し，わずか134名を残すのみであったという［「月摺檔」8(2):203，ダグール・ソロン等処副管ソジュ（Soju）の上奏］。対ジュンガル戦争がほぼ終結した乾隆25（1760）年，清朝は，当時のブトハの92個ニル中から壮丁2,000名を選び，正規の駐防八旗の半額の俸餉を支給することを決定した（オロンチョン11個ニルのうち5個ニルは対象外）。この措置は，それまでの彼らの功労に報いるものであった。ただし，俸餉を支給される一方で，彼らは引き続き貂貢に従事した。19 世紀以降も俸餉支給対象は漸次拡大され，1883（光緒9）年に至って，俸餉を支給されずに貂貢のみに従事するブトハ壮丁は最終的に廃止される。また，同年には，旧オロチョン5個ニルの人々も，八旗16個ニル（兵1,000名）に再編され，半餉を支給されることになった［柳澤1997］。

2-2-3.フルンボイル八旗

フルンボイル八旗の組織の概略については，2-1-3の(4)で述べた。ブトハから移動した「ソロン八旗」の50個ニルは，既述のように，1741（乾隆7）年には24個ニル（披甲1,440名）に再編されたが，その「民族」別内訳については，4-2-1の文献gを参照されたい。一方，新バルガ八旗の40個ニルは，他の「民族」を交えず，バルガ人のみで構成されていた。さらに，別にウールドの2個ニルがあったことは，既述のとおりであるが，この2個ニルは独自の旗を構成し，鑲黄の旗色を割り当てられていた。フルンボイル八旗の官・兵は，当初から正規の駐防八旗の半額の俸餉を支給されていたが，特別の駐防拠点は設けられず，平時は散居して主に遊牧に従事していた［柳澤1997；1993a；1993b］。もちろん，有事には兵力として動員されるのが建前であったが，新バルガ八旗については，実際に動員された例は史料に見出せない。

３．嫩江流域における諸民族集団の形成と再編

３－１．本章の構成

本章では，平成17年度に調査を実施した嫩江流域の各村落について，聞き取りによって得られたデータと文献史料による情報とを組み合わせつつ，現在見られるような諸民族集団の分布，集団としての「まとまり」，他集団との関係，文化状況等が，どのような歴史的経緯によって形成されてきたかを，以下のような構成で紹介・考察する。叙述に際しては，原則として，調査対象とした各村落を一つの単位として扱ったが，村落レベルでの調査を実施していない莫力達瓦ダウール族自治旗については，旗の全般状況を示した。なお，対象村落の配列順序は，必ずしも調査の時間的順序とは一致していない。

第一に，【概況】として，当該村落の人口と民族別内訳，主要産業等を紹介する。ただし，村落レベルでのデータが得られなかった場合は，行政単位としての「郷」等のデータで代替してある。情報は主として各村落の幹部（村長・書記等），あるいは県・旗の民族宗教局から得たが，必要に応じて文献により補った。また，当該村落の歴史・文化に関わるより広範な情報を含むこともある。各村落（地区）の位置については，適宜地図を挿入した。

第二に，【聞き取り調査の記録】として，各村落の代表的民族集団に属するインフォーマントからの聞き取りに基づいて，当該集団の歴史と現況を紹介する。インフォーマントは，多くの場合，県・旗の民族宗教局あるいは村幹部から，村の歴史に詳しい年輩の人を紹介してもらった。一定のフォームに基づいて聞き取りを行ったわけではないので，得られた情報には精粗の差があり，必ずしも平準化されていないが，おおむね次のような内容を含んでいる。いずれの項目についても，単なる現況ではなく，歴史的推移に関わる情報を得ることに努めた。

1)当該集団が当該村落に住むようになった時期と経緯，その後近年に至るまでの人口流動の状況

2)当該集団の氏族構成

3)言語使用状況・生活文化・生産活動

4)宗教・祭祀

5)隣接する他民族集団との関係

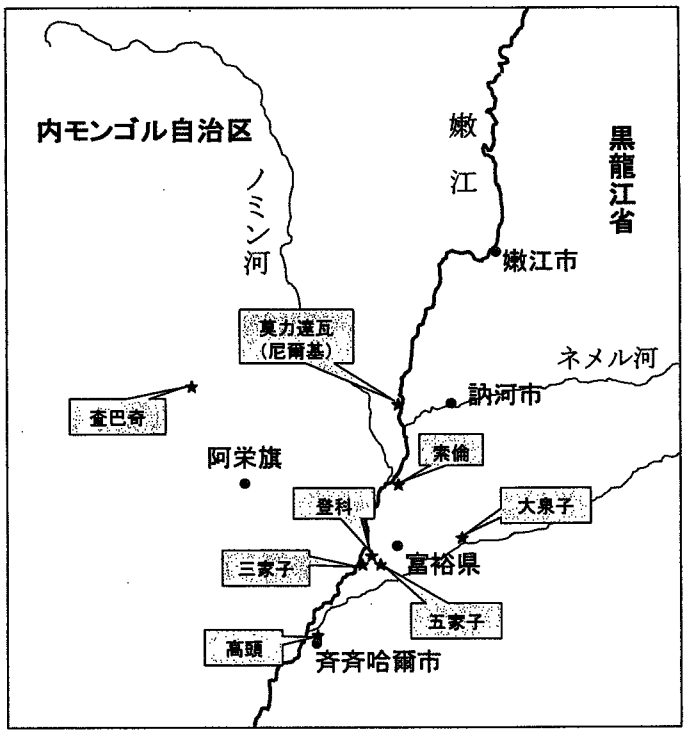
なお，聞き取った内容には適宜取捨選択を加えて整理したが，明らかに史実でないと思われる情報についても，特に補正は加えていない。また，聞き取り調査は，本研究の趣旨からして，特定の文化事象を詳細に記述したり，当該集団における文化複合を総合的に再構成したりすることを目指したものではない。氏族構成や宗教・祭祀など，個別の文化事象に関わる情報も盛り込まれているが，それらは当該集団の歴史的変遷を探る上での指標

として役立つと考えられる範囲で適宜採録したに過ぎず，必ずしも網羅的・全面的なデータではないことを断っておきたい。

第三に，【文献の記載】として，聞き取りデータとの比較対照のために，清代以降の各種の史料・文献から，当該村落（集団）に関する記載を拾い出す。ただし，取り上げた史料は，第１章で言及したとおり，17世紀末～18世紀中葉の八旗制展開期に関するものと，清末以降の民族誌的記述が主で，その間の時期については空白部分が大きい。なお，当該村落（集団）に直結する記載が乏しい場合は，多少範囲を広げて，当該村落（集団）を含むやや広い地域・住民に関わるものも取り上げた。

第四に，【考察】として，以上の情報を総合した上で，各村落（集団）の形成・再編過程を整理するとともに，それを前章で概括した清代～民国期の人口移動・社会変容の流れの中にどのように位置づけるかについて，考察を加える。

【地図１：平成17年の調査地】



３－２．富裕県

3-2-1.友誼達斡爾族満族柯爾克孜族郷登科村

【概況】

◇ 人口1,330，うちダウール族80%，漢族16%。他にクルグズ族，モンゴル族（10戸＋）。

◇ 主産業は農業の他に牧畜。乳牛を飼っている家もある。

◇ ダウール族は400年前に精奇里江〔ゼーヤ河〕から移住してきた。安・何が大姓である。安は本来「徳爾根莫昆」である。他に単・敖・閻・多・呉・郭・鄂等の姓がある。

◇ 単・敖・多・楊の各姓は，相互に通婚しない。安姓は他のどの姓とでも通婚可。約40%は，自民族内で結婚する。

◇ 村内に小廟と神樹がある。

【聞き取り調査の記録】

①蘇玉生さん（ダウール族，1952年生）

◇ 自分はウルケー=ムクンに属する。ダウールにはもと16姓があった。何（ヘセル）・安（デルゲン，この姓が最初にこの地に移住）・敖（アオラ）・呉・鄂・蘇・喬・閻・沃・孟（莫）・多（デゲン）・楊（ヤルス）・単（アオラ）・胡（ト）。他にダウールと自称する「随」姓がある。うち単・敖・多・楊の4姓はアオラ=ムクンに属する。

◇ ダウール人は，愛琿の方から移ってきて，嫩江両岸に定着した。50%は比較的早く，自発的に移ってきたもので，嫩江から5～6里の範囲を占めた。残り50%は強制的に移された人々である。

◇ このあたりは鑲黄旗第3佐領に属していた。

◇ 曽祖父は「羽林軍」に所属し，咸豊年間に戦死した。家には，金牌や骨董がたくさんあった。

◇ 昔は満文のできる人がいた。『三国志演義』など，満文の読物もたくさんあった。

◇ 村には1間の家の大きさの老爺廟があった。各家に祖宗廟があった。

◇ シャーマンのことを「ヤダガン」〔≒モンゴル語iduγan？〕という。

◇ この付近のモンゴル族はウールド=モンゴルに近い。ダウール族は満族ともっとも近い。

【文献の記載】

a）「黒龍江将軍衙門檔案」11-1691:95，康熙30〔1691〕年7月1日付兵部発黒龍江将軍宛文書〔摘録〕：前年，バルガ人が大興安嶺を越えて嫩江一帯に乱入し，附近のソロン・ダグールが被害を蒙ったことに鑑み，チチハル等の村に住むダグールの佐領たちは，今後同様の事件が起きることに備えて，城を築いて集住したいと願い出た。これを受けて，黒龍江将軍サブス（Sabsu）は，チチハルに軍事拠点を設け，ダグールの壮丁1,000名を選んで披甲として駐防させることを提案し，裁可された。その結果，付近の15の村から選抜されたダグ

ールが16ニルに編成され，貂貢を免除されて銭糧を支給されること，彼らの駐防する城は，チチハル村に近い嫩江東岸のブケイ（Būkei）駅の地に築かれることになった[1]。

b）「黒龍江通省輿図総冊」：「〔斉斉哈爾〕城東北一百二十里許，有喀木呢喀屯。居人一百二十八戸。東，南二面系田地，西，北二面系牧場」。

c）『龍江省富裕県事情』：各村落に関する詳しい記載はないが，「寧年郷の沿革」（pp.7-9）中に，大登子科の名が散見する。「五家子，大登子科，束極屯の諸村は索倫族の部落で百数十年の歴史を持っている」。「龍江県第四区警察分所が大登子科屯にあって地方行政を担当納税，民国八年九月頃よりは各村民直接龍江県政府に赴き之を為した。……民国十二年大登子科の警察分所は吉斯保屯（現在龍江県）に移転し，龍江県第四区公安局と称した」。

d－1）『龍江省富裕県一般状況』第一章 県沿革＞第一節 事変前之沿革＞一，設治前之沿革（1a-1b）：「清朝入関，於康熙三十年，設黒龍江将軍，及五城副都統，県境則隷属黒龍江将軍管轄，但彼時人烟星稀，僅有蒙古，打虎力両族，雑居境内，部落三五，即雅洲・大小哈洲・大小登子科等屯是地，遊牧漁猟，未嘗農事，迨康熙末年，始設駅站，県境内之寧年站屯，及龍江県之塔哈站屯，即於此時設立者也，……」

d－2）同上：第三表　　区村調査表

区別	警察署所在地	村屯名称			村組織	距離里数		戸数					
		主村数		副村		距離[2]	距該県[3]	満	蒙	日	鮮	俄	其他
		虚称	実称										
第四区	興楊鎮			李地房子		35	15	15					
				尹地房子		27	25	17					
				董地房子		30	30	13					
				臥龍崗		33	27	12					
			両処房子			30	20	2	24				
			大哈洲			30	20		34				

1 この記事は，必ずしも富裕県一帯に直結するものではないが，【考察】の項で述べるように，同県のダウール人等は旧チチハル駐防八旗所属と考えられるので，その起源に関する檔案を挙げた。

2 正しくは「距県」とあるべきところ。

3 正しくは「距該区」とあるべきところ。

				崗子哈洲		25	35	11	4				
			五家子			30	20		37				
				小哈洲		45	30	20	3				
				徐地房子		30	25	7					
			寧年站屯			70	20	180					
			東房子			60	10	73					
			大登子科			60	30	2	95				
				東極屯		45	15	15	23				
合計			13 屯	14 屯									

e）『達斡爾族村屯録』（102-104）：ダウール語でHAMNIGあるいはKAMNIGという。外興安嶺（スタノヴォイ）山脈南側西段のアルダン河上流にいたアルダン（阿勒丹）=ハラのデルゲン（徳日根）=ムクンの人々が，順治年間頃にこの地に移動して，もとの屯名または部落名によって名づけた。民国年間に，漢族の地方官が「徳日根莫昆」を「登子科」あるいは「大登科」と訳し，「登科」とも略称されるようになった。清代中期までは，チチハルから黒河に至る駅道がこの地を通っていたが，後に駅站が廃され，交通不便な場所となった。民国年間には龍江県に属し，警察分所が置かれ，一帯の行政の中心であった。日偽時期には富裕県第四区に所属し，解放後は三区（寧年，現在の富裕鎮）の管轄となり，1960年以後は達・満・柯友誼民族郷に属している。乾隆年間から多くのハラ・ムクンが混住するようになり，民国年間以後，少数の漢・モンゴル・エヴェンキ等の民族が流入した。しかし，現在でも人口1,312人（297戸）のうちダウール族が958人を占め，民族村といえる。自然条件に恵まれ，牧畜を主とする農牧業が発達している。

【考察】

本村が「鑲黄旗第3佐領」に属していたとすると，それはチチハル駐防八旗の鑲黄旗であろう。チチハル駐防八旗の旗地がこのあたりまで展開していたことを直接に示す史料は見出しがたいが，文献bが本村を「通省四至」の項に記載する一方，『布特哈志略』が，本村を含む後の龍江県所属地域について言及していないことは，本村一帯がチチハルの所轄であったことを示唆する。また，八旗の配置に関する通念からいえば，鑲黄旗が東北を占めるのは自然といえる。なお，本村が「大登科」，「大登子科」など，しばしば「大」字を冠して呼ばれるのは，3里離れたところに本村の一部の住民が移り住んだ「小登科村」があるので，それと区別するためであろう。いずれにせよ，本村がダウール人の古くからの居住地であり，大規模な民族的変動を蒙っていないことは，ほぼ確実である。ただし，清代中期以降に，先住の安姓（デルゲン=ムクン）以外のダウールの諸姓が流入したようである。

3-2-2..友誼達斡爾族満族柯爾克孜族郷三家子村

【概況】

◇人口1,075人，満族が60%，他は漢族が多く，クルグズ族・ダウール族が少数。

◇主産業は牛の飼育。

◇少し満語のできる人が100人，完全にできるのは6～7人。

◇この村はできてから300年以上になる。以前は鑲黄旗所属であった。

【聞き取り調査の記録】

①孟憲孝さん（満族，1932年生）

◇ 当地の満族には，次のような姓がある：呉＜Udulu/Uduru，孟＜Mengjila，陶＜Tohoro，富＜Fudulu，関＜Gūwalgiya，計＜Gicukū，白＜Šanggiyan。

◇ 村の起源については，2つの説がある。

1)計・孟・富の三家の人が，長白山の二道溝から最初にこの地に来た〔それで村名を三家子という〕。最初は2佐領であった。富姓は後に去り，陶姓が後から来た。

2)計・孟・関姓が，現在の村から7～8里離れた河辺で遊牧・漁労を営んでいた。関姓は去り，後から陶姓が来た。

◇ 口伝によれば，自分の祖先に四品官として正黄旗に「封ぜられた」人がいた。愛琿で戦死。祖父は兵士（騎兵）として黒河でロシアと戦った。馬はいまでも飼っている。

◇ 現在でも，同姓は通婚しないのが普通。

◇ 自分の若い頃も，ダウール人との結婚はあった。その後クルグズ人・モンゴル人とも通婚するようになった。日帝期に山東から多くの漢人が来て，次第に定住した。いまでは漢族との通婚も多い。村にはずっと満族が集住しており，漢人は少なかったが，自分が十数歳のころから多くなり，同化が進んだ。ダウール人にもっとも親近感がある。登科村が近いから。

◇ 先祖は地主で，100晌以上の土地と数十匹の馬をもっていた。村の数十戸のうち，10戸あまりが中等で，他は貧困だった。

◇ 住居は「草房子」であった。

◇ 家畜は豚・牛。豚を飼うことをもっとも好み，各家2～3頭ずつ飼っていた。昔は牛の搾乳をあまり行っていなかった（現在は行う）。

◇ 漁労（打魚）の他，「打長工」〔出稼ぎ〕もやっていた。

◇ 最初は蕎麦・稷子（キビ）・糜子（モチキビ）を作っていた。自分の父親が十数歳のころ，玉米・大豆・高粱を導入。50年くらい前から水稲も栽培。現在は玉米・大豆・水稲が主。土地改革のころまでは，稷子・糜子もあった。

◇ 「稷子米」，「豆子飯」，「鯽魚湯」が満族の三大風味。

◇ 現在70歳以上の老人は大体満語を話せるが，日常は使わない。自分は小さいころから漢

語で話していたが，当時の老人たちはみな満語で話しており，漢語はあまり解らなかった。満文の書物は，土地改革のころまであった。『三国志』，『水滸伝』，『花木蘭掃北』など。

◇ 関帝廟があった。各家に家神（画像）があった。これは「保家」の神である。

◇ 解放後も鷹を飼う習慣があった。合作化運動まで。

◇ 歌を歌う習慣はない。小さい頃に聞いたことはない。貴族のやることではない。ただ，婚礼のときの歌があった。ダウール人と共通の「ハーハンバ」という歌で，達斡爾族との婚礼のときに聞いたことがある。

【文献の記載】

a）「黒龍江将軍衙門檔案」1-1699:72，康熙 38〔1699〕年 3 月 16 日付兵部発黒龍江将軍宛文書〔摘録〕：黒龍江将軍サブス（Sabsu）は，「メルゲン城に官・兵を移駐させてから，八年間耕作した。霜が早いので，毎年穀物を充分に収穫できない。兵の生活は次第に悪化し，疲弊するに至っている」として，チチハルへの移駐を奏請した。その結果，メルゲンにダグールとソロンの 11 ニル 650 名を残し，満洲 580・漢軍 220 等の兵 1,050 名，紅衣砲，兵船等は将軍とともにチチハルに移駐することになった[4]。

b）黒龍江通省輿図総冊：「〔斉斉哈爾〕城東北一百一十里許，有西三家子屯。居人七戸。東，南二面系田地，西，北二面系牧場」。「〔斉斉哈爾〕城東北一百一十里許，有東三家子屯。居人三十八戸。東，南二面系田地，西，北二面系牧場」。

c）金啓孮『満族歴史与生活』(23-26)：黒龍江一帯に八旗が駐屯した当時，土地が広く人が少なかったため，兵士の家族は水土のよい土地を選んで自由に住むことを許された。ただし，城から百里以上離れてはならなかった。その頃，チチハルの兵士であった計（計布出哈剌），陶（托胡魯哈剌），孟（摩勒吉勒哈剌）の三家が，チチハルから 95 里離れた嫩江の岸近くに居を定めた。三家だけであったので，満語で「伊蘭孛」と呼ばれ，漢語に訳されて「三家子」となった。しかし，この土地は現在の三家子屯の所在地ではなく，現在の村から西に 7 里離れた，満語で「珠利約姆」，現在「大泡子」と呼ばれる場所である。その後，大泡子一帯が水浸しになったので，現在の三家子屯に移動した。計，陶，孟の三家のうち，計姓は仏満洲であるが，陶・孟の両姓は伊徹満洲である。その後，関（瓜拉哈剌），呉（屋魯古斉哈剌），富（夫義哈剌），趙（愛仁覚羅哈剌），白（拝音哈剌）等の姓が村に移り住んだ。そのうち，関・趙・富の三姓は仏満洲で，他は伊徹満洲である。三家子屯に住む各姓は，チチハル城中や愛輝に同族や本家がある。愛輝駐防〔八旗〕があるとき三家子で家譜の照合を行ったことがある。三家子の満族の祖先は，多くが「披甲」であり，「筆帖

---

[4] 本史料も，3-2-1 の文献 a と同様，富裕県一帯に直結するものではないが，三家子村の満族が旧チチハル駐防八旗に由来すると考えられるところから，チチハルへの満洲ニルの駐防の起源に関する檔案を挙げた。

式」になった者は少なく，まして高官はいなかった。現存の資料によれば，孟姓の祖先である特克慎が三代にわたって受封し，富勒興額が驍騎校から武略騎尉に昇っただけである。三家子屯は辺鄙な場所だったので，清朝時代は，毎年 2 月と 8 月にチチハルに行って将軍の軍事検閲を受ける以外は，屯中で武芸を練り，騎馬・弓術・鷹の飼育・巻き狩りを娯楽としていた。清の中期以後，次第に漁労と農業を行うようになったが，農業を主業とする者は少なく，商業を営む者はんどいなかった。甲兵に支給される銭糧が重要な収入源となっていた。義和団事件の後，ロシア軍が中国領に侵入すると，三家子の人々は，鉄道以南の丘陵やチチハル一帯に避難し，「辛丑条約」後に戻ってきた。辛亥革命後，八旗兵への銭糧支給が停止されたため，満族は経済的な困難に陥った。こうした中で，三家子屯の一人の計姓の寡婦が，チチハルの一人の何姓の寡婦とともに，北京に陳情に赴いたことがある。「九・一八」事変後，三家子屯一帯も満洲国の支配下に入った。当時，抗日聯軍が付近で活動していたが，三家子屯付近には山がないため，屯内に入ることはなかった。解放前の三家子屯には一戸の大地主がおり，全屯 70 余戸のうち 60 戸以上が彼の家に雇われて生活していたが，解放後，反覇闘争の中で悪覇地主の罪行は清算された。

【考察】

生きた満洲語が使われている村として1950年代から注目され，1961年8月にチンゲルテイ（清格爾泰），金啓孮をはじめとする内蒙古大学の調査隊が言語および社会歴史調査を実施した場所である。その後も国内外から少なからぬ研究者が訪れている。従って，今回聞き取った内容のうち，特に村の起源等に関する部分は，研究者たちとのやり取りを通じて，整理されたものになっている可能性があるが，インフォーマントの孟さんが直接記憶している範囲の事柄については，ほぼそのまま受け取ってよいであろう。村を創始した三姓の内訳と，各姓の満洲語名は，今回の聞き取りと文献ｃの記載との間で部分的に食い違うが，これは文献ｃの方を信頼すべきかと思われる。同書が計（計布出）を仏満洲（旧満洲），陶（托胡魯）・孟（摩勒吉勒）を伊徹満洲（新満洲）としているのは妥当である。計布出は，『八旗満洲氏族通譜』巻58に見える「吉普褚氏」に当たると思われるが，そうだとすれば，原住地はイェヘ（葉赫）地方である。托胡魯・摩勒吉勒は，1674～76（康熙13～15）年にニルに編成され，寧古塔・吉林方面に駐防した旧フルハ（虎爾哈）部の諸姓中に見られるTokoroとMeljereに相違ない［松浦2006，288-293］。いずれにせよ，本村が，チチハル駐防八旗の満洲ニルの人々によって開かれたものであることは疑いない。なお，『黒龍江通省輿図総冊』には「西三家子屯」と「東三家子屯」が見えるが，もともと三家子屯は西方の「大泡子」のあたりにあったが，後に現在の位置に移ったという文献ｃの記述と対応するものであろう。

3-2-3.友誼達斡爾族満族柯爾克孜族自治郷五家子村

【概況】

本村の概況については情報が欠如。

【聞き取り調査の記録】

①常淑芬さん（クルグズ族，70歳，他3人）

◇当地のクルグズ（柯爾克孜）人は，290～300年前にアルタイから来た。

◇韓（ガブカン）・常（エチュク）・呉（ダバンドゥル）・蔡／劉（ツァンダル）・司（ケルケス），郎（ベルテル）の各姓がある。

◇同一氏族内では結婚しない。

◇常さんはふつうモンゴル語で話す。他の3人はお互いの間ではクルグズ語を話す。モンゴル語を使う習慣は，ウールドの影響か？

◇2005年にロシアのハカス人が村を訪問。言葉が通じる。顔も似ている。新疆のクルグズ族とは，数字の数え方だけが共通だが，言葉はあまり通じない。

◇旗は作っていなかった。

◇昔の生業は狩猟，牧畜（牛・馬・羊）。農業は，簡単なもの〔ナマク=タリヤ？〕以外はやっていなかった。いまは漢族と同じように農業をやっている。

◇昔はオボーを祭り，シャーマンがいた。

◇昔は長袍を着ていた。

◇クルグズ族内部で結婚する例が多かった。モンゴル人とは通婚していたが，ダウール人・漢人とは通婚しなかった。いまもダウールとの結婚は少ないが，漢人とは多い。かつてはダウール人を仇敵視する観念があった。

【文献の記載】[5]

a）黒龍江通省輿図総冊：「五家子」の名はない。ただし，「城東北一百二十里許，有塔賁雅柱屯。居人二十二戸。東，南二面系田地，西，北二面系牧場。城東北九十七里許，有塔賁郭爾極格爾屯。居人五戸。東，南二面系田地，西，北二面系牧場。城東北一百里許，有塔賁遜扎保屯。居人十三戸。東，北二面系田地，西，南二面系牧場」。との記載がある。「遜扎保」は満洲語sunja boo（五家）であろう。従って，上記3屯がだいたい現在のクルグズ族に連なる人々の居住地であったと考えてよいが，チチハルからの距離から考えると，「塔賁遜扎保」ではなく，「塔賁雅柱」が現在の五家子に当たる可能性が高い。

b）『龍江省富裕県事情』：「寧年郷の沿革」（3-2-1に前掲）：「五家子，大登子科，束（ママ）極屯の諸村は索倫族の部落で百数十年の歴史を持っている」とある。また，付図（富裕県略図）に五家子が書かれている。クルグズ人に関する記載はない。

c）『龍江省富裕県一般状況』「第三表　区村調査表」（3-2-1 に前掲）：五家子が載せられて

---

[5] 清代の黒龍江に関する満文檔案にはしばしば Kirgis の名が現れるが，その中のどれが現在の五家子のクルグズ人に直結するのか明確でないため，ここには挙げなかった。【考察】の項を参照。

いるが，戸数は「蒙37戸」となっている。

d）胡振華「黒龍江省富裕県のキルギス族とその言語の特色」〔摘録〕：

民族名・自称・異称　富裕県のキルギス族の自称は，「和爾額斯」あるいは「格爾額斯」である。……当地のモンゴル族は富裕県のキルギス族を「吉爾吉斯」と呼んでいるが，以前は「達爾諾厄魯特」つまり「西オイラート」とも呼んでいた。一方，当地のキルギス族は富裕県のモンゴル族のことを「鐘厄魯特」，つまり「東オイラート」と呼んでいた。

富裕県キルギス族の沿革　富裕県のモンゴル族はもと西モンゴル・オイラート部に属していて，清の乾隆盛23年（1758年）にモンゴルのコブト地区から移動してきたものである。富裕県のキルギス族は，清朝がジュンガル部を平定し首領ダワチを捕えた時，すなわち乾隆26年（1761年）に，アルタイ山，ハンガイ山一帯から，流刑のため移動させられて来たのである。移動して来る前には，これらのキルギス族はオイラート部に管轄されていた。当時，かれらは後から富裕県にやって来たオイラート・モンゴル人の西側にいたため，「西オイラート」と呼ばれるようになったのである。……

姓の由来　富裕県のキルギス族は移動して来た当時，アイグン，卜奎，ハイラル，呼蘭，巴彦蘇の各地に配置された。全部で六姓（おそらく六部落であったにちがいない）あり，達本，額奇克，噶普韓，散徳爾，博勒特爾，格爾額斯である。その中で，「達本」はモンゴル語で「五」の意味であるため，後に「呉」という姓に改められた。「[噶普韓」は，「韓」の字を取って「韓」という姓に変えられた。「額奇克」は「常」という姓に変わった。「散徳爾」は「散」という音から「蔡」という姓に変えられた。「博爾特爾」は「郎」という姓に変わった。「格爾額斯」は末尾の字「斯」と同音の「司」に変わった。現在では呉，韓，常という姓の人が多く，蔡，郎，司という姓の人はすでに少ない。「劉」という姓は後になって現われたものである。

解放以前の境遇　この地に移動して来てから，かれらは八旗の中の正紅，正藍，正白，鑲黄の四旗に編入されたが，依然として政治的な地位はなく，清軍の中で兵士になるか，苦役に服するしかなかった。他の民族との婚姻も認められず，人口の増加と民族の発展が損なわれてきた。

民族語の使用状況　富裕のキルギス族には，民族固有の言語を話せる人がすでに少なくなっている。五十歳以上の人は聞いて理解できても，流暢に話せなくなっている。三十代以下の人はせいぜいモンゴル語が話せるだけであり，多くの若者はモンゴル語もできず，すべて漢語を用いている。家庭では主としてモンゴル語を使っていても，漢語で話す者もいる。富裕のキルギス語はまさに消滅しようとしている。ここのキルギス族で文字を知っている人は多くはなく，中年や青年の人でモンゴル文字がわかっていても，日常生活の中では漢字を用いている。

キルギス族の歴史　キルギス族は紀元前からエニセイ河上流地域で遊牧を行ない，隋，唐時には，その一部がジュンガル盆地に住んでいた。主として牧畜，狩猟に従事し，原始的

な農耕も営なんでいた。後に，天山一帯へしだいに移動し，パミールやカラコンロン一帯に南下した集団もあった。アルタイ，ハンガイ山一帯にも依然としてキルギス人の一部がとどまっていた。富裕のキルギス族はその地から移動してきたのである。今でも，かれらの中には髪の毛が黄色で，青い眼の人が少なくない。これは史書に記載されているエニセイ河上流の古代キルギス人の状況と一致している。ソ連のアルタイ地方にそのままとどまったキルギス人は，十月革命後，「ハカス」と呼ばれるようになった。

【考察】

「クルグズ族」と認定された人々が集住する村として注目を集め，1980年代以降，胡振華等によって，言語・民俗・歴史等に関する研究成果が蓄積されている[6]。しかし，本村の住民の起源は，現時点では正確にはわからない。清代の檔案史料には，クルグズ人に近いと考えられる集団が，数次にわたってフルンボイル～嫩江一帯に東遷したことを示す記事が見えるが，その中のどれが五家子村のクルグズ人に結びつくかを判定することが難しいからである。清代における五家子の行政上の位置づけも不明である。満洲国期の記録では，五家子の住民は「索倫」とされ，クルグズ人の存在は認識されていない（ただし，イフミンガン旗にクルグズ人がいることは記されている）。登科・三家子の両村から近いにもかかわらず，本村のクルグズ人は，ダウール人に対してはやや疎遠な感覚をもち，むしろイフミンガンのモンゴル人との親近感が強い。駐防八旗の系列に属する諸集団と，西モンゴル方面から後に移住した諸集団とのギャップが投影されていると見るべきであろう。なお，富裕県民族宗教事務局での情報によると，県内のクルグズ族のうち，クルグズ語を話せるのは数名。ふつうはモンゴル語を話しているという。

3-2-4.富海鎮大泉子村

【概況】

◇村の人口は530戸2,010人,うち少数民族54戸126人。モンゴル族が多く，ダウール族は7戸，クルグズ族は1戸。隣の小泉子村は人口1,300，うち少数民族83戸251人。

◇主産業は農業と牧畜（羊，牛）。

◇村のモンゴル語名は吉斯嘎屯（Jisgin ayil,一名Süm-e ayil）

◇村の小高いところにオボーの遺址あり。その下に泉があり，鉱泉水を生産している。

◇オボーの北側が王府の跡地だが，現在は何もない。

【聞き取り調査の記録】

①仁欽扎木薩（Erinčinjamsa）（程勝福）さん（外旗モンゴル族，68歳）

◇当地の原住モンゴル人で，漢姓を翟というのは，本来ジェールメド（Jegermed）=アイマグである。当地にはアイマグはあるが，ハラというものはなかった。翟姓の他に，敖

---

6 文献 d 以外に，Hu & Imart. *Fu-yü Gïrgïs*. 1987；呉 2004 等がある。

(Otoγud) ,銭 (Mingγad)，郝がある。小泉子（Deger-e ayil,一名Öcüken ayil）には張（Čaγan tuγ)，大屯子には趙がある。

◇王府はこの村にあった。一帯のモンゴル人をYek-e mingγanというのは，王がそういうオボクだったから。

◇一帯の原住モンゴル人は新疆から来た。

◇モンゴル語の話せる人は4～5人いるが，文字はわからない。

◇両親は漢語で話していた。自身は7歳で国民優級学校に入学し，モンゴル語・漢語・日本語を学んだ。土地改革以後，モンゴル語はなくなった。

◇土盛りのオボーが2つあり，大オボーの祭礼は陰暦5月6日で，競馬が行われた。小オボーは祭っていなかった。土地改革以後，祭りはなくなった。7月6日には泉を祭った。また，オボー近くに雨を祈る小廟があったが，革命後まもなく破壊。

②銭占柱さん（クルグズ族，57歳）

◇母親は五家子から嫁いできたクルグズ人。父親と妻はモンゴル人。

◇チチハルの蒙旗師範を出た。

◇1945年以降，漢人が増えたが，それ以前はほとんどがモンゴル人だった。

◇日本時代，鉄道敷設の計画があったが貝子が差し止めた。

◇以前は牧畜が主で,かたわら稷子，蕎麦を作っていた。満洲国時代に玉米が入った。農業に慣れないため，多くの人がモリンダワーやハイラルに逃げた。

◇モンゴル=ゲルは昔からなかった。

◇ボー（シャーマン）はいない。

【文献の記載】

a）「黒龍江将軍衙門檔案」4-1757:576および710，乾隆22〔1757〕年9月6日付および29日付フルンボイル署理副都統銜総管Abisik等発将軍衙門宛文書〔摘録〕：Ūletの公Basang，ジャサクAbdasiらの12戸52口がフルンボイルに到着，Tungken・Huyurに安置するために送り出した。

b）『東三省政略』蒙務上，蒙旗編，紀依克明安公〔摘録〕：［光緒］24年，将軍恩沢が巴拝の荒地を出放した際，公府の南30里の長岡子から東南に向かって通肯河西岸の八道・九道溝の間までを，公旗の牧養地として劃留した。32年，輔国公バルジニマ（巴勒済呢瑪）は，もと劃留された荒地のうち，フユル河以北を牧廠として留める外は，みな招民開墾することを請願した。そこで，将軍程徳全は，ジャライド旗の章程にならって，巴拝行局・拝泉県に命じて処理を進めさせた。

c）『黒龍江志稿』巻8「経政志＞墾丈」：光緒32〔1906〕年7月，将軍程徳全，イフミンガン公の荒地の出放を奏請。「查依克明安公系額魯特蒙古，自乾隆二十年間，由新疆搬至通肯

胡雨爾河曠地安挿，原未劃定界址。嗣経前任将軍恩沢於光緒二十四年出放巴拝段荒地，与該公所居拉壌，因派佐領吉爾嘎布会同蒙員前往履勘。計自該公府南三十里之長岡子起，斜向東南，至通肯河西岸八道溝北，九道溝南止，撥予該公人等荒地四十余万垧，作為該属界。奏奉允准，在案。茲拠該公巴勒済呢瑪呈称，現在，札賚特等蒙旗荒地均皆次第放竣，該公深知放荒利益，請将原留荒地，除胡雨河北応酌留生計牧場外，其余均願招民開放等情。……」。1908までに，毛荒456,754.88垧のうち，該旗生計地106,742.2垧を劃留し，剰余の毛荒350,012.68垧のうち，巴拝行局がすでに出放した克俔社一段213,124.5垧は，巴拝段内に帰入。その余の不可耕地25,288.11垧，撤佃毛荒20,250垧（拝泉県に帰して招放を実施）を除き，計91,350垧を続放予定。

ｄ－１）『郭爾羅斯前旗／郭爾羅斯後旗／杜爾伯特旗／依克明安旗　土地報告書』「第四編　龍江省依克明安旗土地報告書」(147-150)：「依克明安旗は……其の現境域は西は龍江省富裕県に北は斉北鉄道線路を境として北安省克山県に，東は同じく克山県に接し南は，呼裕爾河を隔てゝ北安省依安県に接壌している，僅に東西約百支里余，南北の寛さ約十余支里，面積四万五千余晌の全国第一の小面積の旗である。……本旗の人口は，僅に4,032人で内蒙古人は1,758人で漢人は2,259人であるから漢人に対する蒙古人の比率は約77%である。……蒙古人戸数344戸1,758人中本旗人は250戸1,237人で外旗人は94戸521人であるが外旗蒙古人の部族別内容は次の通りである」。

外旗蒙人種別	戸　数	人　口	先　住
ハラチン	27 戸	149 人	熱河，錦州両省
ホルチン	9	36	興安南省
ダヲル	50	287	龍江県，訥河県
キルギス	8	49	龍江県方面
計	94	521	

ｄ－２）同上（146-147）：「外旗人としてはダヲル族断然多く約50%以上を占めてゐるがダヲルは元来本地方の先住民族であるがため蒙古族固有慣習たる同姓不婚の慣習により額魯特族は，其の数少く従つて姓も少なかつたため結婚の相手を本旗人以外に求める場合は居住するダヲルを選んだためであるが之等姻戚関係によって入旗して来た，年代は大約光緒三十年頃だと謂はれてゐる。其後本旗人が開放による土地消失の為漸次牧畜を離れるに当つて農耕労働者を入旗せしめなければならなくなった時先づ第一に入旗せしめた者も亦ダヲル族の労働者であつたと云ふ。ダヲル族に次いで入旗した外旗人は，カラチン，ホルチン，キルギスの順であると謂はれてゐるが共に光緒末年の頃の事であり入旗条件も農耕労働を主としてゐる，熱河に於けるカラチンが漢民族の侵入により早くより土地を失ひホルチンに先き立つて当地方まで北上して来てゐたこともうなづける。西方民族たるキルギス族が現在の龍江県地方より略同年代に入旗してゐるが斯の民族の遷移状況は詳にすることが出来なかつた。漢人の入旗年代はずつと遅れて民国十年頃となつてゐる。漢人の入植理

由は，本旗人の小作人又は年工，月工，日工等の農耕労働者としてである」。

【考察】

清代のイフミンガン旗は，文献ａに見えるように，1757年に西モンゴルから移されてきた公Basang（巴桑）ら52人に起源する。波・少布によれば，後にの他のいくつかのグループも合流したらしいが［波・少布2001，428］，そのことを裏書きする檔案史料はまだ検索し得ていない。イフミンガン旗は，フユル（呼裕爾）河を中心に，嫩江以東，ネメル（諾謨爾）河以南，トゥンケン（通肯）河以西の広大な地域を占めていた（ただし，文献ｃに見えるように，厳密な旗界は設定されていなかったらしい）。光緒24（1898）年以降，順次開放が進められ，1920年代までに拝泉，克山，依安の各県が相次いで成立した（後に克東県が克山県から分立）。この結果，もともと人口の少なかった開放地のモンゴル人は，他へ移動するか，移民の中に吸収されるかして，事実上消滅してしまった。たとえば，満洲国期の『依安県一般状況』を見ると，当時の同県人口8万3千弱のうち，「蒙」に分類されているのは8人に過ぎない。公府を含むわずかな地域は，開放の際に酌留されたが，1948年にはそれも撤廃されて富裕県に編入された（後に一部は依安県に移管）。大泉子はもと公府のあった場所であるが，ここでもモンゴルの言語・文化は消滅に瀕している。今回の調査でも，西モンゴル系の原住モンゴル人にはついに会うことができなかった。満洲国期の文献によれば，一帯には，漢人に先がけて，ダウール・ハラチン・ホルチン・クルグズの人々が，姻戚関係によって，あるいは小作人として流入したようである。旗地の狭隘化と，こうした移民の流入は，内モンゴル東南部の他の諸旗と同様，本旗においても，農耕化の一層の進展と，社会・文化の変容を招いたであろう。クルグズ人の銭氏によれば，1945年までは漢人はわずかで，ほとんどがモンゴル人だったというが，一方，外旗モンゴル人の仁欽扎木薩（程）氏によれば，両親とも漢語で話していたという。こうした話からも，当地における社会・文化変容が，初期の段階では，漢人移民によってではなく，外旗モンゴル人等によってもたらされたことが窺える。

３－３．訥河市

3-3-1.索倫村（訥河市興旺鄂温克民族郷索倫村）

【郷の概況】

◇全郷の人口は3.6万，うち鄂温克族500人，少数民族の合計は700人。

◇1987年，興旺民族郷が分立。2004年に団結郷と合併し，郷政府は旧団結郷に置かれることになった。合併前の興旺の人口は1.2万。

◇黒龍江省で唯一の鄂温克族郷である。

◇索倫村は，昔は索倫公社で，1982年に他のいくつかの公社と合併。人口1,064，うち鄂温

克族263人。

【聞き取り調査の記録】

①金勇さん（エヴェンキ族，1926年生〔ただし陰暦臘月の生まれなので，正しくは1927年〕》

◇精奇里（Jingkiri）ハラに属する。

◇索倫村は，できてから400年になる。

◇付近のエヴェンキ人には7つの「部落」（村）があった。ガプカ（GabG-a）=アイル（＝索倫村），ホロゴンタイ=ガプカ=アイル，ジルニ，モルグケ，バイルル，グイルト（甘南），ソロク=アイル〔各村の位置関係については地図あり〕。

◇姓としては涂（トゥクドン），金（ジンキリ）などがある。

◇以前はエヴェンキ人の章京がいた。涂姓で，7つの村を管理していた。

◇この辺りは正紅旗であった。衙門は莫旗のニルギの北6里のGibciにあった。

◇「将軍」？であったオーシンガという人物の石碑がこの村にあったが，いまは訥河市の博物館にある。

◇30歳以上の人は，いまでもエヴェンキ語を話せる。

◇土地改革以前は，一帯の村に1,000人以上のエヴェンキ人がいた。索倫村には200以上。

◇農業としては，玉米・大豆（黄豆）・雑豆を作っている。稲子は失敗した。家畜としては牛・羊・豚がいる。

◇以上は漢族が来てからのことだが，土地改革以前は稷子・蕎麦を作り，牛・馬・羊・豚を飼っていた。漁労，狩猟も行っていた。狩猟は，嫩江の向こう側で麅子・兎・飛龍などを獲った。

◇昔は船を使ってチチハルとの間で物資を運搬していた。

◇昔，訥河に関東軍が駐屯していた。

◇以前は「長袍子」，「皮衣服」を持っていた。いまは省博物館にある。

◇2人の娘が鄂温克族に嫁いでいる。他に1男１女あり。

◇索倫村では，5月にオボーを祭っていた。鍋の中に神体を入れて土をかぶせたものだった。楊樹屯（ホロゴンタイ）では，神樹を祭っていた。オボーも神樹も，祭り方は，周囲を回り，酒をかけて雨を祈り，飲み食いをするというもの。昔は，索倫村のオボーにイフ=ミンガン旗から9人のラマを招いて祭りを行ったという（話に聞いただけで，自分は見ていない）。土地改革のときにオボーを掘り返したが，中には何もなかった。そのとき，神樹も持ち去られた。

◇昔は銅鏡をかけたシャーマンがいたが，土地改革以後はなくなった。

◇伝統的な住居は「草房子」。昔は「撮羅子」に住んでいたかもしれない。

◇いまでも残っている習慣としては，「請安」がある。

◇達斡爾族による付近の地名の呼び方：齊齊哈爾→ホスンダウル，莫旗→西バトカン，訥河→東バトカン，嫩江→メルゲンダワ。

◇通婚は漢族相手が多い。他の民族の中では，達斡爾族がもっとも多い。
◇昔は満文を解する人がいた。

【補足：訥河市雨亭公園の碑林】

1)「大清黒龍江布特哈正紅旗誥封武略即英興阿之墓」(光緒丁丑年)〔満漢〕
2)「四川雲陽県　涂公起献　端廷大人墓」(民国20年)
3)〈富源将軍墓碑〉〔文字磨滅〕
4)「■天承運皇帝制曰…」〔満漢，残欠〕／「原品休致都統内大臣総諳達奮勇巴図魯諡勒勇阿」(道光辛丑年春二月)
5)〈威遠将軍碑〉「…打牲処鑲黄旗満洲■恩河都尓奔欽屯…」／「大清嘉慶四年四月」
6)〈崔福坤徳政碑〉(民国20年)

※1)の碑が，金勇氏の語った「オーシンガ」の碑に当たると思われる。とすれば，索倫村はブトハ正紅旗に属したことになる。

【文献の記載】[7]

a)「黒龍江通省輿図総冊」:「〔布特哈〕衙門南九十里許，有蘇爾嘎爾屯。居人五戸。東，南二面系田地，西，南二面系牧場。衙門南九十里許，有嘎布喀屯。居人四十戸。東，南二面系田地，西面系牧場。……衙門南一百一十里許，有木爾恭奇屯。居人十一戸。東，南二面系田地，西，北二面系牧場。衙門南一百二十里許，有柏嚕爾屯。居人十七戸。東，南二面系田地，西，北二面系牧場。……衙門南一百里許，有貴勒図屯。居人七戸。西，北二面系田地，東，南二面系牧場」。

b)『布特哈志略』:「嫩江左岸自墨爾根即嫩江県界博爾汽屯起南至斉斉哈爾即龍江県界擺渡屯各屯如左。……嘎樹喀涂克敦氏，並有精奇里氏雑居。大嘎布喀又名章音屯，涂克敦氏。楊樹屯涂克敦氏。榛子街涂克敦氏。小間房又名穆爾滚奇，涂克敦氏。大間房又名穆爾滚奇，涂克敦氏。罷渡屯又名白羅爾，係涂克敦氏」。

c－1)『訥河県一般状況』:嘎布喀一帯に関する特別の記述はない。第三章「風俗」(6)に，県内の民族全般に関する記述があり，「訥河由斉々哈爾至黒河旧為駅站之孔道，殖民最久。原有土着分索倫，達呼爾，鄂倫春等族，漢軍站丁，回族次之。漢民魯民，鄂民又次之。索倫又名鄂倫春，係通古斯部分種族，即満洲之別[8]。其語言文字等項与満洲大同小異」と見える。

---

[7] 清代のブトハ八旗の構成，分布に関する概括的な情報は檔案から得られるが，正紅旗の居住範囲の詳細や，まして本村の起源に直結するような記述は，いまのところ見出すことができない。【考察】の項を参照。
[8] ここには本来「種」または「族」字が入るべきところであるが，脱落している。

c－2）同上：第三号　区村調査表（69）

区別	警察署所在地	村屯名称			村組織	距離里数		戸数					
		主村数		副村		距県	距該区	満	蒙	日	鮮	俄	其他
		虚称	実称										
三区	拉哈站			興隆川	由甲牌組織而成	70	16	13					
				占音屯	〃	86	18	116					
				興隆溝	〃	75	20	17					
				三処房子	〃	78	21	18					
				楊樹屯	〃	90	15	37					
				榛子街	〃	90	17	7					
				大間房	〃	115	18	14					
				百禄屯	〃	120	16	15					

【考察】

古くからのソロン（エヴェンキ）人の村。明確ではないが，往時は7つの集落が1ニルを構成していた可能性がある。聞き取りによる情報と，訥河市の碑林にある光緒年間の碑文とを照合すると，本村一帯はブトハ正紅旗に属していたことがわかる。承志氏の研究［承志2001］等を勘案すると，正紅旗は旧アラル=アバを基礎とし，主な居住地は嫩江右岸（西方）のノミン（諾敏）河一帯だったようである。ノミン河の河口はちょうど索倫村の対岸近くにあるので，正紅旗の一部が嫩江左岸に展開していてもおかしくはないが，各ニルの分布の詳細は，現在のところ檔案等からは割り出せない。清末以降の丈放についても史料が十分でないが，南隣の富裕県よりは土地開放・移民の影響が大きかったと見られ，周辺の小村はほぼ消失し，中心集落だけに一定のエヴェンキ人人口が残る形となっている。満洲国期の文献ｃ－１では，県内の土着種族として索倫の名が挙げられているが，ｃ－２の「区村調査表」では「満」の人口中に包含されているようで，索倫人は弁別できない。現状では，言語はなお完全には失われていないが，他の固有文化はほぼ消失しているようである。旧時オボー祭にイフミンガン旗からラマを招いたという伝承の中に，モンゴルとのつながりがかすかに認められる。

３－４．斉斉哈爾市

3-4-1.建華区高頭村

【概況】

本村の概況については情報が欠如。一部は次項中に含まれている。

【聞き取り調査の記録】

①祁樹林さん（モンゴル族〔バルガ〕，66歳），包福興さん（外旗モンゴル族，75歳）

◇村の人口は150戸，500人。バルガ人の姓としては，祁（シプシヌート），黛（タブングート），胡，計（ジュルグヌート）がある。他に張姓，鄂姓（ダウール）がいる。

◇付近で他にバルガ人のいる村は，高峰（タブンチェンが2～3家），一間房（祁，戴），査干諾爾，翁海，双図など。また，大巴虎，小巴虎という地名があるが，バルガ人がいるかどうかは不明。

◇当地は旧時正黄旗5佐に属していた。

◇ハイラルの陳旗〔ホーチン=バルガ旗〕から，4人の将軍が四大姓を率いてきた。80里先にある五家子のクルグズ人を見張るために来た。

◇包氏は，チャハル八旗から200年位前（清朝宣統年間？）に「皇上の馬群」を追ってこちらへ来た。最初は都爾門沁（富裕県塔哈郷）に4戸で来て，その後単身で高頭へ来てから54年になる。

◇当地では昔から農業が主であった。羊・牛も飼い，「奶豆腐」を作っていた

◇50歳以下の人はモンゴル語を話せないが，年輩の人の中には今でもかなり話せる人がいる。祁氏の父母はモンゴル語を話すことができた。

◇「チャス=オボー」というオボーがある。以前は6月24日?に祭っていた。ラマを呼んで祭り，鬼を抑えておく。ラマは「ボー=ラマ」といい，騎馬で来た。オボー祭は，祁さんが5～6歳のころ（1940年代後半）まで行っていた。その頃までは騎馬の習慣があった。老爺廟はオボーの南隣にあり，一緒に祭っていたが，文革のときに破壊。

◇八旗蒙古の特徴として，布人（仏）を家の西南角に祭る。いまでは仏は信じていない。戴姓にはサマンがいたが，祁姓にはいなかった。

◇この村の祁姓から，清末に墨爾根将軍になった人がいて，前高頭という土地に「封ぜられた」。また，祁家の老爺でボショク〔領催〕に任じられた人がいる。

【文献の記載】[9]

a）「黒龍江将軍衙門檔案」2-1701:325，康熙40〔1701〕年11月11日付黒龍江将軍発理藩員宛文書〔摘録〕：Būrde〔現在の訥河市附近〕に駐防しているバルガの4個ニルをメルゲンに

---

[9] 多くはチチハル駐防八旗全般に関するもので，本村に特化したものではない。3-2-2 の文献 c をあわせて参照されたい。

移動，Huyur河一帯で遊牧しているバルガの4個ニルのうち，180余丁をブトハ八旗に編入，140丁はチチハルの満洲ニルに編入する。

b）「黒龍江将軍衙門檔案」2-1706:325，康熙45〔1706〕年7月6日付黒龍江将軍Boding等の上奏〔摘録〕：メルゲンに駐防しているバルガの4個ニルを，チチハルに移動。

c）「黒龍江通省輿図総冊」：用字が異なっているが，おそらく次の記載が高頭村に相当すると見られる。「〔斉斉哈爾〕城東北二十里許，有後高図屯。居人二十二戸。四面均系田地。城東北十八里許，有前高図屯。居人十五戸，四面均系田地」。

d）『黒龍江志稿』巻8「経政志＞墾丈」：光緒三十二年四月，将軍程徳全は省城附郭の荒地の出放を奏請。「黒龍江省城附近荒地，旧為本処旗営・站丁開墾，分為八旗・水師営九界。所種無多，并不徴租。現査各界之内，曠土尚属不少。長此棄置，未免可惜。自応派員清査，一律出放。惟是項荒段多系沙漠，土脈以上瘠薄，每垧収糧八・九斗或五・六斗不等，視他処肥沃之地，両相比較，何止倍蓰。査通肯等処荒地，每垧年可獲糧六・七石，每年徴収大小租銭六百六十文，而此処閑荒既瘠，似応察度情形，減価出放。除旗戸原種熟地仍令照耕種，不納官租外，其余丈出閑荒・葦塘，概擬減半収価。先盡本処旗戸認領，第垧収価一吊五十文，迨至六年升科，亦減半徴収大小租銭三百三十文。如旗戸無力認墾，再招民戸，亦照減半章程辦理。……」。1910年末までに，毛荒112,274.1882垧を出放，また旗丁・屯民の熟地152,251.2497垧，房基・墳廟・義地・牧場31,544.2831垧を勘丈（うち屯民の房基・墳地1,143.471垧，熟地17,735.6465垧については1909年より起科，屯民の熟地727.3995垧については1910年より起科）した。

【考察】

チチハル北郊にあり，「民族村」と称している。「黒龍江通省輿図総冊」によれば，かなり古い起源をもつ村落らしい。このような都市近郊に，旧駐防八旗のバルガ人コミュニティが残存しているのは，もともと駐防八旗の人々がある程度密に住んでいたため，移民流入による社会変動が逆に緩和されたからかもしれない。清末の土地開放の際も，「旗戸原種熟地仍令照耕種，不納官租」とあるように，旗民の熟地については一定の配慮が加えられたようである。本村のバルガ人の生活文化には，モンゴル的要素と八旗的要素，農耕と牧畜の混交が見られる。おそらく彼らは旧時，「バルガ」，「旗人」，「モンゴル」という重層的アイデンティティをもっていたと想像される。また「クルグズ人を監視するために，ハイラルの陳旗から来た」という伝承は，正確ではないが，彼らの自己認識の一端をうかがわせるもので，興味深い。いつ最終的にモンゴル族と認定されたかについては，調査未了である。

３－５．莫力達瓦ダウール族自治旗

3-5-1.旗全般，ダウール人全般[10]

【聞き取り調査の記録】

①楽志徳さん（ダウール族〔達斡爾研究会副会長〕，1935年生）

◇ダウール人の広がり：北は鄂倫春族自治旗～イルフリ山，東は克東，南は梅里斯，西は扎蘭屯西街まで。

◇ダウール人には，もともと18の姓があった。

◇旧時のブトハの8アバのうち，5アバはエヴェンキからなり，人口は少なかった。3アバはダウールからなり，人口は多かった。鑲黄（ドルベルチン）・正黄・正白がダウールの3ジャランに相当する。buthaは満語。ダウール語ではbatqanで，「打猟」の意である。乾隆のころ，エヴェンキ族〔とダウール族〕はフルンボイルに移動したが，ダウールの一部（26佐）は戻ってきた。

◇1651年，ハバロフがアムール一帯を侵略すると，ダウール人はヤクサ附近のクイグダル城で抵抗した。クイグダルという70歳の老人が率い，1,500人（うち成丁300）が立てこもったが，15人だけが生き残った。ダウールは清朝に納貢していて，そのとき清兵が50人来ていたが，傍観した。エヴェンキ，オロチョンもダウールと共に戦ったが，ロシア側についた者もいる。

◇軍閥時代に大きな人口の流動があった。たとえば，嫩江の東の訥墨爾河から，江西への移動があった。江西のクイルチェン〔奎力浅，尼爾基西北95里〕屯は，江東の友誼一隊（楽氏の生地）・二隊（旧名はやはりクイルチェン，一帯に5～6屯があった）〔奎力浅，訥河市西北58里〕の人が移住して作ったもの。同様に，現在のアラクチェン〔阿爾哈浅，尼爾基北70里〕屯は，江東の同名の村〔阿爾哈浅／二克浅，訥河市西50里〕が移ったもの。コミルティ〔坤密爾提，尼爾基西北130里〕屯も移住によってできたものである。

◇古くから作っていた作物は，燕麦・稷子・蕎麦である。

◇八旗のオボーは，副総管が管轄。1942年，デンテケ=ヌトクの人々が，〔移住？〕300年を記念して，旗のオボーを祭った。一方，哈達山には総管の祭るオボーがあった。ダム建設を契機に，2001年6月28日に両者を合併。現在は，達斡爾学会・旗委・旗政府が主催して，競馬・射箭・相撲・曲棍球・舞踏を行う。総管衙門のオボー祭には，エヴェンキ人，漢人も参加。民間のオボーと「二神」は各屯にあり，偽満時期まで祭っていたが，その後不定期になった。

◇ダウール化したエヴェンキを「ホンコル」と呼ぶ。現在の民族区分からいえばエヴェンキに属するが，ダウールとの関係が密接で，通婚も行い，区別がつきにくい。自分の奶

---

10 本旗での聞き取り調査の内容は，旗全般，ダウール人全般に及ぶので，【概要】と【文献の記載】は省略した。

奶〔父方の祖母〕もエヴェンキ人。ただ，「ホンコル=ホルジングイ〔怒りっぽい〕」という言い方があるのは，彼らへの反感を示している。

【考察】

特定村落の調査は行わず，旗政府の一角にある「達斡爾学会」で話を聞いたのみ。旧ブトハ総管衙門の所在地。付近は大体ブトハ鑲黄，正黄の両旗に属していた。一帯では，「軍閥時代」に大きな人口の流動があったという。特に，嫩江の東のネメル（訥謨爾）河流域（旧ブトハ正白旗）から，丈放の結果生活基盤を失った多くのダウール人が，江西に移動したようである。彼らは多くの場合，江東にあった昔の村と同名の村を築いて定着した。本旗は内モンゴル自治区に属するが，モンゴルとは異なる，ダウール独自のアイデンティティを強調する戦略をとっている。尼爾吉鎮郊外にある「中国達斡爾民族園」には，ダウールの英雄「薩吉哈爾迪汗」，「桂古達爾」等の像が据えられ，そのことを象徴している。

３－６．阿栄旗

3-6-1.查哈奇鄂温克民族郷

【概況】

◇郷の総人口は13,000，うち鄂温克族は900。

◇当地のエヴェンキ人は，1653年に黒龍江から移動してきた。図克敦アバに所属。甘南県興隆村（ホトンアイル）を経てこちらへ来た。查巴奇に来てからは200年になる。次第に広がって，約20屯が阿倫河両岸に分布していた。

◇杜・那・涂の3姓が部族聯盟（ウルクタン）を作っていた。

【聞き取り調査の記録】

①杜福成さん（エヴェンキ族，1934年生）

◇自分は大杜拉爾（ドゥー ドゥラル）ハラである。ドゥラル=ハラには，ドゥーの他に，ニシフン（小），シッパン，トムシュンの各ムクンがある。查巴奇には，杜姓（ドゥラル=ハラ）の他に，那（ナカタ，ドゥーとニシフン），涂（トゥクドン，ドゥーとニシフン）の計8ムクンがある。ただし，大小ドラル，大小ナカタ，大小トゥクドンが原住で，シッパンは雅魯から，トムシュンは訥莫爾から移ってきたものである。

◇800～900人がフルンボイルに移動。その後新疆にも数百人が行った。後にトムシュン=ドラルの300人が訥謨爾河から移住してきた。

◇他には蘇・ト・付・何（後の3つは雅魯方面から移住）があった。100年前までははっきりしていたが，次第に他の民族と融合した。

◇昔は一帯にエヴェンキ人の村がたくさんあったが，いまは漢人の村になった。オムボチ，

モルディン，ナハタには，いまもエヴェンキが住んでいる。他にウシメン（大ソルホチ？），ナジなどがあった。

◇涂克冬（トゥクドン）アバは1691年に成立。1731年に鑲白旗となった。世襲の5佐領があった。旗政府はモルディンにあり，副総管がいた。莫旗の檔案館には総管衙門の檔案が100冊ほどもある。このアバだけ〔河名を用いず〕トゥクドンといういのは，トゥクドン氏が多かったからだろう。

◇音河のエヴェンキ人は，1643年，ボムボゴルの乱の後に移ってきた。フラルジ（ホトンアイル）→雅魯河→訥謨爾河と移動し，音河に定着。ト・韓・何・杜（シッパンドラル）・戴という姓がある。彼らは1903年に鉄道が建設されたとき，アロン河に移ってきたが，当地のエヴェンキ人とはあまり関係がよくなかった。何年か後に元の土地へ帰った。また，1948年に一部は外モンゴルへ逃げた。

◇昔は草房（サシージュ）に住んでいた。

◇農作物は，稷子米（オルガンジョールト）をやや多く作っていた。炒米にする前の原穀を格根廟に売りに行き，馬・牛を買ってきた。他には燕麦（ホレンプ？），蕎麦（ニゲ），蔬菜など。伝統的な農耕は，「漫撒子」式で，馬犂・牛犂で耕した後，種を撒き，木の枝でならす。草が生えていれば，それも一緒に刈り込む。

◇木炭を，百輌の車を連ねてチチハルに売りに行っていた。

◇1960年まで，家の周囲で狩猟を行っていた。狩猟は，収入の80%を占めていた。狩猟には騎馬で出かけることが多かった。漁労は補足的で，徒歩で出かけた。狩猟に出るときは「撮羅子」に泊まる。詳しくいうと，「打猟」と「出猟」は異なる。前者は10里程度で，その日のうちに帰ってくる。後者は100里にも及び，冬季・夏季に1～2箇月かけて行う。銃には「火槍」，「ベルダン」，「洋炮」などがあった。獲物は獐子・狍子・野猪・鹿・カンダハン・猞狸など。自分は射止めたことがないが，虎や豹（金銭豹）もいた。

◇家畜としては牛・馬・驢があった。羊は飼っていない。

◇「老客」といわれるダウール人，漢人は，査巴奇にも住んでいた。

◇査巴奇には神樹とオボーがある。流域でここだけ。いずれも，査巴奇の人々だけが祭る。神樹の祭祀は陽暦6月18日（農暦5月5日）。根の周囲に石を置いて囲ってあった。財神は，ダウール語でバイナチャン，エヴェンキ語でバインバカンという。また，トーテムとして，両頭の大蛇を祭る。バトカン（祖宗神）は，家ごと，ムクンごとに祭っていた。皮で作る。各ムクンに一人のサマンがいた。老サマンが死ぬと，他所のサマンを呼んできて，次のサマンを選んでもらう。ラマはいない。

◇鄂旗〔鄂温克族自治旗〕のエヴェンキ人とは，行政上の関係があるほか，通婚もときどきある。

【文献の記載】[11]

---

[11] 3-3-1の正紅旗と同様，この鑲白旗についても，各ニルの居住範囲や，本村の起源に関する檔案は今の

a）「黒龍江通省輿図総冊」:「衙門西南三百五里許，有察勒巴奇屯。居人十戸。東面系田地，西，南，北三面系牧場」。

b）『布特哈志略』:「阿倫河上游各屯姓氏如左。……查巴奇屠克敦杜拉爾氏雑居」

c）『阿栄旗事情』(1-3):「布特哈八旗の編成前に於ては達呼爾三個札蘭（副官）索倫五個阿巴，（満語にては囲場即ち狩場の謂なり）に類別されたるものを……又前記索倫五個阿巴は下五旗即ち正紅旗，鑲白旗，鑲紅旗，正藍旗，鑲藍旗に改編し正紅旗は努敏河及び嫩江一帯に分駐し，鑲白旗は格尼河に，鑲紅旗は阿倫に各々駐屯防備の任に当り右記鑲白，鑲紅両旗の旗公署を阿倫河地方に合設せり」「布特哈総管公署の所在地は嫩江西崗依布奇屯たりしが光緒二十年に至り，総管職の裁徹せらるゝあり次いで布特哈副都統に改め副都統衙門も亦「依布奇屯」より訥漠爾河博爾多站（即現訥河県城）に遷移され本旗管下の阿倫河格尼河一帯は索倫民族即五旗の一たる鑲藍鑲白の二旗を以て構成し庚子拳匪の乱に際するや露兵の進攻暴虐に蹂躙せられ更に光緒三十一年副都統裁徹に伴い東西路の総管制実施を見東路総管公署は博爾多站に西路総管公署は依布奇屯に各々設置せられ本旗地域は凡て西路総管の統治下に帰属せしめられ，鑲藍旗蒙人は主として格尼河一帯に鑲白旗蒙人は主として阿倫河一帯に居住し各々一佐領によりて統禦せられたり。

光緒末年に於て管下格尼河に「何某」なる者ありて固司達（協領即之なり）の官職に位して鑲藍及鑲白両旗を統治し阿倫河の鑲白旗にも亦「何某」なる佐領ありて，領の統制下に服し其他驍騎校外郎等官職の設置しありたるも此等の官役は特に辦公所を備えて執務することなく，常に転住し行く佐領の住家に於て，極めて簡粗なる事務を執るに過ぎざりき。佐領は始め札爾呼奇屯，に住居を定め，爾後の佐領後任者は凡て布奇屯人（姓不詳）を以て，之に充当することとなり随て佐領の執務も亦上記屯に遷移せられたるものなるが，民国五年に至り吉本倫驍騎校「富全」が鑲藍旗佐領に任ぜられ，同時に鑲白旗は挙げて上記鑲藍旗に編入統一し，二旗を一旗に改編して，事務を執りたるものなり，其後佐領辦公所は吉木倫より査巴奇に移行せられ，民国十五年富佐領の没後驍騎校，双寿（故阿栄旗々長爾恒巴図）後任佐領に任ぜられたるも辦公所々在地は不明なり。……

本旗土着人民は既述の如く，本来索倫部落を以て構成せられ，……索倫民族は性極めて朴訥実直武を好み文を軽視するの遺風あるが故に，其の文化の程度極めて幼稚なるを免れず，専ら狩猟游牧を事とし耕作を嫌悪忌避するの風潮濃厚なりしを以て，清末民初に時の官府は生計地二万数千晌地，屯基八十余晌地，を配給して，開墾耕作に従事せしめ蒙人の生活を安定せしめんと計りしことあり。

本旗に於ける漢民族は，其当初絶無と云うも過言にあらず，稀に行商の為に来住するものあり，或は時に興安山嶺に踏入り，所謂「跑山児」となり木耳，黄稽榛子の採取や其他凡有る野生物産を採取して生活資料の一部に充当しおるに過ぎざりき，然るに光緒二十二

ところ検索し得ていない。【考察】の項を参照。

年時の黒龍江将軍，恩沢が主として黒龍江省西北部一帯の荒地を採択して，放荒招墾の儀を奏請し次で光緒三十一年甘井子（現甘南県）に地方設治局が設置せられ之れに因りて荒地開放となり，阿倫河，音河，一帯の荒地も亦開放せられてより，漢人移入者の来住を誘致せり当初は只荒地領有の目的のみを以て来住するものに過ぎず農耕に従事する者は極めて寥々たるものなりき，後年甘井子以東（格尼を含む）は布西設治局に接辦せられ，以西は雅路索倫墾局（札蘭屯）の管掌下に帰一せしめらる。

d）竹村茂昭「莫力達瓦地方土地沿革」(34-35)：

「第四節　南段地区，綽爾河索倫地方及甘河地方の開放

一、西布特哈南段地区の開放

南段地区とは大体現阿栄布特哈両旗地方をさすものであつて，阿倫河及扎蘭屯附近は初め甘井子行局に依り光緒三十二年十二月より丈放さられ（後阿倫河以北は布西設治局に以南は雅魯県に属した）済沁河（現布特哈旗南部）地方は景星県経歴に依り開放せられた。後者は後第一清丈分局に依り次いで扎蘭屯稽墾局に依り続放されたが，停放常ならず為に状況は複雑多岐となつている。

民国三年の清丈結果に依る各地方の毛荒面積次の通り

扎蘭屯附近	毛荒	7,414晌
雅魯河済沁河	〃	2,700（原放は5766晌なるも欠価撤佃により減少）
済沁河吉字段	〃	6,423
〃　北段	〃	2,200（墾務総局丈放）
済沁河北段	〃	225（甘井子撥放）
甘井子段内	〃	25,827
合計	〃	45,635」

【考察】

アロン（阿倫）河に沿うソロン（エヴェンキ）人の古くからの集落。1950年代に社会・歴史調査が行われ，その結果は「阿栄旗査巴奇郷鄂温克族調査報告」として，『鄂温克族社会歴史調査』に収載されている。清代にはブトハ鑲白旗に所属。同旗が旧トゥクドゥン=アバで，アロン河流域に展開していたことは，聞き取りや諸文献によって明らかであるが，各ニルの居住範囲の詳細はわからない。本村では，基本的には旧来の文化がよく残されているが，清末以降の人口流動の中で，一帯のエヴェンキ人の小村落が消滅し，特定集落に集中していった様子が窺える。内モンゴル自治区に属しながら，モンゴル的要素は総じてほとんど認められない。ただし，大興安嶺東南麓のソロン人は，古く17～18世紀には，狩猟・農耕以外にかなり牧畜を営み，モンゴル式のゲルに住んでいた形跡がある。1693年に興安嶺を越えてヤル（雅魯）河に沿って下ってきたイズブラント=イデスは，一帯の住民（おそらくソロン）が農耕とともに牧畜を盛んに行い，葦で作った小屋に住んでいると記して

いる［Идес и Бранд 1967, 165-165］。葦で作った小屋とは，おそらく，現在も興安嶺西北のエヴェンキ族自治旗で見られるような，モンゴル=ゲルの壁を夏季に葦で覆った状態を指すと考えられる。また，1719（康熙58）年に，ヤル（雅魯）・ジチン（済沁）の両河が氾濫して水害が発生した際の被害報告［満文「硃批奏摺」（機構包）11-04，康熙58年8月6日付理藩院奏］には，相当数の家畜（特に羊が多い）が含まれている。以上からすると，彼らは，ある時期まではモンゴル的文化の影響を多分に受けていたが，その後「脱モンゴル化」した可能性もある。なお，1732（雍正10）年に興安嶺西北のフルンボイル地区に移駐したソロン・ダウール等の3,000の兵丁とその家族のうち，同地が農耕に不適なために生活困難に陥った人々を，乾隆朝初期に，農耕適地であるアロン河のオムボチ（査巴奇のやや下流）一帯に移住させたことが，檔案に見えている。とすれば，アロン河一帯の諸集落は，17世紀中葉にソロン人がアムール方面から移住した後ただちに形成されて，そのまま現在に至っているのではなく，いま少し複雑な形成過程をたどった可能性もあるが，現時点では，その過程を逐一明らかにすることはできない。

4．フルンボイルにおける諸民族集団の形成と再編

4－1．本章の構成

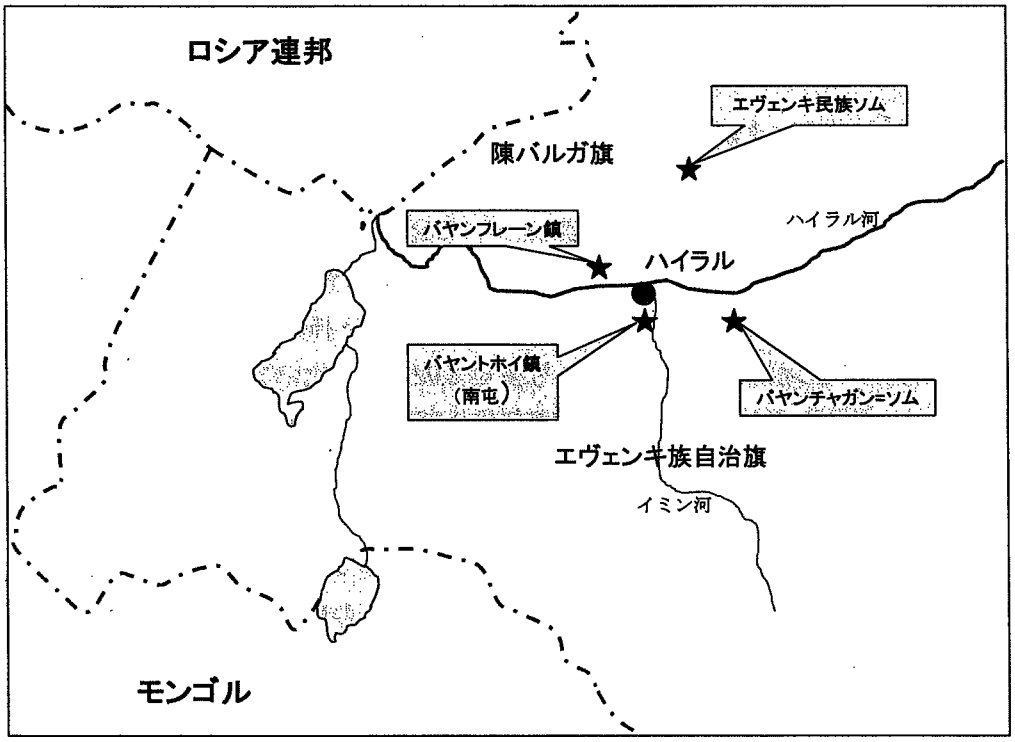
本章では，平成16年度に調査した大興安嶺西北側，すなわち狭義のフルンボイル地区について，第3章と同様に，諸民族集団の歴史と現況を紹介・考察する。叙述の構成はおおむね第3章に準じ，【概況】，【聞き取り調査の記録】，【文献の記載】，【考察】からなる。ただし，嫩江流域と比較した場合，フルンボイルの諸民族集団は，牧畜への依存度が高い関係上，人口がより分散し，冬季と夏季で異なる場所に生活する例も広く見られる。固定家屋の村落が存在しても，農耕地帯のような集村ではなくて散村形態をとっていることが多く，村落レベルでの結合は，嫩江流域におけるほど重要な意義を有していないと考えられる。従って，叙述対象としてもう少し広い枠組みを設定する方が合理的である。一方，フルンボイルにおいては，一つの民族集団が複数の旗にまたがって分布する例は少なく，特定の旗，あるいは旗の中の特定のソム（旗の下位行政区分）に集中する傾向がある。つまり，民族集団の実体的な区分と行政区分の一致度が高い[1]。さらに，平成16年の調査においては，市街地に住むインフォーマントから聞き取りを行ったケースも少なくないが，そうした場合，自然の成り行きとして，得られる情報は，特定のソムや村落ではなく，旗全体，あるいは当該民族集団全般に関わる内容が主となる。以上から，本章では，村落を単位とするのではなく，基本的には旗・ソムを単位として叙述を進めることとし，まず旗の全般状況を示した上で，調査のために訪問した特定のソムについて詳述する。ただし，4-2-3のイミン=ソムのウールド人の場合は，民族集団の全体が特定地域に集中しているので，ソム全体については特に述べず，集団全体を一つの単位として扱った。

なお，1-2-1の聞き取り調査一覧表にあるとおり，新バルガ左旗出身のインフォーマントからもハイラル市街において聞き取りを行ったが，今回の調査では現地にまったく足を踏み入れていないため，以下の叙述では省略した。また，フルンボイルでは旗レベルの政府関係者への聞き取りは行わなかったので，各旗の【概況】は文献（主として旗志）に基づく情報である。

---

[1] ただし，このことは，特定の旗・ソムが必ず単一民族集団によって占められることを意味しない。たとえば，エヴェンキ族自治旗では，（ソロン系）エヴェンキ人はだいたい各ソムに住んでいるが，ウールド人はイミン=ソムに，ブリヤート人はシネヘン東ソムに集中している。従って，イミン=ソムにはエヴェンキ人とウールド人，シネヘン東ソムにはエヴェンキ人とブリヤート人の双方が見られるが，ウールド人やブリヤート人が少ないソム（たとえばホイ=ソム）の人口は，大部分がエヴェンキ人である。

【地図２：平成 16 年の調査地域】



４－２．エヴェンキ族自治旗

4-2-1.旗全般

【概況】

1990 年のセンサスによれば，本旗の総人口は 129,687 人で，エヴェンキ族の他，モンゴル，ダウール，漢の各民族が多数を占め，他に満・回・朝鮮など，計 20 の民族がいる。エヴェンキ族は計 8,621 人で，地区別内訳は，バヤントホイ鎮〔南屯〕2,687 人，ホイ=ソム 1,648 人，イミン=ソム 1,014 人，北ホイ=ソム 665 人，バヤンチャガン=ソム 568 人（他略）となっている。主な生業は牧畜で，副業として狩猟・農業・林業を営む。ダウール族は 14,296 人で，内訳は，バヤントホイ鎮がもっとも多く 8,922 人，次いでバヤンタラ=ダウール民族郷 1,409 人である。牧畜を主とし，運輸，園芸作物栽培，木材加工等も営む。モンゴル族は，大きくウールド=モンゴル，ブリヤート=モンゴルの 2 グループに分かれる。ウールドの人口は 751 人で，うち 700 人がイミン=ソムに住む。ブリヤートは，ロシア 10 月革命後に移住してきたもので，主にシネヘン河流域（シネヘン東ソム）に住む。他にジェリム盟，ヒンガン盟から多くのモンゴル族が移入してきており，その数は，新中国建国前後から 1990 年までで 16,000 人に及ぶ[2]。

【聞き取り調査の記録】

① ドゥー=ドルジ（杜・道爾基）さん（エヴェンキ族，1937 年生。バヤントホイ鎮在住）

◆祖父はソロン正黄旗第 3 ニルの世襲ジャンギンであった。戦前，父親はホイ=ソムの小学校長だった。

◆旧ソロン八旗の牧地：

《右翼》

正黄旗: : ホイ=ソム～バヤンタラ

※ウジュ（第 1）＝ニルにはダウール人もいた（現在はバヤントホイ〔南屯〕に居住）。

正紅旗: オラーンハルガナ～ホンゴルジ

鑲藍旗: オンゴントホイ（エヴェンキ語ではオンゴンホス／翁格浩斯）～興安嶺

鑲紅旗: ホンゴルジ～興安嶺

※以上 3 旗はエヴェンキ人が主だが，鑲紅旗にはオロチョン人もいた。彼らは 1732 年にブトハから移ってきたが，その後ブトハに帰った者もいる。興安嶺の両側を往来していた者もいた。1922 年，多数のオロチョン人が新来のブリヤート人に殺された。イミン=ソムにある「オロチョン=ジョガル」（モンゴル語でオロチョン=ボーシ）は，彼らの集落跡である。

《左翼》

---

2 『鄂温克族自治旗志』による。ただし，同書は，エヴェンキ族の人口について，箇所によって異なる数字を挙げている。なお，本旗では『旗志』編纂後に，ホイ=ソムと北ホイ（アルシャンノール）=ソムの合併等，行政区画の再編があったが，本稿では『旗志』編纂時の状況に基づいて記述している。

正白旗: バヤンチャガンから東南方，興安嶺（現ヤクシ市の境域の中ほど）まで

鑲黄旗: ハイラル河～テニヘ河

※以上2旗の第1ニルにはダウール人がいた。彼らは農耕を行い，官員・筆帖式として務めた者も多い。現在バヤントホイに住む人々の祖先である。

鑲白旗: 陳バルガ旗のメルゲル河流域

※この旗はエヴェンキ人とバルガ人の混合。

正藍旗: 陳バルガ旗のバヤンフレーン北方

※この旗はすべてバルガ人からなる。

◆歴史的な住民の移動：

1732 年：ウールド人が到来。イミン河以東，シネヘン河以西，おおむねウイトヘン河の流域に牧地を得た。1旗だけで「ウールド左翼」を構成した。

1734 年？：シネヘン河上流域に新ウールド人が到来。

1910 年：ウールド人の居住地でペストが流行し，特に北部で多くの人が死んだ。残った人々は南へ移住したともいい，また北部の人はほとんど死に絶えて，南部の人だけが残ったという説もある。

1919 年：独立の陳バルガ旗が設立された。このとき，東にいたバルガ人は西に移動し，エヴェンキ人だけが残った。同地のエヴェンキ人のリーダーはトゥメンジャルガルという人で，後（1930 年代？）にエルグネ旗の旗長となった。

1921 年：ブリヤート人が到来。衙門から 50 年の契約でウールド人がいなくなった土地を借り受けた。

◆ソロン八旗のエヴェンキ人のハラとモホン[3]：

正黄旗ウジュ（第1）=ニル: ドラギル=ヤルハワン〔ヤルハワナ？〕

※ドゥラギルは「河の中流」の意。ヤルは河名，ハワンはアバ（巻き狩り）からきた語。

正黄旗ジャイ（第2）=ニル: トゥクドゥン=モンゴーダート（MΘNGGΘ-DAATT）

※MΘNGGΘ は「大きな器>河口の広くなったところ」の意。

正黄旗イラシ（第3）=ニル: ドラギル=シッパンドラル（SIPPANG-DOLAR），ドラギル=シンガリンハワナ（SINGARING-HAWANA）

正紅旗: ドラギル=エットゥードラル，ドラギル=グランドラル

※エットゥーは「大」の意。

正白旗: トゥクドゥン

鑲黄旗: ハーハル（第1ニル）

鑲白旗: ハーハル

鑲藍旗: バヤギル，ハヤン

---

[3] ハラは満洲文語で hala と書かれ，氏族ないし姓の意味である。モンゴル語のオボク（obuγ）にほぼ相当するが，フルンボイルでは，モンゴル人も obuγ ではなく qala という語を用いる場合がある。モホンはハラの下位区分で，満洲文語では mukūn と書かれるが，本章では現地のモンゴル語風の発音に従って表記した。

鑲紅旗: ヒャダルダート

◆外婚規制：ハラが同じなら，モホンが違っても結婚はできない。

◆宗教・祭祀：エヴェンキ人にはラマはいない。シャーマニズムが主。1830 年？，ソロン左翼のエヴェンキ人とダウール人が南屯に寺院を建てた。その近くにホス／ゴス=オボーがあった。1803 年，バヤンホショー=オボーの南西に，右翼の人々が寺院を建てた。ホイ=ソムの北にエットゥー（大）=オボーがある。これはエヴェンキ人全体のオボーである。

②ハーハル（HAAKAR／哈赫爾）さん（エヴェンキ族，1927 年生。バヤントホイ鎮在住）

◆旧ソロン八旗およびブトハ八旗の所在

ソロン鑲黄旗・正白旗: バヤンチャガン=ソム

ソロン正紅旗: ホイ=ソム

ブトハ鑲藍旗: トシン（托欣）河（大興安嶺の東南側。ハーハルさんは本来ここの出身）

※以下はエヴェンキ族自治旗ではなく，主として大興安嶺東のブトハ地区に関する内容なので，付録として扱う。

◆大興安嶺東における各ハラの分布

ヤル（雅魯）河：ドゥラル，イグジル（母親の出身氏族），バヤイル（バヤギル），ボルジイル（ボルジギル，夫人の出身氏族，後にイン〔音〕河に移住）

※ホイ河のエヴェンキ人の多くはここから移住した。

トシン（托欣）河：ハーハル，バヤイル，ケルテイル（ヘルテゲル／ケルテギル），サマイル（サマギル，後にジチン河に移住）

ジチン（済沁）河：清代には人がほとんど住んでいなかった。のちにトシン河からハーハル，サマイルの人々が移住した。

ガン（甘）河： バヤイル，アオライル

ノミン（諾敏）河：トゥクドゥン，ドラル

アロン（阿倫）河：ナカタ，トゥクドゥン，ドラル

※ここからバヤンチャガンに移住した人が多い。

◆ハーハル=ハラのモホン（ムクン）

ソロゴン=モホン=ハーハル（ハーハル氏本人はこのモホンに属する）

アチャクチャイル=モホン=ハーハル

テゲ=モホン=ハーハル

オロンチェン=モホン=ハーハル

◆大興安嶺東のエヴェンキ人の生活は，狩猟が主で，牛・馬の牧畜も行っていた。羊は少なかった。農耕は最近になって始めた。主な住居は「ジャガン」（地[宀+音]子，地面を掘り下げ，木と草の骨組みの上に泥を塗った方形の家屋）であった。「撮羅子」（円錐形テント）は夏だけ使用。エヴェンキ族自治旗に多く見られるホルスン=ゲル（葦で覆ったゲル）は興安嶺の向こう側にはない。興安嶺の向こうから甘珠爾廟の定

期市に来るエヴェンキ人もいた。

◆外婚規制はいまでもある。モホンが同じだと結婚できない。ハラが同じでも，モホンが違えばよい。また，5 世遡って先祖が異なれば結婚してもよい。

◆ハムニガン[4]とは，「一緒になる」という意味のブリヤート語。ブリヤート人とロシア領のエヴェンキ人はしばしば共に戦ったから。

【文献の記載】

a）「月摺檔」黒龍江将軍 Jorhai の奏摺（雍正 10〔1732〕年 4 月 16 日）〔摘録〕：ブトハからフルンボイルに移す対象として，Solon1,646，Dagūr730，Oroncon359，Barhū275 の計 3,000 壮丁を選出。これを八旗 50 ニルに編成し，左翼四旗は北方のロシアとの国境方面，右翼四旗は南方のハルハとの境界であるハルハ河方面で遊牧させる。

b）「月摺檔」黒龍江将軍 Bodi の奏摺（乾隆 7〔1742〕年 4 月 6 日）〔摘録〕：フルンボイルは農耕に適さず，Dagvr らの生活が困難なので，Dagūr720，Solon675 壮丁をブトハ管下に戻すとともに，フルンボイル残留者のうち 1,440 名のみを兵として，24 ニルに再編成する。

c）「黒龍江通省輿図総冊」：「索倫左翼鑲黄・正白二旗人等，南自西呢河源起，北止〔至？〕海拉爾河止，一百五十里許；東自扎敦河起，西至伊敏河止，二百一十里許，其間游牧。此二旗共計二百五十戸。……索倫右翼正黄・正紅二旗人等，南自喀喇図山，北至西伯山止，一百九十五里許；東自伊敏河起，西至輝河止，一百二十里許，其間游牧。此二旗共計六百五十九戸。索倫鑲紅・鑲藍二旗人等，南自興安嶺山根起，北至喀喇図山止，一百一十里許；東自鄂依那河起，西至輝河止，一百二十里許，其間游牧。此二旗共計二百一十六戸」。

d－1）『呼倫貝爾志略』「民族」：「索倫。遼裔，漢称通古斯，俄語喀穆尼皆索倫也。一名索莪羅，為内興安嶺東北蒙古之巨族。旧為打牲部，居黒龍江沿岸。清初被羅刹侵偪，避入内地，多在布特哈・墨爾根・呼倫貝爾等処，南至喀爾喀庫勒，北至喀拉布爾霍，西至索岳爾済山，東至斉普器児，南其游牧場。康熙三十年編入旗籍，名曰索倫兵隊。……此種人大都操俄語，現隷俄籍頗多。本氏無考，漢姓有胡・白諸姓。雍正十年由布特哈遷駐呼倫貝爾，兵数一千六百三十六名，附以達呼爾・陳巴爾虎共編八旗」。

d－2）同上「達呼爾。索倫族。……本契丹種，遼亡，徙黒龍江北境，初為打牲部落，継在東布特哈迤北游牧及興安嶺山脚一帯，就水草而居。康熙二十八年編入八旗，分駐斉斉哈爾・伯都訥各城。此族与陳巴爾虎相似，誠蒙古中得風気之先者。婦女善保孩童，故生歯日繁，又善游牧，蒙族内頗富足。漢姓中有呉・金・何・張・陶・白・邵・富諸姓。雍正十年

---

4 陳バルガ旗エヴェンキ=ソムに居住する，ロシア革命後ロシア領から移住してきたエヴェンキ人のこと。4-2-3 参照。

由布特哈遷駐呼倫貝爾，兵数為七百三十名，編制索倫八旗以内。現以郭・孟・敖三姓為境内之大族，分居南屯・西屯，注重開化亦以三姓子弟為最」。

d－3）同上「戸口」（民国 11 年調査）：

族別	旗別	戸数	人口数		
			男	女	総数
索倫	正紅旗	164	281	235	516
	正黄旗	338	793	595	1,388
	正白旗	95	283	224	507
	廂紅旗	37	83	68	151
	廂黄旗	74	214	196	410
	廂藍旗	46	92	95	187

※本表は行政区分ごとの統計なので，ソロン人とダウール人は区別されていない。

e）上牧瀬三郎『ソロン族の社会』:「現在ソロン族は東西に別れ，西はホイン・ゴル地方，東は鉄道沿線のヂャラモド，ハケ両地方に居住している。これは一七三六年，ソロンが巴爾虎の地に移されると同時に，左右両翼に別たれ，現在の如くに配備されたものである。かくてソロンの左右両翼旗は互いに約百八十キロも隔たっている。東ソロンは海拉爾に近い鉄道沿線に居住している関係上，交通の便も良く，海拉爾ダゴール族及びラムトに在るダゴール族との交際は，斉々哈爾から移住当時より行われ，現在ではソロン人でありながら，ソロン語よりダゴール語の方を良く解する者多く，この外環境上蒙古語は勿論，ロシア語をも解する者が尠くない。これに反し西ソロン族にあっては，十五歳以上の男子は蒙古語を解するけれども，ダゴール語を話す者は二，三に過ぎず，いわんやロシア語を解するものは皆無の状態である。婦女子に至ってはソロン語の外何語をも全く解しないと言って差支ない。海拉爾及ヂャラムトにおけるダゴール人の内にはソロン語を解する者少くない。かくの如き状態であるから，東ソロン族の生活様式が多分にダゴール化しているに反し，西ソロン族は地理的関係その他の原因により，他種族化する事なく，依然として古来の固有形式を伝え，保守的な性格が著しく濃厚である」。

f）『内蒙古呼納盟民族調査報告』〔摘録〕：呼納盟は中国東北部において民族がもっとも複雑な区域である。ブリヤート族はソロン旗のシネヘン河ソムに集居し，遊牧経済を営み，生産方法は進歩している。ウールド族はソロン旗のイミン河ソムに集居し，遊牧経済を営む。ダフール族はモリンダワー，アロン，ブトハの農業 3 旗と，ソロン旗政府所在地の南屯附近に散居し，農業経済を営む。ソロン族は，ソロン旗のイミン河ソムに集居し，一部はアロン旗に住む。牧畜を主とし，農業を兼ねる。トゥングース族は，ソロン旗のシネヘン河ソムに集居し，ブリヤート族と雑居して，同化が著しい。遊牧経済を営み，初歩的な

農業を兼ねる。

g）『達斡爾族社会歴史調査』〔摘録〕：1932 年に，ハイラル地区のダウール人は計 92 戸であった。九一八事変後，とくに 50 年代から，チチハル市郊外のダウール人が大量に南屯に移住し，当地のダウール族人口の急激な増加をもたらした。1956 年の統計によれば，エヴェンキ族自治旗の人口は計 7,924 人，うちダウール族は 1,641 人で，全旗人口の 20.7%を占め，以下のように各ソムに分布していた。バヤントホイ=ソム（南屯を主とする）1,250 人，バヤンチャガン=ソム（メヘルト屯を中心とする）229 人，イミン=ソム 160 人，シネヘン=ソム 42 人，ホイ=ソム 20 人。1732（雍正 10）年の決定に基づいて，ブトハのダウール人の一部分はフルンボイル地方に移住した。伝説によれば，当時ダウール人は親族が離れ離れになることを望まず，清廷が種籾を支給して試験的に耕作を行わせた際，種籾を炒ってから播き，秋になると，草地の寒気が厳しいため一粒の収穫も得られなかったと報告したという。そのため，1742（乾隆 7）年に，26 ニルのダウール人をブトハの原籍に送り返すことになった。残ったソロン左右翼 24 ニルの編制は以下の通りである。

翼	旗	佐数	備　考
ソロン左翼	鑲黄旗	3	第 1 佐内に一部ダウール人がおり，他はエヴェンキ人
	正白旗	3	第 1 佐内に一部ダウール人がおり，他はエヴェンキ人
	鑲白旗	3	第 1 佐はエヴェンキ人とバルガ人の混合ソムで，他はバルガ人
	正藍旗	3	すべてバルガ人
ソロン右翼	正黄旗	3	第 1，2 佐内に一部ダウール人がおり，他はエヴェンキ人
	鑲藍旗	3	以下 3 旗はすべてエヴェンキ人
	正紅旗	3	
	鑲紅旗	3	
計	八　旗	24	民国 8 年，ソロン左翼鑲白旗第 2，3 佐および正藍旗 3 個佐所属のバルガ人は別に陳バルガ旗を組成し，12 佐に分かれた。

ただし，郭貝勒ハラ満那昆ムクンと敖拉ハラ登特科ムクンの少数の者は，官職にあったため，ソロン左翼鑲黄旗第 1 ニルと左翼正白旗第 1 ニルに留まった。

【考察】

第 2 章で略記したように，本旗の現在の住民の基礎は，二つの系統の人々によって作られた。1732（雍正 10）年に大興安嶺東南のブトハ地区から移動して，八旗 50 ニルに編成された人々は，当時の史料ではソロン，ダグール，オロンチョン，バルガの 4 種に区分されているが，その後オロンチョンはソロンの中に包括されたようで，記録にほとんど見えな

くなる［柳澤 1997］。ただ，聞き取り①によれば，鑲紅旗には近年までオロチョンと呼ばれる人々がいたらしいが，これが文献 a に見えるオロンチョンと直結するかどうかについては，なお検討が必要であろう。一方，ソロンという呼称は 1950 年代まで使われており，これが本旗のエヴェンキ人の前身である。また，文献 b 年に見るように，ダグールの大部分は同年にブトハ管下に戻り，フルンボイルには僅かな人数が残るのみであった。そのことは，19 世紀前半に書かれた西清『黒龍江外紀』に，「達呼爾，……占籍於齊齊哈爾，墨爾根，黒龍江，布特哈，間有流寓呼倫貝爾者，不過数家」とあることからも確かめられる［柳澤 1994b］。現在，本旗のダウール族の人口はエヴェンキ族を上回っているが，『達斡爾族社会歴史調査』に述べられているように，大部分は 20 世紀以降の移住者である。八旗編成時における各旗・ニルの民族・氏族構成や居住地域の詳細については，当時の史料から確認することができない。文献 f に掲げられている 1742 年以降の 24 佐領の民族構成は，聞き取り①と一致しているが，①のインフォーマントは郷土史家といえる人物なので，両者は同系統の情報源に基づく可能性があり，必ずしも相互に傍証するとはいえない。しかし，後述するバヤンチャガン=ソムおよび陳バルガ旗における調査結果と矛盾はなく，おおむね承認して差し支えないであろう。また，聞き取り①によれば，各ニルは大体特定のハラ・モホンから構成されていたようであるが，清代の旗・ニル編成の原則に照らして自然なことといえる。ちなみに，①，②のインフォーマントとも，ハラが外婚の単位としてなお実質的な意味をもっていると語っている。各旗の領域については，文献 c と聞き取り①がほぼ一致している。すなわち，おおむねハイラル河・ホイ河・興安嶺によって画される地域（現在のエヴェンキ族自治旗に相当）において，右翼 4 旗は西南側を占め，左翼 4 旗中，ソロン人を主とする鑲黄・正白の 2 旗は東北側を占めていた。左右両翼のソロン人が，その後の他民族（特にダウール人）との接触状況の差によって，言語・文化面で相違を生じていたことは，『ソロン族の社会』に見えている。前者はおおむね現在のホイ，イミン等のソムのエヴェンキ人に，後者はバヤンチャガン等のソムのエヴェンキ人に連なると考えられるが，清代の旗・ソムと現在のソムやガチャー（村）との対応関係を検証するためには，よりきめ細かなデータの収集が必要である。なお，左翼鑲白・正藍の両旗はバルガ人が主で，ハイラル河以北，ほぼ現在の陳バルガ旗に展開していた（4-2-1 参照）。

一方，イミン=ソムに住むウールド人は，18 世紀に西モンゴル・アルタイ方面から 2 波に分かれて移住してきた人々に起源するが，詳細については 4-1-3 で取り扱う。

4-2-2.バヤンチャガン=ソム

【概況】

◆面積：920.12km²

◆所属ガチャー（村）：メヘルト〔河名，ソム政府所在地〕，アルタンオシト〔金星の意味〕，ジャクトムダン（モンゴル語ではナルス=ムドゥン，ナルス〔松〕の木が生えている土地の境という意味）

◆戸数・人口：380 戸，1,371 人。民族としてはエヴェンキ，ダウール，モンゴル，漢，ロシアがいる。

◆民族別人口：エヴェンキ族は全体で約 700 人。アルタンオシトとジャクトムダンでは約 90%を占める。

◆産業は酪農が主。林業は行っていない。観光も重要で，五泉山には年間 10 万人の旅行客が訪れる。会議に使われることも多い。

【聞き取り調査の記録】

①フレーバヤル（Küriyebayar）さん（エヴェンキ族，61 歳。ジャクトムダン在住）

◆旧ソロン八旗の分布と行政区分の変遷：アンチンフー（Ančinküü）という人の描いた旧ソロン八旗の地図によると，メヘルト一帯は正白旗に属する。正白旗の轄地は現在のシネヘン東ソムにかなり食い込んでいた。1949 年以後，現在のテニヘ=ソム〔陳バルガ旗〕の一部とバインチャガン=ソムは一つのソムで，テニヘのボホイント山の麓に学校があり，一緒に勉強していた。ネイルという人がソム長であったとき，テニヘ一帯は陳バルガ旗の所属となった。

◆ハラとモホン：トゥクドゥンにはエトゥー，ニスフンなど全部で 9 モホンがある（フレーバヤル氏自身はニスフン=トゥクドゥン）。ドラルには 8 モホン，ナハタには 7 モホンがある。他にハーハルというハラもある。ただし，以上のモホンの全部が当地にあるわけではない。

◆外婚規制：ハラが同じであれば，モホンが違っても結婚するのは好ましくない。しかし，慣習を破って結婚した例もある（老人たちは反対した）。

◆興安嶺東のエヴェンキ人とは，親戚づきあいはしていない。

◆オボー：メヘルトの西 25～30 里のところにゴス=オボーがあり，エヴェンキ人が祀っている。旗のオボーはメヘルトの近くにある。ダウール人は，このオボーをダウール人のものだと主張しているが，間違いである。旧時，ダウール人が総管などの役職を務めることが多かったので，職務上オボーの祭祀を主催していたにすぎない。最近，ダウールのオール=ハラのデンテケ=モホンが自分たちのオボーにしようとしたが，自分は極力反対した。エヴェンキ人は元来，山のオボーよりも，河辺のロース（龍）のオボーを祀っていた。

◆住居：昔はウクジュ（モンゴル=ゲル）に住んでいた。夏はブルガス・ホルス（柳・葦）張りで，冬はフェルトで覆っていた。興安嶺東にいた頃からゲルに住んでいた可能性もある。

◆生業：冬営地はバインチャガンの西部？にあるエットゥーガール（「盆地」の意）や，フレーシ（「ヘビが多い」という意）にあり，夏営地はメヘルトの西の林場にあった。狩猟は昔は盛んに行っていたが，いまは禁止されている。戦前は，木を伐採してハイラルに運んで売っていた（燃料として需要があった）。またチャガーン／サガーン=ホス（白樺皮）も採っていた。

②ジャクドゥンタイさん（エヴェンキ族，1931年生。ジャクトムダン在住）

◆ジャクトムダンのエヴェンキ人のハラ，モホン：ドラルにはエットゥー=ドラルとトゥムシュン=ドラルがある。合わせて10戸以上ある。トゥクドゥンにはイフ=トゥクドゥン，バガ=トゥクドゥン[5]がある。他にナハタがある。

◆外婚規制：ハラが同じなら，モホンが違っても結婚は不可。

◆住居：冬はウルグー=ゲル〔フェルトのモンゴル=ゲル〕，夏営地はブルガス（柳）やホルス（葦）で覆ったゲルに住んでいた。

◆「ソロン」というのはダウール語ではないか。

③ガンスレンさん（ダウール族，1935年生。メヘルト在住）

◆メヘルトに住むダウール人の由来：1732年に移住してきた（272年前）。黄旗の所属であった。最初は，オーラ（敖拉）=ハラのデンテケ（登特格）=モホン（ガンスレン氏はこのモホンに属する）が5戸，ゴボル（郭貝勒）=ハラが5戸程度であった。現在，デンテケ=モホンは24戸ほどになっている。その他に，モルディン（莫爾丁）=ハラの人がバヤンフレーン（南屯）にいる。

◆生業：移住してきたころは狩猟が主で，牧畜（牛・馬）も行っていた。羊は少なく，豚はいなかった。

◆外婚規制：モホンが違えば，同じハラ同士でも結婚可。また祖先が同じでも5世たてば結婚可。

◆他地域のダウール人との関係：新疆に移住したダウール人とはいまでも付き合いがある。嫩江のダウール人とはほとんど付き合いがない。

◆宗教・オボー：昔はメヘルトに一つの関帝廟があった。シャーマンは今でもいる。ダウール人とエヴェンキ人が共同で祀るオボーが東南の山上にある。祭祀は旧暦6月13日（現在の暦では7月）

◆ダウール人とエヴェンキ人：それぞれ独自の言葉をもっている。ダウール人は人と会うときに帽子をとるが，エヴェンキ人は帽子をかぶったまま人に会う。エヴェンキ人は，昔は夏メヘルトあたりに来て，冬は山の冬営地に移動していた。彼らは以前，ブルガス（柳）またはホルス（葦）で覆ったゲルに住んでいた。涼しいので，ダウール人よりよいウルムを作ることできた。いまはない。ダウール人は，伝統的に木の骨組みの上に土を塗り，屋根はホルス（葦）で葺いた家に住む。中には炕があり，煙突が建物の両側に張り出している。このあたりにいるエヴェンキ人を，ダスホワン〔左翼〕=エヴェンキと呼びならわしていた。ハーハル，トゥクドゥン（エット=トゥクドゥン，ニスフン=トゥクドゥン）等のハラがある。彼らはゴス=オボーを祀っている。

---

5 イフ，バガとはモンゴル語で「大，小」の意。聞き取り①に見えるエヴェンキ語のエットゥー，ニスフンと同義である。

◆ジャクトムダンは，モンゴル語でいえばナルス=ムドゥンの意味である。アルタンオシトの旧名はジャラムタイである。

【文献の記載】

本ソムに特化した記載はほとんど見出すことができない。4-2-1 の旗全般に関する諸文献を参照。

【考察】

本ソムのエヴェンキ人，ダウール人の来歴について，聞き取り①～③から得られた情報は，4-2-1 の旗全般に関する知見とほぼ合致する（本ソムが清代の正白旗に相当すること，エヴェンキ人の代表的氏族としてトゥクドゥンがあること，ダウール人は元来ごく少数であったこと等）。聞き取り③において，当地のダウール人がエヴェンキ人をダスホワン〔満洲語 dashūwan,「左翼」の意〕=エヴェンキと呼びならわしていたというのは，正白旗が八旗の左翼に属することから来たものであろう。ただし，聞き取り③のインフォーマントは，黄旗所属であったと述べており，現在の住民と旧所属旗の関係について，さらに詳細なデータの収集が必要である。一方，ハラーモホンは，外婚単位としてなお一定の意味をもっており，エヴェンキ人の場合により厳格である。当地のエヴェンキ人が，以前はモンゴル式ゲルに住み，冬営地・夏営地の間を移動していたという情報は，フルンボイルのソロン～エヴェンキ人におけるモンゴル式遊牧文化の起源を考える上で，興味深いものである。エヴェンキとダウールの間には，居住形態や社会習慣に差異があり，オボー祭祀の主導権をめぐる認識の相違もあるようで，清代以来，別個の民族集団としてのまとまりを維持してきたことが窺われる。また，聞き取り①，③のインフォーマントは，ともに大興安嶺東南側の人々とは親戚づきあいをしていないと語っている。イミン=ソムのエヴェンキ人の場合も，状況は同様らしい[6]。フルンボイルのエヴェンキ人，ダウール人が，すでに嫩江流域の旧ブトハ地区の人々から社会集団として分化していることを物語っている。

4-2-3.イミン=ソムのウールド人

【概況】

概況に関するデータは欠如。

【聞き取り調査の記録】

①ソーハン=ピルジドさん（1933 年生，バヤンフレーン鎮〔南屯〕在住）

---

[6] 1994 年にイミン=ソムにおいて聞き取った情報。ただし，『鄂温克族社会歴史調査』には，ブトハ鑲白旗世襲佐領（ニルイ=ジャンギン）であったアイシンドルジ（愛新道爾吉）の家譜が掲載されている（pp.22-23）。アイシンドルジは光緒 24（1898）年に死去したので（p.25），家譜はそれ以前の作成にかかるものだが，そこにはフルンボイル在住の人々も詳細に書き込まれている。こうした家譜の存在から見れば，フルンボイルとブトハの人々の社会的隔絶は，さほど古い時期に遡るものではないかもしれない。

◆ウールド人の現在と過去の居住地：現在は，イミン=ガチャー（いまはオイム付近。以前イミン炭鉱の地域に住んでいた人々が，立ち退いてここに移住した），アグイト，バインタラ，ビルト。昔，ハルハから移動してきたとき，北はシニヘ・イミン両河の合流点，西はフイ=ソムのビルト=オール，南はビルト，東はシネヘン東（Sineken jügün）ソムの哈日図海の南の Köke ciluγa までを牧地として下賜された（当時の檔案による）。第 1 ソム（Üjü sumu）は，現在のイミン=ソムを中心とし，第 2 ソム（Jai sumu）は現在のシネヘン東ソムのあたりにあった。1921 年頃，ブリヤード人がロシアから移動してきたため，当時のアンバン（副都統）が，シネヘン東ソム一帯をウールドから割いてブリヤードに与えた。

◆フルンボイルへの移住の経緯，新旧ウールドの区別：旧ウールドは，1732 年に清朝皇帝の指示でハルハのセチェン=ハン部から移住。チャハルにもウールドの一部がいるはずだが，会ったことはない。イミン=ソムに Üker ciluγa という場所があるが，これは連れてきた牛を分けたところ。現在の五牧場の北にある Mönggün ciluγa という場所（いまでも石が残っている）は，皇帝から下賜された 1,000 両の銀を分けたところである。新ウールドがいつどこから来たか，明確でないが，イフミンガン=ウールドが東へ移動したときに残った人々ではないか。旧第 2 ソムの大部分は新ウールドである（いまでは大体イミン=ガチャーに住んでいる）。現在でも，自分が旧ウールドであるか新ウールドであるかは皆知っている。

◆氏族：文献によると，かつては 23 オボクがあったが，2 つが絶えて，いまは 21 オボクである。人数の多いオボクとして，Souqan（旧），Jaγamad（旧），Γaljud（新），Γaljad（?），Kirgis（旧），Boočin（旧），Telengged（旧），Šereid（新），Mongγorod（旧）などがある。

◆旧時の官制：総管の下に sumun janggi，さらにハバン（驍騎校），ボショゴ（領催）があった。総管の子孫で Elden という人（Γaljud／Γaljid 姓）は，最後の総管から 5 代目である。第 1 ソムの janggi の子孫に Norbusüreng（Jaγamad 姓）という人がいる。功績によって 32 代にわたって janggi を承襲する権利を得たが，現在まで 13 ないし 14 代目である。第 2 ソムの janggi の家系は絶えている。

◆オボー：Qosiγu obuγ-a（旗のオボー）は，発電所の西にある。第 1 ソムのオボーは，バヤンタラの東南にある Qostu（「白樺のある」という意味） オボーである。第 2 ソムのオボーは，Sineken jegün ソムの Qan aγula オボーであるが，現在はブリヤード人が Bayan qaGan と呼んで祀っている。各オボクにもオボーがある。Souqan オボクのオボーはウイトヘン河を少し遡ったところにあるが，そこのハイラス（楡）の木で女性が首をつったため，現在は祀っていない。

【文献の記載】

a）「黒龍江将軍衙門檔案」総管 Bolbunca，Dabaha の将軍衙門宛呈文（雍正 10〔1732〕年 8 月 3 日）（摘録）：Ület の散秩大臣 Sebten の 2 ニルの Uriyanghai 人 217 戸 771 口を〔チャハルから〕移動させ，Kailar 東南の Sineke，Uiteke 河の河源，南方の興安嶺，西方の Iben 河，

北方の Kailar 河の間に境界を指定して安置した。

b）「黒龍江将軍衙門檔案」フルンボイル署理副都統衙総管関防総管 Abisik 等の将軍衙門宛呈文（乾隆 22〔1757〕年 9 月 12 日）（摘録）：Minggat の Yangtemur ら 26 戸 105 口を収容，Ulan burgasutai に安置。

c）「黒龍江将軍衙門檔案」フルンボイル署理副都統衙総管関防総管 Abisik 等の将軍衙門宛呈文（乾隆 22〔1757〕年 10 月 13 日）（摘録）：G'aldzat の Dambai，Gendun らの率いる 146 戸 532 戸がフルンボイルに到着。Dulimbai eyur 河口に暫時住まわせる。

d）「黒龍江将軍衙門檔案」フルンボイル署理副都統衙総管関防総管 Abisik 等の将軍衙門宛呈文（乾隆 22〔1757〕年 11 月 21 日）（摘録）：Ulan burgasutai に安置する予定の Durbet の Butuku, Banjur らの一群がフルンボイルに到着。目的地まで行き着けないため，暫時 Feitung 河で越冬させる。

e）Ögeled ayimaγ-un tobci teüke：乾隆 22〔1757〕年に，Dörbed 部のタイジである Bütükü, Bürin，デムチの Bayilγaγsan，Γaljid 部の Dasizagba，Mingγad 部のデムチの Büjüri ら，3 部の新 Ögeled たちを移動させてきて，55〔1790〕年に旧 Ögeled の 2 ソムに分けて入れて管轄させた。

f）「黒龍江通省輿図総冊」：「厄魯忒鑲黄旗両個牛彔人等，南自鄂依那河起，北至西尼克河止，一百五十里許；東自庫庫奇老山起，西至伊敏河傍喀喇霍吉爾泡止，一百二十里許，其間游牧。此二牛彔人共計三百六戸。

g－1）『呼倫貝爾志略』「民族」：「額魯特。阿爾泰蒙古也。一作鄂勒特，亦云厄魯特。……居黒龍江者為額魯特族之準噶爾部人。乾隆二十年，準噶爾台吉巴桑投誠，附打牲部落之後，遷駐呼裕爾河流域。及呼倫貝爾者，則於雍正十年由阿爾泰移来，牧地在喀爾喀河迤東寛翁河一帯。此族駐呼裕爾河者以伊克明安為首領，駐呼倫貝爾者編一旗，以本旗総管為首領」。

g－2）同上「戸口」（民国 11 年調査）

族別	旗別	戸数	人口数		
			男	女	総数
額魯特	廂黄旗	148	266	216	482

h）橋本重雄「興安北省索倫旗のオロット人に就て」〔摘録〕：

「一、沿革　2．索倫旗在住オロットの沿革：現在索倫旗に居住するオロットは，……雍正九年頃ハルハ族との戦禍を避け，察哈爾地方に移住したのであるが，雍正十年になって清帝の命令によって呼倫貝爾地方に駐防を命じられて二佐領が来住し，現在の興安北省索倫旗内のウエットヘン，シニヘ，バインホショ，附近に彼等の住居を定めた訳である。当時は二佐領三百六十余名の壮丁を持っていたと参領は言っている。かくして呼倫貝爾方に移住して数年，彼等はこの地方が比較的平和であり暮し易いよい土地であると非常な愛を覚える様になったらしく，移住後七年か八年を経て（乾隆五、六年）彼等は自分たちの故地に住んでいた、オロット種族の一部の来住を勧誘した。そのすすめにオロット人の移住が実現し，彼等の人口は一躍倍加された。彼等は以前に来た者をホーチン、オロット（旧オロット）と呼び，新しく来住した者をシヌ、オロット（新オロット）と呼称しているが，現在索倫旗に居住するオロットの第一佐は大部分が新オロットで，旧オロットを一部に含み，第二佐は全部が旧オロットであるが，双方合せて一〇〇戸四〇〇人の人口を持つに過ぎない。……

３．台吉の存在：オロットの沿革を説明して呉れた現索倫旗参領ボイントクトホ氏の言によれば，彼が十余歳の時にシヌオロットの中に台吉（姓ボロジクト）が二人居ったと言っている。又この台吉はジュンガル在住当時よりその系統は続いていたのであったが，現在は其の家計は断絶してしまっている。光緒二十七年及び民国八年頃現索倫旗オロット部落に猖獗した伝染病……の為多数のオロット人が死亡したが，その時この二人の台吉の家は，家族も全部死に絶えてしまったと言っている。……

４．索倫旗オロット族の居住地域：……移住後僅か二十余年で索倫旗のブリヤート人は人口に於ても家畜数に於ても，遥か先住蒙古人を追い抜く勢で勢力を占めてしまった。オロット人の過去の牧野の大部はブリヤート人の放牧場所となってしまっている。

二、牧農生産　１．概説：現在の索倫旗にブリヤート人が移住してくる直前約二十数年前は（民国三、四年頃）索倫のオロット人も人口約二千を算え，家畜数も相当あったと現参領やビルトの愛里達は言っている。……それが現在に到って人口の点では総数約四百に激減し，……何が斯く人口，家畜の激減を齎したか，其の受難の歴史を，オロット人の生々しい声に聴いて見る。先ず人口の激減に付ては，二十数年前オロット部落一帯を襲った伝染病……は猖獗を極め，ビルト附近居住牧戸にしたところが，当時三十余戸を数えて居たが，それが現在の十八戸となってしまって，十数戸は家族全部死亡し，其の家は断絶してしまった。……又彼らが病気平癒を祈って喇嘛の祈祷を請い，其の報酬として喇嘛に捧げた家畜も亦莫大な数に上ったと言っている。……不幸はこれだけでは止らなかった。それと前後して畜疫が流行し，オロット部落を猛烈な勢で侵害して行った。この当時にあって既に漫撒子があったことを愛里達チンシャン氏は明言しているが，家畜による生活依存が押しつめられた彼等は，この漫撒子を拡大せずして，運搬業に精出すことによって其の苦境を打開して行った。東支鉄道敷設前後は木材の需要を高めたし，約四十年前より漢人の独占的傾向にあった木材運搬を二十余年前より，オロット人が其の間に割込んで行く様に

なった。……之が現在索倫旗居住オロット人の現金収入を得る唯一と言ってもいい方途であり，彼等の生計維持に重要な役割を果している。一方漫撒子は前述の通り建国前部分的に行われていた訳であるが，満洲建国後索倫旗公署の積極的努力により洋犂（プラウ）洋把（ドリル）が貸与され，農耕が奨励された為に農耕は比較的全般に行われる様になり，例をビルト部落にとれば十八戸中七戸を除いては全部農耕を行っている。農耕と言っても彼等は相変らず糜子を漫撒子により収穫しているに過ぎないのであって，プラウやドリルを使っているビルトの数戸の農牧戸ですら，この高級な農具を使って漫撒子を行っている程度である。……

三、其他　2．索倫旗居住オロット族の姓：索倫旗居住オロット族一〇〇戸（四〇〇人）の各姓を示せば次の如くである。……1．ガルヂュクチュット　2．ガルチッド　3．ソーホン　4．モンゴルト　5．ホイット　6．ウスクッド　7．ジャムット　8．ホーチン　9．キルギス　10．シェレッド　11．トンフッド　12．シャルス　13．ホトホト　14．モンゴロード　15．トウンコト　この姓を文献諸資料に基いて充分詳しく調べて見れば，索倫旗オロットの故地とのつながりが明確となるであろうが，ちょっと手がつかぬ。……」

【考察】

イミン=ソムのウールド人の来歴については，別稿で詳論したことがあるので[柳澤 2005]，ここでは概略を示すに止めたい。現在のウールド人には，旧ウールドと新ウールドの区別があるが，前者が，文献 a に見える，1732（雍正 10）年にチャハルから移動した人々を基礎とすることは疑いない。彼らはもともと，1720（康熙 59）年に，イルティッシュ河流域で清軍に投降したものである。一方，新ウールドは，大体文献 b～e に見える 3 つのグループに由来すると考えられるが，1750 年代には，他にも相当数の西モンゴル系の人々がフルンボイルを通過しているので，上記 3 グループ以外に起源をもつ人々も含まれるかもしれない[7]。なお，インフォーマントは，新ウールドの起源について，イフミンガンの人々が東へ移動する際に残った人々ではないかとの見解を示しているが，文献 b に見えるミンガドの一群が，イフミンガンと途中まで行を共にしていたことは，当時の檔案からも確認できる。文献 a でウールド人の牧地として指定されている領域は，ほぼ現在のエヴェンキ族自治旗の東半分に相当し，また，文献 b，d に見える Ulan burgasutai 河は，Jadun（扎敦）河の支流であるが，Jadun 河は現在のヤクシ（牙克石）市の境域にある。聞き取り情報をも勘案すれば，ウールド人の元来の牧地は，現在よりもかなり広範囲にわたっていたようである。しかし，文献 h に見るように，清末～民国初年の伝染病によって人口が激減した上，1921 年頃にブリヤード人が移動してくると，ウールド人の牧地の東半一帯が割譲された。近年のイミン炭鉱開発によっても，多くのウールド人が立ち退きを余儀なくされた。その

[7] 文献 e に見える人名と，文献 b～d に見えるものとの食い違いは，e が，乾隆 55（1790）年時点での人名を，誤って乾隆 20 年代の記事にかけてしまったためと推察される。

結果，現在のウールド人の居住地は，イミン=ソム内の狭小な地域に限定されるようになっている。ただし，彼らは現在も全体として固有言語を維持し，エスニック=アイデンティティも明確である。清代～民国期において一貫して独自の旗を構成し，隣接するソロン等と行政上区分されていたことが，こうした状況をもたらした一つの要因ではないかと考えられる。また，各ソムと各オボク（氏族）にそれぞれオボーがあることは（聞き取りによる），それらが社会集団としての意味をなお喪失していないことの表現であろう。

４－３．陳バルガ（ホーチン=バルガ）旗

4-3-1.旗全般

【概況】

1990 年のセンサスによれば，本旗の総人口は 53,593 人で，南部鉄道沿線の人口密度が高く，北部には少ない。民族別に見ると，モンゴル族が 20,315 人で 37.9%，漢族が 28,082 人で 52.39%，エヴェンキ族が 1,867 人で 3.48%，他にダウール，回，満などの民族がいる。1953 年の統計ではモンゴル族が 55.53%，漢族が 31.44%であったので，約 40 年の間にほぼ逆転したことになる。モンゴル族の中には，清代以来の住民であるホーチン=バルガ以外に，1950 年代以降にヒンガン盟，ジェリム盟，ジョーオダ盟から移住してきた人も多く含まれる。人口がもっとも集中しているのはバヤンフレーン鎮（旗政府所在地）で，以下ボルシレー（宝日希勒）鎮，フフノール=ソム，東ウジュル=ソム，西ウジュル=ソム，ハダート=ソムの順である。本旗のエヴェンキ人の大多数は，1917～25 年にエルグネ（アルグン）河北岸のロシア（ソ連）領から移動してきた人々に由来するが，1948～49 年に 20 戸のエヴェンキ人がソロン旗（現エヴェンキ族自治旗）から移住してきた。1990 年には，エヴェンキ=ソムに 1,398 人が住み，もっとも集中している［『陳巴爾虎旗志』102-103, 124, 137］。

【聞き取り調査の記録】

①ボロルタイさん（モンゴル族〔ホーチン=バルガ〕，1921 年生。バヤンフレーン鎮在住）

◆戦前，バヤントホイ〔南屯〕の興安学院で学んだ。

◆陳バルガ各旗の牧地の範囲：

鑲白旗（6 ソム）：ハイラル河の南，西は Modon amji〔現在の新宝力格東ソムの莫達木吉？〕で新バルガ左旗に接し，東はテニヘ河まで。

正藍旗（6 ソム）：ハイラル河の北。東北は三河地方，西は Baraγun üjügür（西烏珠爾）まで，東はテニヘ河まで。

◆氏族（オボク）：全部で 17 ないし 18 のオボクがある。鑲白旗に多いオボクは，エリエグン（ボロルタイさん自身はこのオボクに属する），チプチン，ドーロクシン（Daγulaγčin），ウリヤド（Uliyad），ジルヘメク（Jirkemeg），ハシヌード（Qasinud）。正藍旗に多いオボ

クは，ハラヌード（Qaranud），シャルヌード（Siranud），ホルラード（Qorulaγad），ガプショード（Γabsiγud）。

◆寺廟・オボー：バヤンフレーンに Dasitarčilang という寺があったが，文革のときに破壊された。ハイラルの北にアンバ〔アンバン？〕=オボーがあり，10 年前に祭祀が復活した。旧暦 5 月初 5 日に祀りを行う。旧時，アンバン（大臣）はこのオボーを祀った次の日に，Töb öljeyitü というところにあるソロン・バルガ共同のオボーを祀っていた。エリエグン=オボクのオボーは Degedü ongγun（頭站）というところにあり，7 月に祀りを行う。

◆新バルガの人々とはふだんあまり付き合わないが，結婚は新バルガ人やソロン人との間でもする例があった。

②チェ=ボヤンデルゲル（Ce.Buyandelger）さん（モンゴル族〔ホーチン=バルガ〕，1947 生。バヤンフレーン鎮在住）

◆陳バルガの牧地の範囲：陳バルガは全体で一つの旗であり，鑲白・正藍というのは翼にあたる。鑲白の牧地はハイラルの北，メルゲル河から根河に至る一帯，正藍の牧地はバヤンフレーンから西，ハルガント（哈日干図）=ソムに至る一帯であった。かつてはハイラル河より北はバルガ人だけで，ソロン人と混住していたということはない。西ウジュル=ソムにはエヴェンキ人が 7 世帯ほど住んでいたが，後に移住したものである。

◆氏族（オボク）：

鑲白: エレエグン（正藍にもいる），ハシヌート

正藍: シプシン，ホルラト

◆オボー：ハシヌート=オボクのオボーはメルゲル河にあり，3 月に祀る。1945 年以降祭祀は行っていなかったが，1988 年に復活した。アンバ〔アンバン？〕=オボーとは別に，新しいアイマクのオボーが 3～4 年前に作られた。

◆陳バルガの使うブルガスン=ゲルは，屋根（オニ）の部分はブルガスとホルスを編み合わせ，壁（ハナ）の部分は細いブルガスで覆うものである。

◆陳バルガ人は，この土地に移住してきた当初から農業も行っており，ハル=ボダ（=モンゴル=アム）を作っていた。

◆チチハルにもバルガ人が住んでいるが，漢化している（言葉も漢語になっている）。

③ボヤンデルゲル（Buyandelger）さん（モンゴル族〔ホーチン=バルガ〕，1928 年生。バヤンフレーン鎮在住）

◆陳バルガの牧地の範囲：東はハイラルまで，北（東北）は三河まで。

◆氏族（オボク）自身はホルラト=オボクである。

◆オボー：ホルラト=オボクのオボーはメルゲル河にあり，5 月 5 日に祀る。ハイラルの北のアンバ〔アンバン？〕=オボーは，日本軍が来たときに撤去され，西の Tariyatu というところに移動した。

【文献の記載】

a）「月摺檔」黒龍江将軍 Jorhai の奏摺（雍正 10〔1732〕年 4 月 16 日）⇒4-2-1 参照。

b）「黒龍江通省輿図総冊」:「旧巴爾虎鑲白・正藍二旗人等，南自輝河起，北至固爾畢舎利卡倫止，二百八十五里許；東自庫勒都爾河起，西至西林布爾都泡止四百里許，其間游牧。此二旗共計八百三十戸」。

c－1）『呼倫貝爾志略』「民族」:「陳巴爾虎。一作巴爾呼，外蒙喀爾喀之属部也。……清康熙時征俄，遂自俄境来帰，編入八旗，附打牲部之後，先後駐防黒龍江・斉斉哈爾各城。……雍正十年，由布特哈遷駐呼倫，兵数為二百七十五名，編制索倫八旗以内今以二／旗分立，冬日沿海拉爾河上游，夏則沿海拉爾下游，逐水草而居。此族人性情与索倫相近，而言語稍異。俗不敬喇嘛，子弟在呼倫城習漢文者」。

c－2）同上「戸口」（民国 11 年調査）

族別	旗別	戸数	人口数		
			男	女	総数
陳巴爾虎	正藍旗	425	1,769	1,670	3,439
	鑲白旗	288	1,412	1,364	2,776

d）『黒龍江志稿』巻 26「武備志・兵制・旗兵上」:「〔民国〕八年，陳巴爾虎驟盛，由索倫部族分立，増設総管一員，副総管二員，佐領・驍騎校各十二員，領催四十八名，前峰四名，披甲一百四十四名」。

e）「陳巴爾虎旗テニヘ・ヂルク部落実態調査統計篇」:

第二表　牧戸略歴表

牧戸番号	群別	家族数	種族	出身地	旧身分	姓	本旗ニ移レル年代及理由	従来マデノ移動地、移動理由、家業変遷	本屯ニ来往セル理由	所属佐*
1	豪牧戸	12	陳巴爾虎族	本旗	旧廂白旗第一佐ノ佐領	シプシン	不明			廂白 5
2	〃	27	〃	〃（廂白旗第	平民	オレエゴン	雍正十年，祖先ガ本旗	祖先伝来ノ遊牧ニシテ	本地域附近ハ祖先カラ	廂白 5

				五佐)		(斉)	ニ移住	放牧経路ノ変化モナシ	ノ夏営地ナリ	
3	富牧戸	14	〃	〃	領催	ハラノトハル	不明		本地域附近ハ水ニ便利デ草質ヨク家畜ノ成長ニ適シ病虫少ク、高地デ夏涼シキ為	正藍 2
4	〃	4	〃	〃	平民	オルラト	〃	民国八年マデハ索倫旗ニ属シテイタノデ当時ノ夏営地ハ「モゴーイト」地方デアリ敖保モ墓地モ其処ニアル		正藍 3
5	〃	11	〃	ホロンバイル－チチハル	〃	チプチン	〃	以前ヨリ変化ナシ		鑲白 4
6	〃	10	〃	〃		ハラノト	〃		草質ヨク水ニ近ク便利ナル為	正藍 2
7	中牧戸	8	〃	〃	平民	チプチン	〃	以前変化ナシ		廂白 3
8	中牧戸	13	〃	ホロンバイル→チチハル→本旗	平民	チプチン	雍正十年チチハルヨリ来住。以前ハ索倫八旗ニ属シタルモ民国八年、陳巴爾	三十年前道津放牧経路ヲトル		廂白 5

							虎旗ガ独立。			
9	貧牧戸	5	〃			オルムソ				正藍 2
10	〃	5	〃			ガボシュード				正藍 2
11	〃	3	チベット	チベット	喇嘛	王	喇嘛一般ノモノガスル遊歴、修行ノ為民国十六年ニ来住（三人一緒）	民国十五年「チベット」ヲ出発、直接本旗ニ来ル		正藍 3
12	極貧牧戸上層	7	陳巴爾虎族	不明	平民	シャルヌト	他ノ本旗人ト同ジ	以前カラ同一遊牧経路		正藍 5
13	〃	7	〃	本旗	〃	ハラノト	不明			正藍 2
14	〃	4	〃	〃	平民（警備軍）	ハラノト	〃	本人ノ知レル限リ遊牧経路ノ変化ナシ	アルカリ塩分ノ不足ハアルガ二ヶ月程度ナラ家畜ニ影響ナシ（ソレ以上ハ不可）	正藍 2
15	〃	4	〃	ホロンバイル→チチハル	平民	チプチン	以前ヨリ本旗人	遊牧経路ハ以前ヨリ同ジ		廂白 3
16	〃	7	〃	本旗	〃	ハラノト	不明	〃	夏季ハ涼シク、草質ヨク病虫少キ為	正藍 2
17	〃	5	〃	〃		エルエグン				廂白 6
18	極貧牧	7	〃	〃		ハラノ	不明			正藍 2

	戸下層					ト				
19	〃	3	〃	ホロンバイル→チチハル	平民	チプチン	〃	以前ヨリ遊牧経路同ジ		廂白4
20	〃	7	〃			ウレグン	〃			廂白5
21	〃	4	〃	本旗	平民	ホロラト	〃	「ホンゴルノール」（「ボルゴルジ」「ホルボノール」ノ東方約20粁）ニ春、秋、冬ノ三季放牧、夏季ハ従来ハ「ドントノール」（ハイラル河沿岸、本屯地域ヨリ牛車ニテ三日行程）ニ放牧シタガ、三年前ヨリ下記理由ニテ本地に放牧シヌ	本地附近ニ遊牧スル「ドンドプスルン」ニ被傭サル為	正藍3
22	〃	10	〃	〃	〃（警備軍）	オレイゴン	〃			廂白5
23	〃	3	〃	ホロンバイル→チチハル	平民	チプチン	〃	以前ヨリ変ラズ		廂白5

24	〃	3	〃	〃	〃	チプチン	〃	以前（60年以上）ヨリ変ラズ		廂白5
25	〃	6	〃	本旗	〃	ホルラ	〃	昔カラ変ラズ		正藍3
26	〃	4	〃	〃	〃	シャルノト	雍正十年	二年前マデハ「メリコル」地方ニ遊牧。警備軍ニテ五年間兵役ニ服セリ	親戚関係ト被傭サレル為	正藍6
27	〃	4	〃	〃	〃	チプチン	不明			廂白3
28	〃	4	〃	〃	〃	ホルラトハル	〃		家畜ナキ為本人ノミニテハ生活困難、ソノ為メ知人ニ跟イテ移動	正藍3
29	〃	3	〃			ガブシュト	〃			正藍5

※右端の「所属佐」は，第一表「牧民概況表」より転記。

※本表の「備考」欄には，3，6，13，14，16，22，27の遊牧経路に関する説明がある。また，敖保（オボー）について以下のような記載がある。

＊8，23の敖保は「フジュシュ」（メルゲル河附近）にあり，祭日は七月吉日。

＊10には敖保なし。

＊15の敖保は「ハイラル」河附近の「ゴルヒ」にある。第三佐の「チプチン」だけのもので，祭日は六月上旬吉日。

＊19の敖保祭は七月吉日。

※9は廂白旗第五佐の佐領。

【考察】

ホーチン=バルガの起源と変遷についても，別稿で詳述したことがあるので[柳澤 1999]，ここではごく概略を示すに止める。現在の本旗のバルガ人が，1732（雍正 10）年にブトハから移動した壮丁275名とその家族に起源することは疑いない。彼らは通称「ソロン八旗」

中の鑲白・正藍両旗を構成した。各旗の領域については，聞き取り①と②の情報が大きく食い違うが，文献bにおいて，両旗の牧地の東限が庫勒都爾河（現ヤクシ市の境域を流れる庫都爾河であろう）とされていることを勘案すると，②にいうように，鑲白旗が東部，正藍旗が西部に展開していたのが元来の形であろう。なお，4-1-1 の文献gによれば，鑲白旗には一部ソロン（エヴェンキ）人が含まれていたようである。1917 年以降にロシア（ソ連）領から多数のエヴェンキ人が本旗の東部に移住してくると，バルガ人の多くは西へ移動したらしい（4-2-2 参照）。聞き取り①にいう両旗の範囲は，この移動後の状況を示すのではないかと思われる。旗・ソムと氏族の関係については，文献eに見えるテニヘ=ヂルクの 29 戸のデータを所属旗・ニル別に組み替えてみると，下表が得られる［柳澤 1999 より転載，一部改変］。

旗		鑲白旗						正藍旗					
ソ ム		1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
氏族	シプシン			3	2	4							
	オレエゴン					3	1						
	ハラノト								6				
	オルラト									4			
	オルムソ								1				
	ガボシュード											2	
	シャルヌト											1	1
	王（チベット人）									1			

※氏族名はカナで様々に表記されているが，初出の形のみを掲げ，表記が異なっても同一と見られるものはその項目にまとめた。

氏族ごとに所属旗がきれいに分かれ，同一旗内でも，各氏族が特定のソムに集中する傾向があることは明白であろう。このデータは，特に聞き取り①ともよく対応する。もちろん，文献eにおける旗・ソムは，1919（民国 8）年に陳バルガが 12 ソムに再編された後のものであるが，この改編は，おそらく清代の編制を基礎として行われたものであろう。一方で，文献eは，テニヘ=ヂルク（ほぼ現在のテニヘ=ソムのテニヘ牧場五隊あたりに相当？）一帯に，異なる旗・ソム・氏族に属する人々が雑然と住んでいたことを示している。しかし，この調査は夏営地のものであって，各牧民が，どのようなグループで，年間を通じてどのような経路を移動していたかは，必ずしも詳細には示されていない。また，他人に雇用されたために最近牧地を変えたという例も見られる。従って，このデータのみをもって，当時すでに旗・ソム・氏族のまとまりが崩壊していたと断ずることはできない。聞き取り①～③と文献eでは，各氏族にオボーがあって，共同で祭祀が行われていたことが語られており，また，一氏族の中でも，特定のソムに属する人々だけのオボーがあったという証

言もある。このことは，ソムや氏族が，社会組織としての一定の機能を失っていなかったことを示していよう。

4-3-2.エヴェンキ民族ソム

【概況】

ソムの面積は約 6,000 ㎢で，陳バルガ旗の約半分を占める。総人口 2,700，うちエヴェンキ人が約 1,300。大部分はロシア（ソ連）領から移住してきた通称「ハムニガン」だが，「ソロン=エヴェンキ」も 10～20 戸ほどいる。他にモンゴル，漢，ロシア，朝鮮等の民族がいる。モンゴル族のうち，バルガ人は 5～10 戸ほどで，他は新しく来た農耕モンゴル人である。主産業は牧畜で，家畜数は 16 万頭，五畜がいる。農業も少し行っている。

【聞き取り調査の記録】

①メ=ホリグ（Me.Qoriγ-a）さん（エヴェンキ族，1932 年生），イ=ブティドさん（ホリグ氏の夫人）

◆ハムニガン=エヴェンキのハラとモホン：

バヤギト: マルギト，ガルブン，ハンダガイ，メルゲンというモホンがある（ホリグ氏自身はマルギト=モホン）。

チプチン

ナメール: シャラ，ハラというモホンがある。

アチャクチャンドゥリゴト

ナムナギト

コーノト（夫人はこのハラ）

◆外婚規制：同じハラであっても，近い親戚でなければ結婚可。

◆生活史：1918 年にロシア領のデード=ボールジ（オノン河流域）から移住してきた。その当初から牧畜を行い，モンゴル=ゲルに住んでいた。夏にはゲルをウイスで覆っていた。狩猟も行っていたが，現在は禁止されている（現在ではノムン=ソホル〔地ネズミ？〕とキツネのみ可）。「トゥングース」というのはロシア人の呼び方で，自称ではない。「ハムニガン」はもともとブリヤート人かバルガ人からの呼び方かも知れないが，自称として用いている。ロシア人はエヴェンキ人の毛皮のままの服を「ヤルガイ」と呼んで軽蔑している。

◆宗教・オボー：シャーマニズムが主。いまでもシャーマンがおり，道具が壊れるとホリグ氏が修理している。ロシアにいた時代はキリスト教も一部入っていた。仏教もあり，現在のソム（アルゲンノール）の近くに寺廟があった。ハジにエヴェンキ人全体のオボーがあり，新暦 6 月 18 日に祀るが，各ハラのオボーというものはない。

◆ソロン=エヴェンキについて：ビリュート（「砥石の出るところ」の意味）=ガチャーにホーチン=エヴェンキ（ソロン=エヴェンキ）が住んでいる。ハーハル=モホンがあるが，他

はよく知らない。彼らとは普通モンゴル語で会話する。ホリグさんはソロン=エヴェンキの言葉もわかるが，夫人はまったくわからない。オルゴヤーのエヴェンキ（オロンチョン）とは話が通じる。1964 年，放送局設立のため，どういう言葉を使うかについての会議があったが，結局ソロン語が採用された。

◆バルガ人について：チプチン，ホルラト，シャルヌート，ハルヌートというハラがある。

②セレン（Sereng）さん（エヴェンキ族，1929 年生）

◆ハラ，モホンについて

カラ=ナメート（セレン氏はこれに属する），シャル=ナメート，ボールジ，コーノトがある。コーノトの中にシャル=コーノトがある。

◆外婚規制

親戚でなければ同じハラでも結婚可。

◆6 月にゲルにウイス（白樺）を張っていた。

◆オボー：ノタクのオボーはロシアのウルレング=ノタクにあった。黒山頭の向こう，エルグネ河の対岸の山の上である。ホルゴイ=オボーとも呼んでいた。いまはハジにオボーがある。

◆ソロン=エヴェンキ，バルガ人について：ソロン=エヴェンキとは話せば通じることもある。昔はバルガ人がたくさんいたが，日本統治時代（1943～44 年頃？）に西へ移住した。

③ハダーさん（エヴェンキ族〔ソロン=エヴェンキ〕）[8]

◆ソロン=エヴェンキの人口は現在 20 人強。昔から少なかった。テゲン=ハーハル，アチャクチャイル=ハーハル，アガジョー=ハーハル，ナハタ等がある。

◆モホンが違えば，ハラが同じでも結婚可。

◆父母・兄弟とはソロン=エヴェンキ語で話す。子供たちとはモンゴル語・漢語。夫人はダウール人。ハムニガン=エヴェンキとも話は通じる。

◆昔はフェルトのゲルに住んでいた。

【文献の記載】

a）山根順太郎「満洲国内蒙古地帯に於ける民族分布に就て」：「興安北省索倫旗管内北部地方の海拉爾河上流，テニヘ河一帯にシベリヤ・ツングースが居住している。此の民族は従来現地に於てはシベリヤより移住し来れるツングース族として呼ばれているので茲ではそのままの名称を使用することとし，この民族についての索倫旗公署の牧野調査の報告書の一節を掲げて参考に供することとする。『本旗内のツングース族は所謂シベリヤ・ツングースにして海拉爾河流域及テニヘ河流域に移住せるは民国九年なりと云われている。本族は行政上北努図克第三佐領に属し，これを区別し露西亜化せるものとそれに非ざるものと

8 草刈場で仕事中に短時間インタヴューしただけなので，情報が不完全。

に分類し得る。露西亜化せるものは海拉爾河北岸流域地方に固定生活を営み木材の運搬，乾草の刈取等を家畜の飼養と共に従事す又露西亜化せざるツングース族は主としてテニヘ河流域地帯に游牧す。本族もブリヤート族と同様露西亜語に通ず。宗教は正教徒が大部分なり』と。本民族の人口数については従来概数八〇〇人と称せられてしたが康徳五年十月現在による索倫旗公署調査による旗内各努図克別戸口調査表によれば二八六戸一、一九六人となっている」。

b）『鄂温克族社会歴史調査』〔摘録〕：1918 年，多数のエヴェンキ人がロシア領を離れ，中国に移入した。多くの人は東新巴旗〔新バルガ左旗〕のチャガン一帯に住んでいた。一部は一旦ロシア領に戻ったが，間もなく中国領内に帰ってきた。また，1917 年にブリヤート人と一緒に来たエヴェンキ人もいる。1917 年から 1925 年の間に，陳バルガ旗テニヘ河に到来したのは 70 戸あまりであった。彼らは中国に移住したロシア人と同一地区に住んでいたため，ロシア人の影響を多く受けている。一方，今日シネヘン=ソムに住むエヴェンキ人は，ブリヤート人と雑居したため，多くの人がすでにエヴェンキ語を使うことができなくなっている。ツングース=エヴェンキは，日偽以前はソロン左翼旗の管轄に属していたが，日偽時期に左右両翼を合併して一つの旗（索倫旗）とした。解放後は陳バルガ旗の管轄となった。テニヘ=ソムに属し，その下に「哈吉」と「塔拉甘」の二つの巴嘎〔バク〕があった。1958 年，旗の人民代表大会の決定によって莫爾格河〔メルゲル河〕ソムと改名し，二つの巴嘎は従来のままであった。テニヘのエヴェンキ人の多くはモンゴル式ゲルに住んでいたが，牧畜は定居式で，冬営地に一定の恒久的施設を設けていた。また，富裕層はロシア式の固定家屋を構えていた。氏族には次のようなものがあった[9]。

1. durar “杜拉爾”
2. dɔ iot’ə “道拉奥特”
3. dulik’ietə（杜立給特）
   - mɔk’ɔtçian dulikiet’ə 木克奇恩杜立給特
   - çimsakiet dulikietə (sim sakir)
   - 西母薩給特 杜立給特（西母薩基爾）
   - atç’ik’tç’ian dulikiet’ə (atç’ik’tç’akir)
   - 阿斉克将 杜立給特（阿斉克七阿基爾）
   - pajakir dulikiet’ə 巴亜基爾 杜立給特
   - kajan dulikiet’ə 卡場 杜立給特
   - naunakir dulikiet’ə 那烏那基爾 杜立給特
4. namiət’ə
   - har namiet’ə 哈拉 那妹他
   - ç’iar namiet’ə 西勒 那妹他

[9] 以下の氏族名の発音記号には，誤植と思われるものがいくつかあるが，原書通りに表記した。

5. naxat'a 那哈他 (naunakir)（那烏那基爾）
6. oput'ɔkɔkir 奥布特克基爾 (oslt' ɔkir) 奥斯特基爾 (olt' ɔkiet)（奥勒特給特）
7. malɔkir 瑪魯基爾 (har malokiet'ə)（哈拉 瑪魯給特）
8. utsəŋ tsolt' ɔt'ə 烏者恩 造魯套特
9. park'ien kin 巴拉給 金
10. tɕ'iputɕ'i nut'ə 斉布斉奴特
11. k'ɔnok'ət'ə 靠閙克特
12. pajaokir
    - jɔkɔr pajiakir 要靠勒 巴亜基爾
    - əut'ə pajakir 我烏特 巴亜基爾
    - ərkə pajakir 我勒克 巴亜基爾

c）沈斌華主編『鄂温克族経済簡史』(63)〔摘録〕:

◆1948～49 年，索倫旗から 20 戸のエヴェンキ人が移入し，もともとテニヘ河・メルゲル河一帯に住んでいた 50 戸あまりのエヴェンキ人と合同でハジ（哈吉）生産隊を創建した。

◆1949 年 10 月，テニヘ河，ムングンチョロー（孟根楚魯），ハイラル河，ビリグト（畢力古図）等の土地のエヴェンキ族と他の民族を合わせて，テニヘ（特尼河）=ソムが成立した。

◆1952 年 5 月，テニヘ=ソム人民政府はメルゲル河畔のナジ（那吉）に移り，同年 10 月に莫爾格河〔メルゲル河〕ソムと改名した。1958 年にエヴェンキ人民公社となり，1984 年の政社分設によって，エヴェンキ=ソム人民政府が成立した。

d）孛・蒙赫達賚編著『鄂温克蘇木的鄂温克人』(25-29，32-33，38-41，46-50)〔摘録〕:

◆1938 年，興安北省の決定により，索倫旗の南屯・莫合爾吐・特尼河・莫爾格勒河の 4 ソムを，テニヘ河を境として二つに分け，後二者を陳バルガ旗に編入した。陳バルガ旗では 2 ソムを合併して特尼河ソムとした。

◆さらにその後，テニヘ・メルゲル一帯のエヴェンキ人は，索倫旗に属する大興安嶺山麓の沙巴爾吐・莫蓋吐・烏魯西・烏蘭崗等の土地に強制移住させられた。日本が投降した 1947 年以後になって，彼らはようやく元の土地に戻ることができた。

◆1948 年，テニヘ河・メルゲル河両岸に散居していたエヴェンキ人はメルゲル（莫日格勒）=ソムを組織し，その下に哈吉，塔拉甘の両ガチャー（嘎査）を設けた。

◆1949 年 10 月，陳バルガ旗人民政府は，テニヘ，ムングンチョロー〔孟根楚魯〕およびハイラル河に沿って遊牧していた 20 戸あまりのエヴェンキ人，ビルト〔畢魯図〕に集住していた 10 戸あまりのエヴェンキ人，九家屯の 20 戸あまりのロシア僑民と 20 戸あまりの漢族住民を組織し，共産党の指導下の最初の人民政権であるテニヘ〔特尼河〕=ソム人民政府が成立した。

◆1952 年 5 月，テニヘ=ソムはナジ（那吉）に移動した。

◆1953 年 10 月，テニヘ=ソムで第一回人民代表大会が開かれ，選挙の結果，エヴェンキ民族ソム人民政府が成立した。ただし，そこに至る過程において，ロシア領から来たエヴェンキ人とソロン人は，ともに自分たちこそが真正のエヴェンキであると主張し，互いに非難しあったので，まとめるのが大変だったという。

【考察】

当地のエヴェンキ人が，ロシア十月革命後にオノン河・アルグン河一帯から移住してきた人々に由来することは明らかである。しかし，民国期～満洲国期の文献は，移住直後の彼らの状況について，伝えるところが非常に少ない。とくに，現在のエヴェンキ=ソムの境域は，もともとソロン八旗（1919 年から陳バルガ旗）の鑲白旗に属していたはずだが，エヴェンキ人の到来と先住者の関係については，管見の限り，どの文献にも触れられていない。その後 1950 年代に至るまでの行政区分の変遷や人の移動についても，ａ，ｂを含む諸文献の記載はごく簡略で，要領を得ない。そこで，近年の著作である，文献ｃ，ｄによって補うと，上のようになる。しかし，文献ｃ，ｄの記載は，文献ｂとは必ずしも噛み合わないし，ｃとｄの間でも，大筋は一致するものの，食い違うところもある。テニヘ=ソムが陳バルガ旗の管轄となった時期について両様の説があるし[10]，ともに 1948～49 年頃に成立したというハジ生産隊，メルゲル〔莫日格勒〕=ソム，テニヘ〔特尼河〕=ソムの三者の関係もよくわからない[11]。また，テニヘ=ソムが莫爾格河〔メルゲル河〕ソムと改名した時期，これらとエヴェンキ［民族］ソムという名称との関係も不分明である。それぞれの情報がどのような根拠に基づくのか，さらに検証を重ねる必要があろう。ただし，現在のエヴェンキ民族ソムは，1953 年をソム成立の年として記念している。

聞き取りによって得たデータも，こうした行政上の変遷の実相に光を当てるものではないが，少なくとも，文献からは窺い知れない二つのことを明らかにすることができた。第一は，ロシア領からエヴェンキ人が移住してきた当時は，一帯にバルガ人が多く住んでいたが，後に西へ移動したということである。このことは，4-3-1 の聞き取り②～③および文献ｅにおいて，バルガ人のいくつかの氏族のオボーがメルゲル河流域にあるとされていることとも符合する。本ソム調査の際，筆者もエリエグン=オボクのオボーといわれるものを実見したが，その付近には現在バルガ人は住んでいない。ただし，バルガ人の移動時期について，聞き取り②は日本統治期のこととするが，4-3-1 の聞き取り①は，1919 年に陳バルガ旗がソロン八旗から独立した頃のこととする。第二に，現在でも，本ソム内に，少数ではあるが明確に弁別可能な集団として，ソロン=エヴェンキと呼ばれる人々が存在するということである。ただし，彼らが清代の鑲白旗第 1 ソムに含まれていたというソロン人（4-3-1 の聞き取り①および文献ｇ）に遡るのか，それとも 1948～49 年にソロン旗から移入したという約 20 戸の人々に由来するのかについては，現在のところ不明である。文献ｄは，1950

10 これに関しては，4-2-2 の聞き取り①からすれば，新中国成立後と見る方が正しいようである。
11 莫日格勒ソムは非共産党系，テニヘ=ソムは共産党系組織で，一時期並存していたとも考えられる。

年代に二つのグループが融和していなかったことを伝えている。現在では，積極的な対立はないようだが，やはり相互に別個の集団と認識していることが窺われる。

5．結　論

第３章および第４章で紹介した聞き取り調査の記録と，それに基づく考察によって，どのようなことが明らかになったといえるだろうか。もちろん，聞き取りで得られた情報は，いわば雑多なものの寄せ集めであり，全体をきれいに整理して明確な像を描き出すことは非常に難しいのであるが，この際細部には目をつぶって，大きな視野から，民族集団の変容・再編をめぐるいくつかの傾向を抽出してみたい。

まず，すべての調査地を通じて認められる顕著な事象は，現在の各少数民族の民族的帰属が，ほぼ例外なく，清朝統治下において付与されていた「民族」の区分と何らかの意味で対応しているということである。たとえば，ダウール，満（満洲）などは，ほぼ清代の区分そのままである。バルガ，ウールドは現在ではモンゴル族に包含されているが，清代においても，バルガやウールドはモンゴルの下位区分と捉えられていたのだから，清代の枠組みが継承されていることに変わりはない。かつ，モンゴル族に包含されていても，彼らは言語やアイデンティティの面で，それぞれある程度のエスニックな実体を残している。元来，清代の八旗制下における「民族」の区分は，おおむね既存のエスニシティを基礎にしていたと考えられるので，これはある意味で当然のことであろう。しかし，たとえば中華民国期・満洲国期の文献を見ると，特に嫩江一帯では，八旗制下で弁別されていた「民族」の区別がかなり曖昧になっており，現在の民族区分は，新中国成立後の調査を通じて，諸々の民族集団がいわば「再発見」された末に，あらためて確定したものである。こうした「再発見」の結果が，清代の史料から知られる枠組みと大略一致しているとすれば，それは，清代の「民族」区分が，かなり強固な実体を備えていたことを示していよう[1]。なお，エヴェンキの場合，ロシア（ソ連）領からあらたに移住してきたグループが，1950 年代に清代以来のソロンと統合されて，エヴェンキ族と認定されたわけであるが，陳バルガ旗における実態を見ると，新来のハムニガン系エヴェンキとソロン系エヴェンキとの間には，今日でも明確なエスニシティの差異が認められ，清代の「民族」区分の実質性がなお失われていないことを示す好例となっている。

清代の「民族」区分は，いわば各民族集団の初期設定をなしているわけだが，一方で，行政上の区分も，今日に至る集団の「まとまり」のありようと密接な関わりをもっている。今回調査対象とした地域は，清代の行政区分からいうと，1)チチハル駐防八旗（富裕県登科村・三家子村・五家子村？，斉斉哈爾市高頭村），2)ブトハ八旗（訥河市索倫村，莫力達瓦ダウール族自治旗，阿栄旗査巴奇エヴェンキ族郷），3) フルンボイルのソロン八旗（エヴェンキ族自治旗，陳バルガ旗），4) ジャサク旗（富裕県大泉子村）の４つの類型に分かれるが，

[1] ただし，別稿で言及したように，「オロチョン」という呼称に関しては，清代にもしばしばその適用範囲をめぐる動揺が見られ，現在の民族区分ともきれいには対応しない［柳澤 1997］。しかし，今回はオロチョンに対する実地調査を行っていないので，詳論は控える。

いずれの場合も，清代以来の行政上の位置づけ，たとえば旗・ニルの区分は，何らかの形で記憶されていることが多い。たとえば，登科村や高頭村においては，旧鑲黄旗第3ニル，正黄旗第5ニルという具合に，ニルまで特定可能である。索倫村と査巴奇では，ニルまでは特定できないものの，それぞれブトハ正紅旗と鑲白旗に属していたことは記憶されている。フルンボイルにおいても，少なくともエヴェンキ族自治旗では，各地のエヴェンキ人が元来どの旗に所属していたかは，大体明確なようである。

こうした行政上の区分は，当然ながら，多くの場合，地理的な区分と対応している。従って，地域によっては，旧来の旗やニルが，単に記憶に残っているばかりでなく，少なくとも近年まで，社会統合の上で一定の役割を果たしていたことが看取される。たとえば，索倫村一帯では，7つのエヴェンキ人の集落が地縁的結合を形成していたようであるが，この7集落を1人のジャンギン（章京）が統括していたというのであるから，元来1つのニルであったと推察される。登科村の場合は，確証はないものの，もっと単純に，1つの集落がほぼ1ニルに対応するのではないかと思われる。また，陳バルガ旗では，各旗のオボー，各氏族のオボーの祭祀が行われていた。旗のオボーはともかく，氏族のオボーは，一見すると行政区分とは別の原理に基づくようだが，満洲国期の史料（4-3-1の文献e）によれば，あるオボーは，当該氏族のうち，特定の旗に属する人々だけが祭るものであったという。氏族の統合が，行政上の統合と別個にではなく，相互に結びついて機能していた例といえる。

行政区分をベースとした社会統合と，「民族」区分との関係は，場合によってさまざまである。両者が一致していれば話は単純で，フルンボイルのウールドはそれに近い例である。こうした場合，当該集団の「まとまり」は，自明のことながら，もっともよく維持されるであろう。しかし，このような例はむしろ稀で，実際には，種々の要因によって両者の間にずれが生じ，それが集団の「まとまり」に複雑な影響を及ぼすことが多く見られる。エヴェンキ（ソロン）を例にとってみると，1732（雍正10）年にブトハからフルンボイルに移駐した人々は，ブトハの各ニルから抽出されたもので，移動した人々と残留した人々の間に，元来エスニシティ上の差異はまったくなかったはずである。また，民族名称の上では，両者ともその後一貫してソロンと呼ばれている。しかし，現実には，地理的な隔離と環境の相違，そして行政上の分離によって，両者の間には次第に文化的な差異が生じた。たとえば住居についていうと，エヴェンキ族自治旗西部のホイ=ソムには，いまでもモンゴル式ゲルに住む人がいるし，今回調査した東部のバヤンチャガン=ソムでも，最近までゲルが使われていた。ところが，嫩江流域のエヴェンキ人の間には，モンゴル式ゲルはまったく見られないし，遠い昔はともかく，人々の記憶に残る限り，過去においても使われたことがないという。大興安嶺両麓のエヴェンキ人はいまでは互いにほとんど往来していないようで，民族集団としての分化が始まっていると見てよいであろう。一方，ホーチン=バルガ（陳バルガ）は，来歴からいっても，言語等から見ても，本来ソロンとはかなり離れたグループである。しかし，彼らは17世紀末から1732年まで，ほぼ40年にわたって嫩江流

域でソロンと隣接して生活した後，同時にフルンボイルに移動して，同じ旗・ニルの中で密な接触を保った。その結果，相互に同化するには程遠いにせよ，一部の文化要素において接近が見られるようになった。たとえば，フルンボイルのソロン系エヴェンキ人は，夏季にゲル全体を葦で覆うが，バルガ人も，少なくとも屋根の部分は葦で覆うことが多い。一方，陳バルガ旗の西隣に住むシネ=バルガ（新バルガ）の人々は，元来ホーチン=バルガと同一の集団だったはずであるが，ゲルは常にフェルトで覆い，葦は用いない。つまり，起源がどこにあるかはともかく，葦のゲルは，ソロンとホーチン=バルガの接触に伴って普及したものと見られるのである［柳澤 1999］。こうした行政的・地理的条件によって，「民族」区分が完全に更新された例として，フルンボイルのオロンチョン（オロチョン）を挙げることができよう。1732 年にブトハから 3,000 壮丁がフルンボイルに移動した際，その中に 359 名の「オロンチョン」が含まれていたことは檔案に明記されているが，その後間もなく，この呼称は，フルンボイル関係の史料にはほとんど見えなくなってしまう。直接の証明はできないが，おそらく，オロンチョンと呼ばれていた人々は，新しい環境の下で，急速に他集団（おそらくソロン）に同化したために，呼称自体が意味をもたなくなってしまったものと考えられる。

いまひとつ，「民族」と行政区分とが多少複雑に交錯している例を挙げよう。登科村のダウール人，三家子村の満洲人（満族），五家子村のクルグズ人は，互いに近接して居住しているが，文化面では特にダウールと満洲の間に共通要素が多く[2]，意識の上でも相互に顕著な親近感が認められる。一方，クルグズ人は，ダウールに対してやや疎遠・敵対的な感覚をもち，居住地がやや離れているにも関わらず，むしろイフミンガンのモンゴル人への親近感が強い。クルグズ人内部でのコミュニケーションの手段として，固有のクルグズ語よりモンゴル語が普及していることも注目される。五家子のクルグズ人の清代における行政上の位置づけが明白でないために，はっきりしない点は残るが，「民族」呼称や行政上の区分を超えて，もとから駐防八旗の系列に属していた人々の結合と，西モンゴル方面からの移住という歴史的背景を共有する人々の結合とが，相互に対置される形となっている。

以上のように，「民族」区分という初期設定と，行政的・地理的区分をベースとした統合は，いわば縦糸と横糸として，それぞれの集団のありようを規定していたのであるが，

こうした清代以来の社会統合が，清末以降の近百年間にどのような変動を蒙ったかを見ると，そこには地域によっていくつかの異なったパターンが認められる。

清末以降の土地開放，移民流入の影響をもっともダイレクトに受けたのは，今回の調査地の中では，旧イフミンガン旗であろう。3-2-4 で述べたように，同旗は元来人口が少なかった上に，清末の比較的早い時期から，わずかな酌留地を除いて徹底的に開放されたため，先住のウールド系モンゴル人は，他地域への移動または他民族への同化によって，現在では民族集団としては事実上消滅している。今回の調査では訪れることができなかったが，同旗の北のネメル河一帯においても事情は類似しており，旧ブトハ正白旗のダウール人は，

---

[2] たとえば，書写言語としての満洲語の近年までの残存，関帝廟（老爺廟）の祭祀等が挙げられよう。

嫩江以西に移住するか，他民族に吸収されるかして，現在では独自の集団として弁別することができない。

こうした例と比べると，富裕県西部の嫩江本流に近い一帯では，登科村，三家子村など，旧駐防八旗所属の人々による民族別村落が，今日に至るまで安定的に存在している。この一帯では，清末以降も，おそらく交通事情等の関係で，大規模な丈放が実施されなかった。満洲国期の文献では，当該地区の治安が比較的よく，村落規模が大きいことが述べられる一方で，民族状況はごく曖昧にしか認識されていない。それは，交通不便な上に，「匪賊」の横行する地域と隣接していたため，行政による把握が不十分で，いわば盲点になっていたからである。しかし，多分に推測になってしまうが，この地域で旧来の民族社会が維持された理由として，駐防八旗の社会的結合がもともと密で，移民流入による構造変動に耐える力が強かったことも，考慮してよいのではなかろうか。場所は異なるが，斉斉哈爾市の高頭村では，バルガ人の言語や文化が最近までかなりよく保たれ，現在もその一端が残っている。都市近郊で，かつ制度上の民族自治の対象外であるにもかかわらず，こうした現象が見られる原因として，やはり駐防八旗の社会的紐帯の強さ，都市に近いため逆に大規模な丈放を免れたことなどが想定でき，富裕県西部と通底するものが感じられる。

これに対して，富裕県の北に隣接する訥河市索倫村の場合は，エヴェンキ人のエスニックな実態がなお残存してはいるものの，元来 1 ニルを形成していたと見られる 7 つの村落のうち，周辺部の小村は消失し，中心村落だけに一定のエヴェンキ人人口が残る形となっている。類似の例は阿栄旗でも見られ，アロン河に沿って多数存在していたエヴェンキ（ソロン）人の集落は，移民流入に伴って次第に数を減じ，査巴奇など数箇所を残すのみとなった。一方で，一帯には，近隣の他の水系から追われたエヴェンキ人の流入も見られる。大体似たような状況は，莫力達瓦ダウール族自治旗でも認められる。現地調査は行っていないが，尼爾基鎮での聞き取りと文献［『達斡爾族村屯録』；毛艶，毅松 2004］によれば，同旗一帯では，嫩江左岸（東岸）のネメル河一帯から追われたダウール人たちが，江西に移動して，元来江東にあったのと同名の集落を築いて定着する例が，かなり普遍的に見られるようである。先住民族の人口が特定地域に集中していくというこのような現象が，特に旧ブトハ八旗地帯に多く見られることについては，もちろん，土地開放に伴う移民の流入がそれだけ激しかったこともあろうが，それ以外に，ブトハ八旗地帯では，もともと人口の土地への定着性が低かった，つまり流動性が高かったという理由も想定できそうに思える。ただ，このことに関しては，まだ根拠を固めたとは言いがたいので，今後の課題としたい。

フルンボイルでは，移民流入の影響は，嫩江一帯に比べて限定的である。満洲国時代の『満洲帝国内旧蒙古地帯民族分布図』でも，漢人移民は鉄道沿線などに局地的に見られるのみである。現在でも，漢人人口は絶対数としては多いものの，ハイラルや各旗の中心鎮，あるいはイミン炭鉱のような特別の地域に集中していて，各旗の内部に満遍なく浸透するには至っていない。こうした条件の下で，フルンボイルにおいては，清代以来の「民族」

と行政の枠組みが，嫩江一帯よりもさらに明確に，大体そのままの形で残っている。ただし，忘れてならないのは，ロシア領からのあらたな集団の移入である。現在，ブリヤード人はエヴェンキ族自治旗において，ハムニガン系エヴェンキ人は陳バルガ旗において，それぞれかなり広大な地域を占めており，彼らの移入に伴って，先住のウールド，ソロン，ホーチン=バルガの各集団に一定の人口流動が起こったようであるが，その詳細な状況はいまのところ明らかにし得ていない。また，内モンゴル東南部からのいわゆる「外旗モンゴル人」の流入についても，その影響が注目されるところであるが，やはり今後の課題である。

以上，本研究で得られた知見を大雑把に整理してみたが，もちろん，まだまだ不十分な点が少なくない。何よりも，ごく限られた地域の調査で得られたデータをどこまで一般化できるのか，という問題があろう。また，序説でも触れたように，本研究は結局のところ，清代前期から現在に至る諸民族集団の再編・変容のプロセスの中で，いわば入り口と出口の部分のみを押さえたに止まり，その中間，つまり 18 世紀後半から 19 世紀末に至るまでの状況については，具体的な検討をほとんど行っていない。もちろん，直感的には，その間にはあまり劇的な変動はなかったであろうという見通しをもっているわけであるが，だからといって，きちんと調べずに済ませてよい問題ではない。また，清末以降の土地開放と移民流入に伴う人口流動・社会変動は，今日の諸民族集団のありように決定的な影を落としている要因の一つであるが，これに関しては，個別の箇所ではある程度詳しく言及したものの，全体像を把握するにはまだ程遠いと言わざるを得ない。次のステップでは，調査地点をもう少し増やしてより幅広いデータを収集すると同時に，「黒龍江将軍衙門檔案」，中華民国期・満洲国期の文献等から網羅的に情報を拾い出して，空間の上でも，また時間の上でも，より全面的な像を提示したいと考えている。

【文献一覧】

※ 日本文（満洲国期に編纂された漢文文献を含む），中国文，その他に分け，著編者が個人名のものについては著編者名，機関編のものについては書名を基準として，アルファベット順に配列した。

《日本文》

萩原守 2000：「中国内蒙古、フルンボイル盟の民族・遺跡調査（1999 年 8 月）」『神戸商船大学紀要』（第一類，文化論集），49

橋本重雄 1943：「興安北省索倫旗のオロット人に就て」『蒙古研究』5-3

畑中幸子，原山明（編）1991：『東北アジアの歴史と社会』名古屋大学出版会

上牧瀬三郎 1940：『ソロン族の社会』生活社

胡振華原著（西脇隆夫編訳）1986：「黒龍江省富裕県のキルギス族とその言語の特色」」『島根大学法文学部紀要 文学科編』6-1

ウェ・ア・コルマゾフ（南満洲鉄道株式会社庶務部調査課編）1930：『巴爾虎（呼倫貝爾）の経済概観』大阪毎日新聞社，1930

楠木賢道 1995：「チチハル駐防シボ佐領の編立過程」石橋秀雄編『清代中国の諸問題』山川出版社

楠木賢道 1994：「康熙三〇年のダグール佐領の編立」『松村潤先生古稀記念清代史論叢』汲古書院

松室大佐（扎蘭屯興安警察局複製）1934：『黒龍江省呼倫貝爾ニ於ケル原住民族ノ分布』

松浦茂 2006：『清朝のアムール政策と少数民族』京都大学学術出版会

松浦茂 1986：「ヌルハチ（清・太祖）の徙民政策」東洋学報 67-3･4

酒井二郎 1935：「呼倫貝爾民族史」『蒙古時報』創刊号

承志 2001：「清朝治下のオロンチョン・ニル編制とブトハ社会の側面」『東洋史研究』60-3

周藤吉之 1944：『清代満洲土地政策の研究：特に旗地政策を中心として』河出書房

竹村茂昭 1941：「莫力達瓦旗地方土地沿革」『蒙古研究』3-2

山根順太郎 1941：「斉斉哈爾八旗の沿革」『蒙古研究』3-5･6

山根順太郎 1940「満洲国内蒙古地帯に於ける民族分布に就て」『蒙古研究』2-3

柳澤明 2005：「フルンボイルのウールド（Ögeled）人の来歴について」『早稲大学モンゴル研究所紀要』2

柳澤明 1999：「ホーチン・バルガ（陳巴爾虎）の起源と変遷」『社会科学討究』44-2

柳澤明 1997：「清代黒龍江における八旗制の展開と民族の再編」『歴史学研究』698

柳澤明 1994a：「いわゆる「ブトハ八旗」の設立について」『松村潤先生古稀記念 清代史論叢』汲古書院

柳澤明 1994b「乾隆 7 年におけるソロン八旗のブトハへの再移住について」『アジアにおける国際交流と地域文化』(平成 4-5 年度科学研究費補助金（総合研究Ａ）研究成果報告書，課題番号 04301046，研究代表者：長澤和俊)
柳澤明 1993a「新バルガ八旗の設立について：清朝の民族政策と八旗制をめぐる一考察」『史学雑誌』102-3
吉田金一 1984：『ロシアの東方進出とネルチンスク条約』近代中国研究センター（東洋文庫）
蒙政部調査科 1936：『阿栄旗事情』
嫩江県公署『嫩江県概覧』（康徳三〔1936〕年十月）
国務院興安局調査科 1940：『郭爾羅斯前旗／郭爾羅斯後旗／杜爾旗特旗／依克明安旗 土地調査報告書』
国務院興安局『興安北省 新巴爾虎左翼旗／索倫旗／陳巴爾虎旗 実態調査統計篇』〔「陳巴爾虎旗テニヘ・ヂルク部落実態調査統計篇」を含む〕
興安局外務省文化事業部 1932：『黒龍江省ニ於ケル風土及土著族ニ関スル調査』
依安県公署総務科編『依安県一般状況』（康徳二〔1935〕年六月末現在）
満洲事情案内所編 1937：『満洲国の現住民族』南満洲鉄道株式会社
（莫力達瓦旗公署）1936：『莫力達瓦旗事情』
国務院興安局調査科 1940：『満洲帝国内旧蒙古地帯民族分布図』
訥河県公署総務科『訥河県一般状況』（康徳二〔1935〕年六月末日現在）
南満洲鉄道株式会社経済調査会（和田耕作）1935：『訥莫爾河／呼裕爾河 流域地方経済事情』南満洲鉄道株式会社
富裕県公署『龍江省富裕県一般状況』（康徳三〔1936〕年十二月末日現在）
満洲帝国地方事情大系刊行会（古田伝一）1936：『龍江省富裕県事情』

《中国文》
程廷恒，張家璠（纂）2003：『呼倫貝爾志略』海拉爾，内蒙古文化出版社〔原書は 1923 序〕
胡日査 2001：「16 世紀末 17 世紀初嫩科爾沁部牧地変遷考」『中国辺疆史地研究』2001-4
金啓孮 1981：『満族的歴史与生活：三家子屯調査報告』哈爾賓，黒龍江人民出版社
劉殿貴，李彤之（主編）1987：『阿栄旗情』哈爾賓，黒龍江人民出版社
柳澤明 1993b：「関于呼倫貝爾八旗的設立」『慶祝王鍾翰先生八十寿辰学術論文集』瀋陽，遼寧大学出版社
毛艶，毅松（主編）2004：『達斡爾族：内蒙古莫力達瓦旗哈力村調査』昆明，雲南大学出版社
孛・蒙赫達賚（編著）2003：『鄂温克蘇木的鄂温克人』海拉爾，内蒙古文化出版社
呉守貴 2000：『鄂温克人』海拉爾，内蒙古文化出版社
沈斌華（主編）1995：『鄂温克族経済簡史』呼和浩特，内蒙古大学出版社
沈斌華，高建綱 1991：『鄂温克族人口概況』呼和浩特，内蒙古大学出版社

波・少布，何日莫奇 2001：『黒龍江蒙古部落史』，哈爾賓，哈爾賓出版社
波・少布 1999：「黒龍江省巴爾虎蒙古考述」『北方文物』1999-2
呉元豊 2004：「黒龍江地区柯爾克孜族歴史満文檔案及其研究価値」『満語研究』2004-1
陳巴爾虎旗史志編纂委員会編 1998：『陳巴爾虎旗志』海拉爾，内蒙古文化出版社
斉斉哈爾市政協文史資料委員会，莫力達瓦達斡爾族自治旗政協文史資料委員会編 1993：『達斡爾族村屯録』斉斉哈爾
内蒙古自治区編輯組 1985：『達斡爾族社会歴史調査』呼和浩特，内蒙古人民出版社
内蒙古自治区編輯組 1986：『鄂温克族社会歴史調査』呼和浩特，内蒙古人民出版社
鄂温克族自治旗志編纂委員会 1997：『鄂温克族自治旗志』北京，中国城市出版社
黒龍江省地方志編纂委員会 1998：『黒龍江省志』第 56 巻「民族志」哈爾賓，黒龍江人民出版社
呼倫貝爾盟民族事務局編 1997：『呼倫貝爾盟民族志』呼和浩特，内蒙古人民出版社
呼倫貝爾盟地方志辦公室編 1986：『呼倫貝爾盟情』呼和浩特，内蒙古人民出版社
莫力達瓦達斡爾族自治旗史志編纂委員会 1998：『莫力達瓦達斡爾族自治旗志』呼和浩特，内蒙古人民出版社
燕京、清華、北大 1950 年暑期内蒙古工作調査団編（呼倫貝爾盟民族事務局整理）1997：『内蒙古呼納盟民族調査報告』呼和浩特，内蒙古人民出版社
柳成棟整理 1989：『清代黒龍江孤本方志四種』哈爾賓，黒龍江人民出版社〔同治「黒龍江通省輿図総冊」を含む〕

《その他》

Badai, Altanorgil, Erdeni (emkidken tayilburilaba) 1992：*Oyirad teüke-yin durasqal ud*〔衛拉特史迹〕．烏魯木斉，新疆人民出版社〔Ögeled ayimaγ-un tobci teüke を含む〕
Dalangγud Güberi 1989. *Olan mongγulčud-un uγ eki-gi temdeglegsen bičig orusiba*〔諸蒙古始祖記〕. 北京，民族出版社
Hu Zhen-hua & Guy Imart 1987：*Fu-yü Gïrgïs: A tentative description of the easternmost Turkic language*. Bloomington (Indiana), Indiana University Research Institute for Inner Asian Studies
Избрант Идес и Адам Бранд 1967：*Записки о Русском посольстве в Китай (1692-1695)*. Москва